

# 長崎っ子に贈る50の話

この本を手に取ってくださったすべての方々へ

あこがれや志を持っていると、人は、輝きながら生きていくことができます。まだ見ぬ遙かなものや、まだ在らぬ未来の私に思いを馳せ、自らの可能性を磨いていくことができるからです。

あこがれや将来への志を持つには、「あの人の生き方に胸を打たれた」「この人の思いに共感した」など、心の中に、あこがれや志の種を蒔くことが大切です。

種は、いつ蒔かれるのでしょうか。

それは、「なりたい人」や「知りたいこと」など、あこがれや志の対象と出会えたときです。

出合いの形は、人それぞれです。ただ、共通して言えることもあります。それは、立ち止まったままで叶う出合いはないということです。

今の自分から一步踏み出さなければなりません。その一步のひとつが、読書であり、読書を通じた様々な人々の生き様との出合いなのです。

「長崎っ子に贈る50の話」は、そのような出合いを日常のものとする一冊として、伸びようとしている子どもたちの一步を応援するために発刊しました。

執筆者は、いずれも本県に縁のある方ばかりです。

児童・生徒の皆さんには、ぜひ読んでいただきたいと思えます。一つ一つの話に触れることで、今まで気づかなかった自分の可能性を見つけることができるものと確信します。

保護者の皆様や先生方には、家庭での読書や学校での教育活動などで、活用していただきたいと思えます。そして、子どもたちに、ご自身のあこがれや志を語るきっかけにしたいだけだと思います。子どもたちがあこがれや将来への志を抱くうえで、最も身近なモデルは、保護者の皆様や先生方なのですから。

最後になりますが、「長崎っ子に贈る50の話」の執筆・編集に、ご尽力をいただいた関係各位に深く感謝の意を表しますとともに、本著が県内すべての子どもたちに広く親しまれ、あこがれに満ち、高い志を抱く「心豊かな長崎っ子」が育まれることを心から願っております。

平成二十一年三月

長崎県教育委員会教育長

寺田 隆士

主として小学校を対象

《目次》

16	ノーベル化学賞に下村さん	.....	5	9	(希望・勇気・努力)
15	さんこの刻をかぞえて	.....	4	7	(勤勉・努力／自然愛)
14	涙を忘れさせた友情	.....	4	5	(思いやり・親切／信賴・友情)
13	ジャガ芋	.....	3	9	(勤勉・努力／家族愛)
12	長崎のチャンポン	.....	3	7	(郷土愛)
11	おはようおじさん	.....	3	3	(礼儀／郷土愛)
10	僕、スナメリ	.....	3	1	(自然愛／郷土愛)
9	スーパーキャッチャー城島健司	.....	2	5	(勤勉・努力／個性伸長)
8	おじいさん、おばあさん	.....	2	3	(家族愛)
7	おにくがいつぱい	.....	1	9	(家族愛／思いやり・親切)
6	わたしだけのひみつ	.....	1	7	(勇気／思いやり・親切)
5	弟が生まれた日	.....	1	3	(家族愛／生命尊重)
4	横むぎ地ぞう	.....	1	1	(反省・正直誠実)
3	はぎわら	.....	7		(節度節制・自律・思慮)
2	たまごやき	.....	5		(家族愛)
1	よろこんではたらく子ども	.....	1		(勤労)

主として小学校高学年から中学校を対象

33	空	………	1	4	3	(家族愛／尊敬・感謝)
32	レギュラーになれなくても、 サッカー部の三年間を人生で生かせ	—— 小嶺忠敏 ……	1	4	1	(弱さの克服／希望・強い意志)
31	お米の海	………	1	3	7	(真理愛・理想の実現)
30	もてなしの心	………	1	3	5	(思いやり・親切／郷土愛)
29	私も誰かの力になれる	………	1	3	1	(真理愛・理想の実現)
28	やわらかなまつすぐ	—— 藤川幸之助 ……	1	2	7	(向上心・個性伸長)
27	その時、私は… ／キラキラ輝くステキな人に	—— 安達かよ ……	1	2	1	(真理愛・理想の実現)
26	水の伝言	—— 高塚かず子 ……	1	1	9	(自然愛／畏敬の念)
25	人間は生き返ると信じている子供たち	—— さだまさし ……	1	1	3	(生命尊重／家族愛)
24	ゆれながら伸びゆく者	—— 山崎滋夫 ……	1	0	3	(真理愛・理想の実現)
23	異国でのホームステイで	—— 岡部まり ……	1	0	1	(愛国心／国際理解)
22	お父さん	………	9	7		(家族愛／真理愛・理想の実現)
21	学校大好き！	………	9	3		(信頼・友情／愛校心)
20	最初の発見者	—— たかしよいち ……	8	7		(希望・勇気・努力)
19	音楽との出会い	—— 大島ミチル ……	8	1		(個性伸長／希望・努力)
18	命つてすごいー頭だけのカブトムシー	………	7	3		(生命尊重／畏敬の念)
17	かけがえのない「いのち」を 輝かせて生きよう	—— 立岡誠 ……	6	3		(生命尊重／希望・勇気・努力)

主として中学校から高等学校を対象

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
たったひとつの歌でさえ	十八歳のあなたへ	一世紀を生きて	志(こころざし)	長崎ゆめ総体・長崎が君の鼓動で熱くなる	右手一本、竹刀にかけた青春	地震、雷、火事、親爺	独創的な写真を求めて	伝えたい「ありがとう」	スクール・ギャップ	高校生のあなたへ	食育の事―食べる事とは―	せんだんの実のように	「お地藏様の市」に学ぶ	一枚の紙切れ	いとし子よ	一冊の文庫本
市川森一						遠藤周作	栗林慧			平田徳男	脇山壽子	竹下哲			永井隆	青来有一
217	215	213	209	205	201	197	189	185	181	171	165	161	159	157	151	145
(尊敬・感謝／郷土愛)	(理想の実現／生きる喜び)	(弱さの克服／向上心・個性伸長)	(希望・勇氣・強い意志)	(集団生活の向上・役割・責任)	(向上心・個性伸長)	(自主自律・責任／畏敬の念)	(向上心・個性伸長)	(家族愛／理想の実現)	(集団生活の向上・役割・責任)	(生命尊重／理想の実現)	(望ましい生活習慣／郷土愛)	(希望・勇氣・強い意志)	(思いやり／郷土愛)	(家族愛／理想の実現)	(真理愛・理想の実現)	(真理愛・理想の実現)

○本資料集の掲載順序は、子どもたちに伝えるのに最も適した発達の時期を考慮して、番号を付けたものです。

○本資料集は、道徳の時間はもとより、学級活動（ホームルーム活動）、読み聞かせ、PTA、地域行事など幅広い場面でご活用ください。

○対象は、小中高十二年間を大きく三つに分けていますが、子どもの実態や場面に応じて活用してください。また、どの作品もくり返しくり返し子どもたちに伝えていきたい内容であることを留意ください。

○児童・生徒の作文や詩を掲載したものや、新聞記事から転載したものなどについては、作者名を記載していません。

○目次の下に（ ）で記している内容は、小中学校における学習指導要領（道徳）に示された指導内容の中で、かかわりの深い項目を記しています。

○本資料集は、長崎県教育委員会のホームページでも閲覧可能です。ただし、著作権上の問題が生じるため掲載していない作品もあります。

## よろこんではたらく子ども

「きょうは、とっでもうれいおはなしをします。」

あさのかいのにきに、せんせい、にこにこしながら、おっしゃいました。

(なんだろう。)

とおもっていると、せんせいは、れんらくノートを、よみはじめられました。

きいているうちに、

(あっ、わたしのだ！)

とわかり、わたしは、はずかしくなつて、下したをむいてしまいました。



れんらくノートには、きのう、わたしが、いえのてつだいをしたことが、かいてありました。

「一ねんせいになって、こんなに大きくせいちょうしたかとおもうと、とってもうれいですと、えつこさんのおかあさんは、かいていらっしゃいます。せんせいも、これよんで、うれしいです。みんなが、だんだん、わたしたちのめあての一つ、よろこんではたらく子どもにちかづいているので、せんせいは、にこにこです。」

と、せんせいは、わらいながら、おっしゃいました。

「よろこんではたらく子ども」、とってもいいことばでしょう。わたしは、このことばが、だいすき。

こうちようせんせいが、二がっきのしぎようしきの日、「こんな、こどもになろう。」



と三つのことをおっしやいました。その中の一つに、この「よろこんで、はたらくこどもになろうね。」というのが、ありました。

だから、わたしは、いつも、このことばをおもいだしてがんばっています。

わたしだけでは、ありません。一ねんせいのみんなが、そうです。

「ごみすてにいつてくれる人。」  
と、せんせいが、いわれると、みんながてをあげます。

ときどき、しごとをとりあって、けんかになることもあります。

「しごとをしてくれるのは、うれしいけれど、けんかは、だめよ。」

せんせいは、おこるけれど、でも、とってもうれしそう。

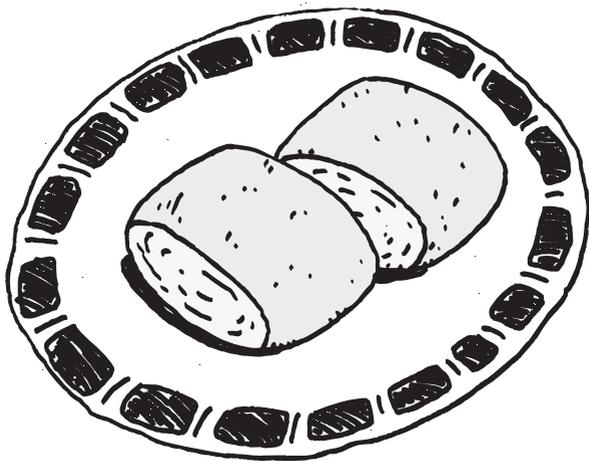
(みんなも、「よろこんではたらく子ども」をめあてに、がんばっているんだなあ。)とおもいました。

だから、いえのてつだいも、すすんでしたのです。ふきそうじ、きゅうりのしおみ、せんたくものたたみ。いやいやしたら、「よろこんではたらく子ども」にならないので、じぶんから、すすんで、いっしょうけんめいしました。

みんなのまえで、せんせいからほめられて、ますますやるきが、わいてきました。

「よろこんではたらく子ども」、このことばを、いつもわすれずに、がんばります。

## たまごやき

朝ごはん<sup>あさ</sup>ママの作るたまごやき<sup>ママ</sup>ふっくらふわふわバター味<sup>あじ</sup>休みの日<sup>やす</sup>パパの作るたまごやき<sup>パパ</sup>うっすら茶色のしょう油味<sup>あじ</sup>お正月<sup>しょうがつ</sup>おばあちゃんの作るたまごやき<sup>おばあちゃん</sup>おさとう三ばいカステラ味<sup>あじ</sup>

夏休み

わたしがはじめて作ったたまごやき

バターと

しょう油と

おさとう一ぱい

そして、ちよっぴりマヨネーズ

家族みんなの味がした



『NCC・JA全農ながさき 第十四回おかあさんの詩コンクール』入賞作品

## はぎわら

むかしむかし、壱岐の八幡の長者原に、おじいさんとおばあさんがすんじよった。

ふたりは、子どももなく、まずしいくらしやったばってか、正じきもんで、りゅうぐうをまつって、年のくれには、かどまつやしめなわば、りゅうじんさまにおそなえしよった。

そんなのくれも、いつもん年と同じごと、おそなえばして、夜もふけたけん休もうてしよったときのことたい。とんとんとんと、戸ばたたくもんのおった。あけてみると、見知らぬ人の立っとならして、

「わたしは、りゅうぐうのつかいのもんです。ついてきてください。」  
と、言わすけん二人はついていくことにしたとき。

そしたら、目の前の海の二つにわかれ、道ができたとき。二人がびっくりしながらついていいたら、やがてりっぱなりゅうぐうについた。そしち、りゅうじんさまの前につ

れていかれた。

「おまえたちは、正しょうじきもので、毎まい年としおそなえをしてくれた。おれいに、はぎわらという子こどもをさずけよう。このはぎわらは、おまえたちのねがいをかなえてくれるりゆうぐう一ばん番ばんの宝たから物ものだ。どうかかわいがっておくれ。」と、りゆうじんさまが言いわっしやった。

子こどものおらん二人は、よろこんではぎわらばつれて帰かえった。

そして、たいそうかわいがりよらした。こんはぎわらは、いくら注ちゆう意いをされてん、どろんこになっちあそんできて、よごれた足あしで家いえの中なかは走はしりまわるこまった子こやった。ばってか、おじいさん



とおばあさんの、はぎわらん頭かたまばなでながら、ねがいごとはさしたら、なんでんか  
えてくれた。二人ははぎわらがかわいくてたまらんかった。

「ふうとか家のほしか。」

と、言うたら、りっぱなごてんのたった。金きんやぎんの宝物たからものや、広い田たんぼなども出だ  
てもらわした。おかげで、国くに一番の長者ちやうじや（大金おがねもち）になつてしもうた。しまいには、  
どうとう、

「もっと、わこうなりたか。」

と、たのんで、わかいふうふにまでなつてしもうた。

いろいろなねがいごつがかなつてしまつた二人は、年としのくれにおそなえをすることも  
わすれてしもうた。それどころか、ぴかぴかのごてんをよごすはぎわらのこつも、だん  
だんじゃまになつてきた。

わかくなつたおばあさんが言いうた。

「ねえ、わたしたちや、ほしかもんのもうのうなつてしもうたし、はぎわらばりゆうぐ



うにかえしまっしょうや。」

わかくなつたおじいさんも、うなずき、

「はぎわら、りゅうぐうへ帰れ。」

と言つて、いやがるはぎわらを海へおいかえ  
してしもうた。

そのとたん、大きなかみなりのなり、ごて  
んはきえ、二人はもとのまじゆうて、年と  
つたふうふにもどつてしもうたとさ。

平成十四年作成『道徳教材集』

(長崎県教育委員会)より

## 横むき地ぞう

むかしむかし、ひとりのどろぼうが、町でひとかせぎしたあと、ぬすんだものを大きな包みにして背おって歩いていました。

「さあ、このあたりでひと休みじゃ」と、町はずれの森の木かげで、男は、包みをひらいて、ぬすんだ品ものを調べはじめました。ふと、男があたりを見まわすと、小さなほこらがあり、地ぞうさまが立っておられます。

「地ぞうさまにみんな見られたばい。こりゃあ、大ごとたい」と、男はひざまずいて、

「地ぞうさま、ゆるしてください。こんこと、だれにも言わんと約そくしてください」と、たのみました。

すると、地ぞうさまは、

「いちどだけは、見のがしてやろう。おまえも人にしやべるなよ」と、顔をクルリと横



に向けられたのです。男は頭をペコペコさげながら立ち去りました。

それから三年後のこと。男が地ぞうさまの前に姿をあらわしますと、地ぞうさまは、顔を横に向けたままの姿で立っておられました。

男はびっくりぎょうてん。地ぞうさまにお詣りに来る人をつかまえて、

「この地ぞうさま、ふしぎなお方ですたい。おたのみしたことは、かならず聞いてくださる——」

「むかしのことたい。あれ、これ……」

と、ある日のできごとを、すっかり話してしまつたのです。

それを聞いたお詣りの人は、

「さては、三年ほどむかし、うちのだいじな着ものや道具をぬすんだヤツは、きさまだつたのか……」

と、男を奉行所につき出しました。

地ぞうさまは、すっかりお見とおしだつたのです。

それからは「横向き地ぞう」と呼ばれ、土地の人びとから尊信されたということなのです。

弟おとうとが生まれた日ひ

「おぎゃあ。」

生まれたばかりのぼくの弟おとうとが、元気げんきな声こえでなきました。

夕方ゆがた、お母かあさんが、

「おなかがいい。」

と言いったので、いそいでじゅんびをして、びょういんへ行いきました。いつもは、明あかるく  
て元気げんきなお母かあさんが、今日きょうはとでもくるしそうでした。

「お母かあさん、だいじょうぶ。」

ときくと、

「少すこしいたいけど、だいじょうぶだよ。」

と答こたえました。しかし、お母かあさんのこんなにくるしそうなかおを見るみるのは、はじめてだ  
ったので、とてもしんぱいでした。

びょういんにつき、ぼくたちは、お母かあさんとちがうへやで、赤あかちゃんが生まうまれるのを

まつことにしました。ぼくはこころの中で、

「まだかな、まだかな。」

とずっと思っていました。だから、まっている時間がとてもながく感じられました。すると、

「リリーン。」

と電話がなり、もうすぐ赤ちゃんが生まれるというれんらくがきました。ぼくたちは、いそいそお母さんがいるへやへ行きました。先生が、

「もうすぐ生まれるからね。」

とおしえてくれました。それからやく八分後、

「おぎゃあ。」

という元気な声が聞こえました。ぼくは思わず、

「やったあ、生まれた。」

と大きな声でさけび、そのばで、とびはねてよろこびました。ぼくにとって、はじめての弟だったので、うれしくて、うれしくてたまりませんでした。

弟おとうとが生まれたへやで、お母かあさんと弟おとうとのようすを見ると、弟おとうとのへそがお母かあさんとつながっていました。するとお父とうさんが、

「みんなで、おへそを切るよ。」

と言いいました。ぼくは、びっくりしました。

「いたくないのかな。」

と思おもいました。でも、みんなで切きるというので、ぼくも弟おとうとのへそを切きることにしました。へそを切きった後あと、弟おとうとは、しん長ちようや体たいじゆうをはかるためにべつのへやへ行いきました。その間あいだぼくは、自分じぶんのへそをそっと見みてみました。そして、

「ぼくも、生うまれたときは、お母かあさんとながつていたんだなあ。」  
と思おもいました。

弟おとうとが、かえってきてから、しゃしんをとったり、だっこをしたりしました。とても小さくてかわいかったです。ぼくは、いつまでも弟おとうとを見みていたかったです。お父とうさんといいしょにかえることになりました。

「お母かあさん、またあしたくるからね。」  
と言いいました。



「ぼくの弟、またあした、お兄ちゃんくるからね。」  
とこころの中で言いました。

家につき、ふとんの中で、

「お母さん、元気になってよかったな。赤ちゃん元気に生まれてよかったな。」

と思いました。そして、

「きょうからぼくに弟ができたんだ。」

そう考えると、うれしくて、なかなかねることができませんでした。

「お母さんと弟、早く家にかえってこないかな。」

平成十九年度『全国児童才能開発コンテスト』入賞作品

## わたしだけのひみつ

わたしは、なつやすみ、えいごのあそびのかえり、チトセピアのまえからバスにのりました。バスのなかは人がいっぱい、立っている人もいましたが、わたしはあいているせきを見つけてすわることができました。まえから二ばんめの一人がけのせきです。するとつぎのバスでいから、お母さんと子どもがのってきました。人がいっぱい、せきもあいていなかったので、そのお母さんと子どもはべつべつのところ立ちました。子どもがわたしのよこに立ちました。子どもは、わたしより小さいようちえんせいぐらいます。

「せきをゆずろうかなあ。どうしようかなあ。」とまよいました。まよっていると、ころのなかに二人のわたしができました。ひとり「あくま」で、もうひりは「ゆうき」です。ゆうきが、「せきをゆずりなさい。」といました。するとあくまが「はずかしいからいうのはやめろ。」といました。わたしのころのなかで、なんかいもあくとゆうきがけんかしています。

わたしがなやんでいるとゆうきが、「立つのはきついけど、やさしいところをもつほうがいい。」といました。あくまはきえました。わたしは、はずかしかったけどおも

いきっていいました。「どうぞ」。そしたら、子どもがにこっとして「ありがとう」といいました。せきをかわってあげたので、お母<sup>かあ</sup>さんも「にこっ」としていいました。わたしは、とてもきもちよくなり、おねえさんになったようでした。

だんちで、わたしはバスをおりました。おりたあと、一人になると、なにかたのしいきぶんになりました。なにかうたいたくなりました。

いえまであるいてかえり、げんかんをあけてお母<sup>かあ</sup>さんに「ただいま」といいました。お母<sup>かあ</sup>さんは「おかえり」といいました。お母<sup>かあ</sup>さんに、バスのなかのことをはなしませんでした。おねえちゃんにもおとうさんにも、だれにもはなしませんでした。わたしだけのひみつです。

えいごのどうぐをじぶんのへやにおしているときおもいました。「こんどは、もっとはやくゆずろう。」

これが、わたしの「なつやすみのゆうき」です。

平成八年度『全国児童才能開発コンテスト』入賞作品



## おにくがいっぱい

「みんな、おにくやけたよ。」

とおばあちゃんのおおきなこえがしました。

「やったー。はやくたべにいこう。」

そういうと、おねえちゃんは、うみからとびだしてバーベキューをしているばしょへ、ものすごいスピードではしりだしました。

「まけてたまるか。はやくいっておおきいおにくをとらなくちゃ。」  
とわたしもいそぎます。

すると、

「おねえちゃんまってよ。」

とうみのほうから、ないているようなこえがきこえました。

「あっ、わすれてた。こうきくんもおよいでいたんだ。つれにもどらなくちゃ。」

とおもって、うみのほうにいこうとすると、めのまえをおねえちゃんが、ビューンとたいふうにふきとばされたはっぱみたいにもどっていきました。

「チャンスだ。いまのうちに、おにくをたべるぞ。」  
とわくわくしながらはしって行って、一ばんにもどることができました。

「いただきます。」

といって、たべはじめようとしたときです。こっちのほうにあるいてくるおねえちゃん  
と、こうきくんがみえました。四ねんせいのおねえちゃんは、わたしより一つとした  
の、いとこのこうきくんにあわせて、ゆっくりとあるいています。わたしは、なんだか  
いまたべたらいけないようなきがしました。わるいことをするようなきもちになったか  
らです。だから、まっっていることにしました。

「ただいま。」

といって、ふたりともかえってきました。

「おかえりなさい。まっけたよ。」

というと、おねえちゃんがにこっとわらって、

「ありがとう、たべようか。」

とこたえます。すると、おじいちゃんとおばあちゃんが、

「えらかね。」

とって、にっこりわらっていました。  
おとうさんとおかあさんにもこにこしていました。

三にんそろって、

「いただきます。」

とって、ぱくぱくたべはじめました。

くちのなかに、ジュワーツとおにくのあじがしてきます。

「おいしかね。」

とおばあちゃんにきかれたから、おにくがいっぱいはいったまま、

「うん、おいしいよ。」

とおへんじしたとき、おじいちゃんとおばあちゃんが、まだなんにもたべていないようだったから、

「なんでたべないの。」

ときいてみたら、

「あとでたべっけんよかとよ。ゆっくりたべんね。」

といました。



「おにくがなくなるよ。」

とわたしがいうと、おばあちゃんがクーラーをあけて、

「しんばいせんでもいっばいあるとよ。」

といいました。クーラーのなかには、おにくが、いっばいはいっていました。

「みんなが、おなかいっぱいで、げんきにあそべるように、たくさんかってくれたのかな。」

とおもったから、

「おばあちゃんやさしいね。」

といったら、

「なるみちゃんもやさしいね。」

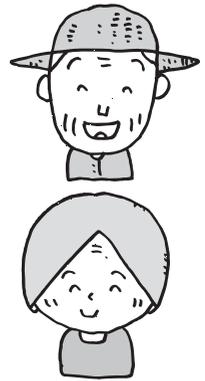
といって、わらっていました。そのかおをみていたら、  
とってもたのしくなりました。

またみんなでいきたいな。

## おじいさん、おばあさん

ばあちゃんへ

いつも野さいを作ってくれてありがとう。ばあちゃんが作る野さいは世界で一番おいしいよ。その中でもきゅうりとみかんとレモンがすきだよ。ゆうやも学校がんばるからばあちゃんも野さい作りがんばってね。



じいちゃん・ばあちゃんへ

いつも学童のおかえに来てくれてありがとう。こしや足がいたいのにごめんね。あとおこらせてごめんね。

これからはじいちゃんとはあちゃんを心配させないようにがんばるよ。わたしが大人になるまでずっと二人で仲良くいっしょにいてね。じいちゃんとはあちゃんからもらったお守り古くなってもずっと持ってるからね。ずっと大好きだよ。

それと、ばあちゃんが作ったかぼちゃや肉じゃが、とってもおいしいよ。これからもたくさん作ってね。

## 天国のおじいちゃんへ

おじいちゃんがなくなつて、もう二年も経つね。あんなにやさしくて、大好きだったのになんでだろうね。じいじがなくなり、おそう式の時、わたしはすごく泣いたよ。じいじに書いた手紙今も持っている。手紙を書く時、はじめは書くのがいやだった。つらかった。じいじと別れたくなかった。でも、がんばって泣きながら手紙を書いたよ。今もときどきじいじの写真を見て、前のでき事を思い出すよ。じいじのことずっと忘れないから、いつまでも天国でわたしたちのことを見守つてね。

## じいちゃんへ

この前、八十八歳のお祝いをしましたね。

八十八年、私たちの倍を生きていますね。その間にはいろんな事があつたことでしょう。うれしい事、つらい事、でも今の姿を見てみるとそんなことはおかまいなしで前へ前へと生きておられる姿、見習わなくてはと思います。いつまでもお元気で私たちのお手本となつてください。

『家族への手紙』（西海市教育委員会）より

# スーパーキャッチャー城島健司

西松 宏

王選手へのあこがれ

「すごいなあ、王選手は。」

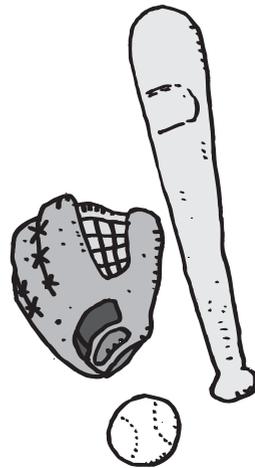
五歳の健司がビデオをみている。

(どうして、あんなにボールを遠くへ飛ばせるんだろう。)

そんな思いで、王選手の打つホームランを見つめていた。

元巨人の王貞治選手は、現役二十二年間で十五度の本塁打王、二年連続三冠王などのタイトルをかくとくし、「一本足打法」で世界記録・八六八本のホームランを打った選手だ。

健司が四歳のとき、王選手は現役を引退したが、プロ野球好きの父は、しばしば王選手



のビデオや本などを借りてきては、健司にみせていた。

父は健司に、夢を持ってほしかった。それもちっぴけな夢ではなく、かぎりなく大きな夢や目標を。

「王さんは世界でいちばんホームランを打った人なんだよ。」と、父が言うと、健司も目をかがやかせながら、

「どのくらい？」と、たずねる。

「八六八本も打ったんだよ。」

「すごいなあ。」

「ホームランっていうのは一発で試合をひっくり返すだろう。逆に、打たれば一発でひっくり返される。それがホームランの魅力なんだ。」

ある日のこと、健司は父にたずねた。

「ぼくも、王さんみたいにホームランをたくさん打てるかなあ。」

「おまえならじょうずだし、きっとできるよ。」

「うん。」

「でも、こういう一流の選手になるためには、人の何倍も努力をして、訓練を積まないと成れないんだよ。」

「よしっ、ぼく、がんばるよ。プロ野球選手になる！」

「そうか、よし、じゃあキャッチボールはそのための訓練だ。父ちゃんの言うとおりについてこい。」

「わかった、王さんを追いこしてやるんだ。」

「世界の王」は、親子がともにいadakあこがれだった。

「ぼく、野球やめる」

城島選手は、これまでの野球人生のなかでたった一度だけ「野球をやめる」と、言ったことがある――。

一九八九年四月、佐世保市立相浦中学校へ進学すると、健司はすぐさま野球部に入部した。

「今日からお世話になります、城島健司です。ぼくはプロになりたいんです。よろしくお願ひします。」

そうあいさつするのを見て、野球部の左海道久監督はびっくりした。初対面であり「プロになりたい」と言う新入生など、初めてだったからだ。

当時、相浦中野球部は一九八六年に全国中学校軟式野球大会で優勝、八八年には九州大会でベスト4になるなど、強いチームとして知られていた。

部員は多いときで百人以上。入ってきたばかりの新入生の練習は、走りこみや球拾いばかり。もちろん打撃練習などはさせてもらえない。練習はきびしく、新入生の大半は夏ごろになるとやめていく。

左海監督は、かつてはプロを目ざしていた野球選手だった。監督は、健司の素質を見のがさなかった。健司はすぐに上級生のレギュラー選手にまじって、練習をするようになった。

ところがある日、健司は遊んでいて不注意から足をけがしてしまった。

(同級生のみんなが球拾いをしていゝるなかで、自分だけは打撃練習もさせてもらっている。なのにぼくはけがをして、練習もできなくなつてしまつた。こんな無責任なことで、とてもプロになんてなれない……。)

何日も練習を休まなければならず、思うようにならない日々が続いた。そして、健司は父に言つた。

「父ちゃん、ぼく、野球やめる。」

「それは、自分で決めたことか。」

とだけ、父は健司にたずねた。

「そうだ。」

と、健司が返事をする、父はおこりもせず、だまつていた。約束をやぶられ、内心、かなりシヨックだつた。

(自分でよくよく考へて決めたことならば、仕方ないか……。)  
父は、そう思つた。

翌日、健司は左海監督にも「やめます」と伝えた。監督は健司をはげました。

「だれだって思うようにいかないときや、やめたいと思うときはある。でも城島、おまえは決して一人じゃないんだぞ。おまえのことをいつも考えてくれるお父さんや、いろいろ身の回りの世話をしてくれるお母さん、少年野球クラブの監督やチームメイトなど、おまえの活躍を楽しみにして、応援してくれている人はいっぱいいるぞ。ここでやめてしまったら、みんな悲しむぞ。」

健司は左海監督がそう話すのを真剣に聞いていた。しばらくして、監督の目を見ながら、こう答えた。

「監督さん、またがんばります！」

西松宏 『スーパーカーチャー城島健司』（学習研究社）より

僕、  
スナメリ

こんにちは。僕、スナメリの赤ちゃん。イルカの仲間です。住所は大村湾。お母さんと一緒に岸近くの浅い所を静かに泳ぎ回っています。県民の皆さんのすぐそばで暮らしているのに、お目にかかる機会がほとんどないのは寂しいですね。

それは僕たちスナメリが、他のイルカに比べて地味だからかもしれない。イルカというと、大海原をジャンプしたり、水族館で楽しいショーを見せたりするイメージをお持ちでしょうが、あれはバンドウイルカなど大型の仲間。スナメリには背びれがなく、群れもつくらず、ジャンプもしない。派手なパフォーマンスは苦手なんだ。

長崎大水産学部ながさきだいがくすいさんくがくぶの竹村暘教授たけむらあきらさようじゆによると、スナメリは日本にほんでは五個所かしょで生息せいそくしているが、他の海域たかいとの交流こうりゆうはない。大村湾おおむらわんで生まれたスナメリは一生いっしょうをここで過すごす。だから、大村湾おおむらわんが豊ゆたかできれいな海うみであり続けてくれることが、僕ぼくの最大さいだいの願ねがい。

授乳期間じゆにゅうきかんは一年ねんと長いので、母子ぼしのスキンシップじゆうぶんは十分じゆうぶんだよ。スナメリには、他のイルカたのようなくちばしがない。丸顔まるがおなんだ。よく「可愛かわいい」って言いわれる。

県けんの人たちひとが「スナメリと共生きょうせいできる環境かんきやうを」を合あい言葉ことばに、大村湾おおむらわん浄化運動じやうかうんどうに乗り出だすと聞きいた。とてもうれしい。スナメリの生息数せいそくすうは環境状態かんきやうじやうたいを測はかる重要な目安めやすになるらしい。

国くにの調査ちやうさでは大村湾おおむらわんのスナメリは三百頭さんびやくとう足らず。もっともつと仲間なかまが増ふえるよう、皆みなさんの協きやう力りきをお願ねがいします。

平成十五年五月十七日『水や空』（長崎新聞）より

## おはようおじさん

氏田 裕也

これは今から三十年ほど前の、平戸市津吉町での話です。昭和五十年、この町に「電報電話局」が開設され、おじさんは初代局長としてここに赴任しました。おじさんの名前は、角田実さんといっています。

赴任して間もない日の朝、おじさんが局の前に立っていると、名前も知らない子ども「おはようございます」と、とても元気な朝のあいさつが耳に飛び込んできました。おじさんは、びっくりしながらも負けずに元気よく「おはよう」とあいさつを返し、その子を見送りました。おじさんは、いろいろな町で仕事をしてきましたが、こんな気持ちのよいあいさつを経験したのは初めてで、このあいさつにとっても感激したのです。

この子との元気な「おはよう」のあいさつで、おじさんは決意しました。「あいさつはすばらしい。自分もあの子に負けないあいさつをしよう。あいさつのすばらしさを多くの子どもたちに伝えよう。」

次の日から、おじさんは毎日、子どもが登校する時間と子どもが下校する時間に、局の前に立ち続けました。雨の日も風が強い日も、お日さまがじりじり照りつける日も凍りつくような寒い日も。お天気は関係ありませんでした。朝は、「おはよう」に「車に気をつけて」などの言葉をつけ加えました。帰りには「おかえり」「さようなら」に「道草するなよ」などの言葉をつけ加えました。雨で濡れて帰る子どもがいると、かさを貸してあげることもありました。ただ、あいさつを交わすだけではなかったのです。

「おはよう」の輪は一人の子どもから、二人、三人と広がり、小学生のみんなに広がっていきました。さらに、中学生や地域の人にも広がり、津吉の町には今まで以上にあいさつの声が飛び交うようになり、いっそう明るい町になりました。

おじさんは、いつも明るく元氣にあいさつをする津吉の子どもたちが、ますます好きになり、もっと子どもたちを応援したいという気持ちになりました。運動会や卒業式などの学校行事や地域の行事には必ず出席をし、「がんばれ」「おめでとう」と温かく力強く励まし続けました。卒業生には、「卒業おめでとう」の心のこもった手紙も送

りました。

おじさんは、三年後に長崎市へ転勤しました。津吉の町を去った後も、多くの子どもたちと文通を続け、就職した時や成人式の時には、手紙に記念品を添えてお祝いを伝え続けました。また、時間をつくって、その後も元気なあいさつを続けているか見に来ることもありました。変わらない「おはよう」「さようなら」の声を聞くと安心して長崎へ帰って行きました。

あの時の子どもたちも今は、お父さんお母さんになっていきます。今は、その子どもたちがあの時に負けない、明るく元気なあいさつを続け教えを受け継いでいきます。

おじさんは、今から十四年前、津吉の町のあいさつ運動がいつまでも続くようにと願いながら、七十三歳で亡くなりました。その後、お父さん、お母さん、地域の人たちは、おじさんの教えと感謝の気持ちをお忘れないようにしようと記念碑を建てました。そこにはおじさんの思いが込められた「あいさつの三徳」の言葉が刻まれ、津吉小学校の校庭で、今も子どもたちを応援しています。

## あいさつの三徳さんとく

あいさつには三つの徳とくがある

一 気持ちのよいあいさつは

相手の心こころを明るくする

二 気持ちのよいあいさつをする人は

誰だれからも好すかれる

三 気持ちのよいあいさつをすれば

自分じぶんの心こころも豊ゆたかになる

おはようおじさん

角田つのだ

実みのる



## 長崎のチャンポン

長崎の食べ物といたら、何を思い出しますか。

きっとチャンポンも思い出すでしょう。

チャンポンはだれが作り始めたのでしょうか。

明治二十五年のことです。中国から十九才の陳平順さんが、長崎にやってきました。

陳さんは、中華料理店を開くために、リヤカーに着物を作るための反物をつみ、長崎から島原まで売りに行き、お金をためました。

陳さんが長崎に来て二年目に、日本と中国の間で戦争がおきました。だんだん戦争がはげしくなると、今までいっしょに、なかよく長崎に住んでいた中国の人たち、てきの国の人だと言うことで、ぼうりよくをふるう人が出てきました。戦争の前は、長崎に六百人の中国の人がいましたが、戦争が始まってからは、三百人の人が中国に帰ってしまいました。

陳さんは迷っていました。

ちようどそのころです。長崎の県知事さんは、「たとえ日本と中国が戦争をしていて



も、長崎に住んでいる人は、同じなかまですから、あらそいごとをしないようにしましょう。」と、よびかけました。

七年後の明治三十二年に、陳さんはついに中華料理店を開きました。

また、陳さんは、中国から勉強のために長崎に来た学生たちの世話もしました。そのころの学生はあまりお金がなく、毎日の食事にも苦勞をしていました。そこで、学生のためにと、安くて、ポリウムがあり、えいよういっぱいの料理を考えました。昔はかんづめやれいぞうこがなかったので、材料をそろえるのに苦勞しました。そこで、長崎の海でとれるイカやカキ、小エビ、もやしやキャベツなど、季節の材料を使うことにしました。こうして長崎の「チャンポン」ができあがりしました。陳さんは、学生がチャンポンをおいしそうに食べるすがたを見て、とてもうれしくなりました。

陳さんの知り合いは、商標登録をしてチャンポンを自分で作ったものだと登録すると、お金をもうけることができるかと教えてくれました。

しかし、陳さんは多くの人に食べてもらいたいと思い、登録をしませんでした。安くおいしいチャンポンは、たちまち長崎の町に広まっていききました。こうして、チャンポンは長崎の名物になったのです。

## ジャガ芋

戸張 芳子

ゲンの家には広い庭があります。その庭は、いつもおいしい果物やきれいな草花が、いっぱいです。

春に桃の花が咲くとお父さんは「今年もおいしい桃が食べられるぞ」と嬉しそうです。ゲンはきれいな花がどうしておいしい桃になるのか、とても不思議でなりません。そんなゲンの顔を見たお父さんは「よし今年はゲンにも手伝ってもらおう」と言いながら、ゲンの肩をポンとたたきました。ゲンは「ぼくは何を手伝うの」と聞きましたが、お父さんはニコニコ笑って「いいかげんはいけないぞ、途中でやめるのもだめだな、何ごとも最後までちゃんと面倒をみるんだぞ」と少しこわい顔で言いました。ゲンは何がなんだかわからないまま「はい」と約束してしまいました。そうです。ゲンは毎年食べるおいしい甘い桃が大好きで、今年も食べたいと思い元気に大きな声で返事をしていたのです。



こうしてゲンは桃の実がおいしく実るまでに、お父さんにいろいろなことを教えてもらいました。今年も薄桃色のみずみずしい桃を家族みんながおいしく食べられたのです。特に末っ子のヒロはまだおしゃべりができませんが、お母さんが桃を食べやすく切ってお皿に盛ると、すぐにハイハイでテーブルに近寄り「ウマーウマー」と、よだれを出しながら大きく口をあけて「早く食べたい」のポーズをします。これも、お父さんがいつも大事に育て、ゲンもそれを手伝ったからだと嬉しくなりました。

こうしてゲンの家族みんなはいろいろの果物が実るとおいしくいただくのでした。

ある日「これは小鳥こどりの分ぶんだな」と言いってお父とうさんは少すこしだけ桃ももの実みを木きに残のこしました。おいしい桃ももです。「ぜんぶ食たべたいのに、どうして小鳥こどりにも食たべさせるの」とたずねるゲンに「これがお父とうさんのやり方かただよ」とニコニコ顔がほでこたえるお父とうさんです。

トマトの時ときもそうでした。柿かきが実みのった時ときも同じおなでした。小ちいさい金色きんいろの金柑きんかんの時ときも同じおな。こうしてゲンの家いえの庭にわはいつも小鳥こどりが集あつまってくる果物くだものや花はないっぱいの庭にわなのです。

「来週らいしゅうは土日どにちと連休れんきゆうだな、よしおじいちゃんのごきげん伺うかがいに出でかけよう」と言いうお父とうさんの声こゑにみんな大喜およろこび。ゲンはもう来週らいしゅうの土曜どようび日びが待まちちどおしくてなりません。ゲンはよくよく考かんがえて、おじいちゃんへのお土産みやげはお父とうさんに教おしえてもらった「お手伝てつだいにしよう」と決きめていました。「いいかげんはいけないぞ、途と中ちゆうでやめるのもだめだな、何なにごとも最さい後ごまでちゃんいと面めん倒どうをみるんだぞ」とお父とうさんに言いわれたことを思おもい出だしていました。

待ちに待った土曜日、おじいちゃんの家にはおばあちゃんもいます。二人はニコニコと嬉しそうな顔。もちろんゲン一家もみんなニコニコ。嬉しい顔がいっぱいのおじいちゃんとおばあちゃんの家です。でも疲れたのか末っ子のヒロだけはすやすやお昼寝の顔。しばらくぶりのお話がたくさんたくさん。それが終わると突然おじいちゃんが「ジャガ芋の収穫に出かけようかな」と支度をはじめました。ゲンは嬉しくて「おじいちゃん、ぼく手伝うよ」とおじいちゃんのことについて畑へ出かけて行きました。

ゲンはお父さんの手伝いをした時と同じように、おじいちゃんからいろいろなことを教えてもらいました。おじいちゃんにかわいがられた畑のジャガ芋は、どれもぷっくりふくれたゲンのまんまるほっぺと同じ丸いぷっくりの形。おじいちゃんの手もゲンの手もジャガ芋も畑の土で泥だらけで泥の色。ジャガ芋にやさしい、土のおふとんは泥の匂い。土の中から出てきたジャガ芋は、はじめて見たお日さまに驚いたのか、ちよっぴり白い顔。ゲンにとっては嬉しい楽しい「おじいちゃんとジャガ芋と泥だらけとお



日様とやさしいそよ風との忘れられない楽しい時間」でした。「そろそろおしまいにしよう」とおじいちゃんはジャガ芋を集めて家に持って帰る支度をはじめましたが、小さいジャガ芋を少しだけ畑に残しました。ゲンはお父さんのやり方を思い出して、「これはおじいちゃんのやり方でしょう」とたずねると「そう、おじいちゃんのやり方じゃ、よく知ってるな」とおじいちゃんは感心したようです。お父さんの手伝いをしてるゲンには簡単にわかることでした。「お父さんのお父さんだからよく似てるんだな。でもあのジャガ芋をだれが食べるのかな、土の中のみみずかな、森に住むうさぎかな」といろんなことを考えながらおじいちゃんの後について家

へと急ぎました。

ゲンはその夜はおじいちゃんの部屋で寝ることにしました。「おやすみなさい」のあいさつをしたゲンは、もう一度起き出して「おじいちゃん手を見せて」とおじいちゃんの手をとると「あっ、お父さんと同じ」と思いました。昼間とちがってちよっぴり石けんとお風呂の匂いがありました。何も知らないおじいちゃんは「どうしたのかね」と不思議そうな顔。「ううん何でもなし」とゲンは安心しておふとんの中へもぐり込みました。「ぼくの思ったとおり、大きくてあたたかくってお父さんによく似た手、ぼくの好きなお父さんと同じ手だった」とおふとんの中で聞こえないように大きく口を開けて言いました。これからも「いいかげんなことはしないぞ、途中でなんかやめないぞ、何だっ最後までがんばるぞ」とやはり大きく口を開けて言いました。でもその声はだれにも聞こえなかったようです。

## 涙を忘れさせた友情

安永 多恵子

私の友人のKさんの周りで起きた、とても優しい話を紹介します。ただちよつと残念なのは、その周りの人達の中に私自身が参加していないことです。

ある静かな港町で火事がありました。建てられてまだ十年ほどしかたっていない民家が全焼しました。家族四人が焼け出されてしまったのです。とても悲しく寂しい事故でした。原因は全く分からないということでした。火事に遭ったAさんから、Kさんのもとへ電話がかかりました。それがお昼頃だったのです。とても切羽つまった興奮したAさんの声が、受話器から飛び込んできました。「火事なの！私の家が火事なの（なくなつたの、何もかもなくなつたの！）。そんな感じだったろうと思います。

Kさんは電話を切つてすぐ動き出しました。目の前に電話機を置き、片っ端からかけ始めました。Aさんの状況を手短かに説明し、地元の情報に詳しいBさんには「Aさんの住める家を探して」、Aさんの子供より年上の子供がいるCさんには、教科書、参考書、制服の古くなくなった物を集めてもらいました。それからスーパーの薬局に行つて「友人が火事に遭つて困っています。化粧品や薬のサンプルをいただけませんか」と頼んだら、薬局の方も奥からいろいろ持ってきてくださったのだそうです。そのほか洗濯機、冷蔵庫、掃除機、炊飯器、電子レ

ンジ、家具類、食器類、衣類、米、野菜、現金のキャンパも。なんと、その日のうちに生活に必要な物のほとんどをみんなですろえてしまったのです。その日の夕方、新しく住むことになった家で、多勢の仲間達がAさんを囲んでワーワーと大騒ぎだったそうです。皆で「絶対泣かないようにしよう」と約束していたそうです。

翌日、少し火傷をしているAさんを病院に連れていったKさんに、Aさんが言いました。「ちよつと泣いていい？」って。初めてAさんは思いつきり泣いたのです。でもAさんは、家をなくして悲しかった涙だけではないと思います。みんなの気持ちがちみだ涙でもあったと思います。

次の日、KさんがAさんに「何か足りない物ない？」って聞いたそうです。Aさんは「英語の辞書ぐらいかな」って答えたそうです。その後、Aさんのために立ち上がった仲間達は、次の作業に取りかかっていました。それは、新しいアルバム作りでした。家族の思い出がたくさん詰まったアルバムも焼失してしまったAさん家族のために、Aさんの家族が写っているネガを持ち寄り、アルバム作りに知恵を出し合っています。

Aさんに本当の笑顔が戻る日も、そう遠くないと思います。

『心にしみるいい話第二集』（長崎新聞社）より

## さんごの刻をかぞえて

岩永 貴資

夏の太陽がまぶしい午後でした。五島の富江小学校のグラウンドでは、ソフトボールの練習試合がつづいていました。

「ワンナウト満塁、気合いばいれるよ！」

かんとくの声がひびきます。和真はこしをひくくおとして、バッターをにらみました。にぶいバットの音がきこえました。

「セカンドゴロ！和真、ダブルプレー！」

和真は、あわててボールにつっこみました。けれどボールは、和真のグローブをかすって、うしろに転がっていききました。

「こらあ、なんばしよつとや！」

ふたりホームインです。和真のエラーで、練習試合は、和真たちのチームのサヨナラ負けになりました。

みんなが、かんとくのところひきかえしてきました。だれもが、和真をにらんでいます。とくにピッチャーの伸司は、ふきげんそうでした。

「伸司」と、かんとくが良かったです。

「気に入るな。おまえとしては、うちとった球じゃった。よう投げたチ思っちよう」  
かんとくは、こんどは「和真」とよびました。和真はどきっとしました。

「おまえは、練習がたらん。だいじなときにエラーばしよったら、本番で使えんぞ」  
和真は下をむいて「ハイ」とこたえました。

みんなが、ばらばら帰りだしました。にもつをまとめている和真に、伸司がもんくを  
いいました。

「おまえのせいぞ。へたかヤツは、ソフトなんか、もう、やめれ」

伸司は、地面をけつとばして帰りました。

和真は去年、四年生の夏、友だちの勝彦のさそいで、チームにはいりました。そのと  
きはやる気まんまん、まいにち夕方おそくまで練習していました。けれど、なかな  
かうまくなりません。五年生になってからは、ときどき、練習をさぼるようになりま  
した。

「和真、ちょっと、練習ばしていこうか」

勝彦が声をかけてきました。勝彦はショートで、セカンドの和真と、いつもいっしょ  
に練習をしています。

「なあ和真。二人でがんばって、かんとくば、びっくりさせてやろうで。おまえじゃつたら、すぐできるようになるって」

「ごめん。きょうは、用のあるけん」

和真はそういって、先に帰りました。本当は、用なんかありません。ただ、練習する気がしませんでした。

家のげんかんで、和真は、ひいおじいちゃんとすれちがいました。

「小島のじいちゃんちにいつてくるけん。母ちゃんの帰ったら、いうとって」

小島には、ひいおじいちゃんの息子、和真のおじいちゃんが住んでいます。

「うち、いま、だれもおらんと？」

和真がたずねましたが、ひいおじいちゃんは、きこえないのか、いつてしまいました。和真は家にはいると、ちらっと、ひいおじいちゃんの仕事部屋をのぞいてみました。しずかで、少しほこりっぽい感じの部屋です。まどぎわの台の上には、彫りあがったばかりの、桃色の竜がおいてありました。目がぎよろりと大きく、りっぱな角のはえた、いまにも動きだしそうな堂々とした竜です。竜のそばには、仕上げに使う、細い針のような刀が二、三本そろえてありました。

ひいおじいちゃんは、町でも有名なさんご職人です。ことして九十歳になるのに、

病氣びょうきひとつしたことがありません。町まちの人ひとたちはみんな、ひいおじいちゃんのことを、「名人めいじん」とよんでいます。

和真かずまは小さいころから、ひいおじいちゃんに、いろんな話はなしを聞きかされていました。明治めいじ十九年ねん、女島めしまという無人島むじんとうの近くちかでさんごが発見はっけんされ、それから富江とみえがさんごの町まちになったという話はなし。明治めいじ三十九年ねんの嵐あらしでは、大ぜいの人ひとが遭難そうなんして死しんだという話はなし。

それがいまでは、女島めしまのさんごはほとんどとりつくされ、町まちにもさんごを彫ほれる人ひとがだんだんいなくなっているという話はなし。

長崎市ながさきしからフェリーで三時間じかん、さらにバスで四十分ぶん。五島列島ごとうれつとうでいちばん南みなみのこの町まちをささえてきたのは、さんごでした。そして、ひいおじいちゃんは、そのさんごを彫ほる「名人めいじん」として、町まちの将来しやうらいのことをいつも心配しんぱいしていました。

和真かずまは、じぶんの部屋へやにはいって、ごろっとあおむけになりました。

天井てんじやうにおけて、かるくボールを投げなげます。落ちてきたボールをうけます。ひとりで、五回かい、十回かい、十五回かいと、ぼんやりつづけているうちに、ころっとエラーして、ゆかにボールをおとししてしまいました。

「あー……おもしろなか……」

つぶやいたとたん、部屋へやの外そとから、「なんが、おもしろなか」という声こゑがきこえま

した。首をまげてドアの外をみると、お母さんが立っていました。

「ああ母ちゃん。ひいじいちゃん、小島のじいちゃんところに、さっきでていったよ」

「ふうん。ちかごろやっど、会いにいくごとなったねエ」

和真のおじいちゃんも、若いころは、さんごを彫っていたそうです。しかし将来が不安だからと、やめて漁師になりました。もうずっと昔の話です。けれどそれくらい、ひいおじいちゃんとは、うまくいかないようでした。

「それで、きょうの練習試合、どげんじゃったと？」

「負けた」

「ああ、それで、おもしろなかと？気にすんなサ。本番で勝てばよか」

「おれ、きょう、エラーしたけん、本番でられんかもしれん」

和真は起きあがりました。

「おれのでらんじゃったら、かわりにでるとは、出口じゃろ。下級生にポジションとらるっとじゃったら、おれ、もうやむっかね……」

「ソフトやめて、どげんすつと？」

和真はなにもこたえませんでした。お母さんが、ためいきをつきました。

「ひいじいちゃんも、五年や十年で名人になったとじゃなかとよ。あんた、たった一年

でやめて、どげんすつと」

「じゃばって、おもしろなかもん」

「なんばいいよつとや。さ、練習練習」

お母さんはそういつて、台所にいききました。

和真は、重たい体をもちあげて、ボールをひろいました。そして、うらの空き地に  
でていつて、塀にボールを投げはじめました。

はねかえってきたボールをうけて、また投げる。五回、十回とつづけるうちに、また、  
エラーをしてしまいます。うしろに転がっていったボールを、とりにいく気にもなりま  
せん。(みんな、すぐ「ひいじいちゃん、ひいじいちゃん」っていう。そりや、ひいじ  
いちゃんは、すごい。でも、ひとつのことを七十年もつづけられる人は、めったにおら  
ん。ひいじいちゃんくらべられても、こまる)

和真はそう思いました。そのとき、台所のまどから、お母さんがさげびました。

「そらっ。早く、ボールばとりにいかんね。やめたら、ひいじいちゃんに、はずかしか  
よ！」

また「ひいじいちゃん」だ。和真はかっとしてさげびかえました。

「ひいじいちゃん、ひいじいちゃんち、うるさかぞ！ おんなじことばっか七十年もつ

づけるち、そりやバカじゃなかと！」

「あんた、ひいじいちゃんに、なんちことばいうとね！」

和真は、お母さんがおこって、台所をとびだしてくるんじゃないかと、不安になりました。けれど、お母さんがでてくるようすは、ありませんでした。

和真はボールをひろいにいきました。

「ええい、おもしろなか！」

そうさけんで、堀におかかって、遠くからカいっぱいボールを投げました。ところが、手元がくるって、ボールは大きく右にそれていきました。離れには、ひいおじいちゃんの仕事場があります。

まずい！と思ったときには、ボールはもう仕事場のガラスをやぶって、がしゃーんと、中にとびこんでいました。

まどのそばには、できあがったばかりの竜がおいであったはずです。

和真は、思わずにげだしました。けれど、どこににげたらいいのか、わかりません。

夕ぐれの町内を、和真は海のほうにいつてみました。港には、漁船がたくさんつないでありました。潮のかがおりがただよって、青い波が、小さくゆらいでいます。船のきしむ音が、かすかにひびいていました。和真はしばらく、湾のむこう、あい色の空につ

つまれた山を、ぼんやりとながめていました。

ひいおじいちゃんは、くる日もくる日も、一生けんめい、あの竜を彫っていました。きつと、こわれているだろう。それをみて、どう思うだろうか。

いくら元気で、もう九十歳です。こわれた竜をみて、びっくりして、おこって、悲しんで、ついにたおれてしまいかもしれない。

和真は不安になって、いそいで家におかいました。もう、空はまっ暗でした。

和真は、庭からこっそり、仕事場をのぞいてみました。机におかっているひいおじいちゃん、丸い背中がみえました。まどぎわの台の上に、あの竜はありません。和真は、たなの上や、へやのすみを目でさがしましたが、みあたりません。

どうしたんだろう。ひいおじいちゃんの丸い背中が、なんだか小さくみえました。

「和」

そのとき、ひいおじいちゃんが声をだしました。

「和。そこにおるとじゃろ。中にはいつてきなさい」

和真はひやっとしました。ふりむいてもいないのに、ひいおじいちゃんは、和真に気づいていたのです。でも、こうなったら、しかたありません。和真はおそろおそろ、中にはいりました。

ひいおじいちゃんは、机の上から竜をもってきて、和真にわたしました。  
和真は両手で、竜をそっとかかえました。思ったよりも、ずっしりと重みがありました。桃色にかがやく、まるで生きていような竜です。ただ、頭の角が、かたっぼだけ、おれていました。

和真はうつむきました。あんなボールさえ投げなければ、ひいおじいちゃんの大切な竜を、こわすこともなかったのに。

「ひいじいちゃん……あの……」

和真がつづきをいおうとすると、ひいおじいちゃんが、先に口をひらきました。

「和。この竜は、おまえに、やる」

和真は「ええっ！」とさけびました。

「角の、おれちようじやる。もう売り物にはならんけん、おまえに、やる」

和真は、たったこれぐらい、と思いましたが。だって、ひいおじいちゃんの彫ったさんごは、しんじられないほど、高値で売れるからです。

「さんごが、この大きさに育つには、どれぐらいかかるか、知っちゃようや」

和真はしばらく考えました。そして「十……いや、二十年？」と、こたえました。ひいおじいちゃんは、ハハとわらいました。

「とんでもなか。このさんごはな。わしより、ずうっと、ずうっと年上じゃ」

和真はびっくりしました。九十歳のひいおじいちゃんより、ずっと年上だなんて。木なら、百年も生きれば、そうとうの大木になるはずです。そんなに長くかかって、さんごは、和真がかんたんに持てる大きさにしかならないなんて。

和真は、ひいおじいちゃんをみあげました。

「もっと早く育つさんごは、なかと？」

ひいおじいちゃんは、首をふりました。

「あったとしても、そげんとはつまらん。時間ばかりで、ちっとずつ、ちっとずつ育つたさんごじゃなかと、よかとはできん。さんごはな……、百年や二百年では、一人前にはなれんと」

和真は、あとのことがでませんでした。

ひいおじいちゃんが、ゆっくりとつづけました。

「……じゃけん、わしも、時間ばかりで、ていねいに、ていねいに、彫るとさ。大先輩のさんごに、失礼にならんごと……」

さんごを彫りつけて七十年。ひいおじいちゃんは、「名人」とよばれています。け

れどさんごは、百年でも、二百年でも、一人前じゃないといひます。

さんごは、さんご虫という小さな虫の骨でできたものです。その砂つぶのように小さな虫が、たくさん、たくさん集まって、毎年すこしずつ重なりあい、それを何百年もくりかえして、さんごが育つてゆくそうです。和真には、とても想像できない世界でした。

「さあ、和。そろそろ、晩ごはんは食べにいこうか。父ちゃんも帰っちゃろうしな」  
和真は、小さくうなずきました。

ひいおじいちゃんが、にとわらいました。

「和のいうたごと、わしは、七十年も飽きんでつづけちよう、バカもんじゃ。それでもわしは、バカはバカでも、一流のバカになりたかち思つちよう。じゃばって、さんごにくらべれば、まだまだ二流じゃのう」

和真もひさしぶりに、くすつとわらいました。

「ひいじいちゃん。ちよつと、これ、もつてて」

和真は竜を、ひいおじいちゃんにさしました。

「どこいくと？」

「うらの空き地に、グローブば、おいてきちよつた。とつてくるけん」

和真かずまが外そとにでようとすると、うしろから、ひいおじいちゃんがたずねました。

「和かず。こんど、試合しあひのあつと、でられんかもしれんぢ？」

「だいじょうぶ。でられる。おれもバカじゃけん……まだ、三流さんりゅうけど」

和真かずまはそうこたえて、空き地あきぢに走はしっていききました。

岩永貴資『長崎の童話』（日本児童文学者協会）より

## ノーベル化学賞に下村さん

### 「物理」に続き日本人受賞

二〇〇八年のノーベル化学賞に、下村脩さん（八十歳、アメリカ〔米〕・ボストン大学名誉教授）が選ばれました。物理学賞の三人に続く、日本人の研究者の受賞です。オワンクラゲから、緑色蛍光たんぱく質（GFP）を発見し、その後の細胞研究に役立ちました。

### 光るたんぱく質を発見

日本人のノーベル賞受賞は、十六人になりました。化学賞は、〇二年の田中耕一さんに続き五人目です。

光る生き物に興味があった下村さんは、一九六〇年、留学先の米プリンストン大学



写真提供：共同通信社

の先生に「オワンクラゲを研究してみなさい」といわれました。クラゲが大発生するワシントン州の海辺で、研究を始めました。家族らにも手伝わってもらい、八十五万匹ものクラゲを集めて観察しました。

「光るたんぱく質」GFPを見つけたのは、六十二年のことです。クラゲをしぼった液を流しに捨てたら、残っていた海水と反応して光ったことから発光のしくみに気づくなど、偶然にもめぐまれました。

このGFPを、調べたいたんぱく質に組みこむことで、それが人や動物の体の中で、どんな動きをするかを追いかけることができます。つまり「光る目じるし」。がんの細胞に組みこんで、体に広がっていくようすを調べたり、病気で脳の神経の

### ■「オワンクラゲ」って？■

とやまけんうおづ すいぞくかん がくげいいんだがやましげ き はなし  
富山県魚津水族館・学芸員高山茂樹さんの話

太平洋側でも日本海側でもごく一般的に見られるクラゲです。直径は最大で15センチほど。観察するには春先から初夏にかけて、港など風の少ない入江を選ぶといいでしょう。昼間はふわふわとただよう姿が観察でき、夜は小石をあてたりして刺激を与えると青白く光ります。

【GFP（緑色蛍光たんぱく質）】Green（緑色）Fluorescent  
（蛍光）Protein（たんぱく質）という英語の頭文字。

細胞さいぼうがどうやってこわれていくのかを調べたり。世界中せかいじゅうの医学者いがくしやや生物学者せいぶつがくしやらの細胞さいぼう実験じっけんに、なくてはならない「目じるし」とされます。高校こうこうの理科実験りりかじっけんでも、教材きょうざいとして使つかわれています。

九〇年代ねんだい、マーティン・チャルフィー教授きょうじゆ(米べい)が、GFPを細胞さいぼうの中で光ひからせる方法ほうほうを発見はっけん。ロジャー・チエン教授きょうじゆ(米べい)は、緑色みどりいろ以外の色いろにも光ひかるようにするなど便利べんりにし、三人にんの共同受賞きょうどうじゆうじやうとなりました。

下村さんしもむらの米国べいこくの自宅じたくに電話でんわし、子どもたちこどもたちへのメッセージをお願ねがいしました。

「子どもたちは、何でもめずらしいことを見つけたら、研究けんきゆうをしてみたらいい。でも、大人おとなが『興味きょうみをもちなさい』というだけではだめ。子どもたちがいろいろなものに興味きょうみを持てる環境かんきやうを作つくっていくことが大切たいせつだと思います」

私<sup>わたくし</sup>たちもがんばりたい 下村<sup>しもむら</sup>さんの母<sup>ぼ</sup>校<sup>こう</sup>の子<sup>こ</sup>どもたち

下村<sup>しもむら</sup>さんの母<sup>ぼ</sup>校<sup>こう</sup>、長崎<sup>ながさき</sup>県<sup>けん</sup>佐世<sup>せ</sup>保<sup>ぼ</sup>市<sup>し</sup>の白南<sup>しらほ</sup>風<sup>え</sup>小<sup>しょう</sup>の六<sup>ねん</sup>年<sup>せい</sup>生<sup>せい</sup>に聞<sup>き</sup>きました。

八起<sup>やち</sup>咲<sup>さき</sup>子<sup>こ</sup>さん

「朝<sup>あさ</sup>、先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>から同<sup>おな</sup>じ小<sup>しょう</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>出<sup>しゅつ</sup>身<sup>しん</sup>と聞<sup>き</sup>いて、とてもうれしかったです。わたしも目標<sup>もくひょう</sup>を決<sup>き</sup>めて、コツコツ取<sup>と</sup>り組<sup>ぐ</sup>んでいきたいです」。

直江<sup>なげ</sup>郁<sup>いく</sup>和<sup>わ</sup>くん

「科学<sup>かがく</sup>者<sup>しゃ</sup>にあこがれていました。地<sup>じ</sup>道<sup>みち</sup>に努<sup>どり</sup>力<sup>りよく</sup>すれば夢<sup>ゆめ</sup>がかなえられるかもしれない、と感<sup>かん</sup>じました。何<sup>なん</sup>回<sup>かい</sup>も実<sup>じつ</sup>験<sup>けん</sup>に失<sup>しつ</sup>敗<sup>ぱい</sup>したと聞<sup>き</sup>いたので、どうやってあきらめずにがんばれたかを聞<sup>き</sup>いてみたいです」。

岡<sup>おか</sup>尚<sup>なお</sup>人<sup>ひと</sup>くん

「下村<sup>しもむら</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>のよう<sup>よう</sup>に、一つ<sup>ひとつ</sup>のこ<sup>こと</sup>に専<sup>せん</sup>念<sup>ねん</sup>してがんばりたいです」。

平成二十年十月十一日「朝日小学生新聞」より

# かけがえのない「いのち」を輝かせて生きよう

立岡 誠

たった一つだけの私の「いのち」

私が両手をひろげても、  
 お空はちっとも飛べないが、  
 飛べる小鳥は私のように、  
 地面<sup>じべた</sup>を速くは走れない。  
 私がかからだをゆすっても、  
 きれいな音は出ないけど、  
 あの鳴る鈴は私のように  
 たくさんな唄は知らないよ。  
 鈴と、小鳥と、それから私、  
 みんなちがって、みんないい。

## ■ 「いのち」ってどんなもの？ ■

広辞苑<sup>こうじえん</sup>には、「生物の生きてゆく原動力」と書かれています。私たちは、ひもじくなるから食事をします。つまり、いろんな食べ物を胃に送り込むのです。その後は、自分の意志ではどうにもなりません。食べ物は自分の意志とは関係なく、消化されて体温を保ったり手足を動かしたり考えたりすることのもとになる栄養として、また、体中の組織や酵素<sup>こうそ</sup>をつくる養分として血液で体中に運ばれます。

また、自分の意志とは関係なく、私たちが眠っている間も、心臓は体中に血液を送り続け、肺は呼吸を続けています。

ちょっと考えると不思議だと思いませんか。こんな体の動きのすべてを 司<sup>つかさど</sup>る大きく不思議な力を持つものを「いのち」と呼んでいます。

この詩は、多くの皆さんが知っているかと思いますが、山口県出身の童謡詩人金子みすゞの作品の中で、特に多くの人々の心をとらえている詩です。

金子みすゞは、鈴と小鳥と私をくらべていますが、皆さんは、友達や近所の人たちと自分をくらべてみてください。ひと目見て分かる顔つきや体つきはもちろん、これまでに経験してきたことや思っていること、考えていることなどは一人一人ちがっています。私たち一人一人が「世界中でたった一人の私」なのです。

でも、だれにも共通していることが幾つかあります。

その一つは、まちがいなくだれもが、たった一つの「いのち」を持っていて、その「いのち」には限りがあり、一度なくすと絶対に取り返せないということなのです。

その二つめは、だれもが遠い遠い昔に生きた先祖からの「いのち」のバトンを受け継いで、今を生きているということなのです。私たちだれもが、お父さんとお母さんがいて生まれてきました。お父さんにもお母さんにもそれぞれにお父さんとお母さんがいました。あなた方のおじいちゃんとおばあちゃんですね。そのおじいちゃんとおばあちゃんにもまた、……。

その三つめは、だれもが動物や植物の「いのち」をいただいで、生かされているということです。私たちがいただくご飯の米粒もパンの原料の小麦の一粒一粒も、朝顔やひまわりの種と同じように、種としてまけば、芽を出す「いのち」を持っているのです。肉や魚はもちろんで

す。だから、食べ物への感謝の心を込めて「いただきます」「おごちそうさまでした」と手を合わせるのですね。

その四つめです。だれであっても、自分の「いのち」は自分だけのものではないということです。酔っぱらい運転や暴走運転をして、いのちを失う人や自殺をする人が大勢います。罪を犯して一生を台無しにする人がいます。このような人は、「自分のいのちは自分だけのもの」と勘違いしているのではないのでしょうか。

万葉集という我が国に現存する最も古い歌集には、

「銀しろがねも金くがねも玉たまも何なにせむに、勝まされる宝たから 子こに及しかめやも」

という山上憶良やまのつたのおくらの歌が載っています。

今も遠い昔も変わりません。子どもは両親にとって、自分の「いのち」と同じか、それ以上に大切な宝です。両親だけではありません。おじいちゃんやおばあちゃんにとっても、いや社会全体にとっても希望であり宝なのです。

## 限られた「いのち」だから

皆さん一人一人は、他の人と異なる個性を持っています。これまで述べてきたように、どれもが一樣にかけがえのないたった一つの「いのち」を持っているのです。でも、「いのち」

は永遠ではありません。必ず終わる時が来ます。

少年老い易く学成り難し

一寸の光陰 軽んずべからず

未だ醒めず 池塘 春草の夢

階前の梧葉 すでに秋声

これは、中国宋代の学者朱熹の詩です。前段は「皆さんが長いと思っている少年時代ですが、振り返ってみれば、大変短いもので、あっという間に年老いてしまうものです。それに引き替え、学問の道は遠く深いものです。だから、少年時代には、少しの時間もおしんで勉強に努めなければならぬのです」という意味の言葉かと思えます。また、後段は「池のほとりの春草の上に寝ころんで甘い夢を見ているうちに、秋風が吹き始める。つまり、若いと思って油断していると、すぐに年老いてしまう」と言うのです。

おじいちゃん、おばあちゃんになって、自分の一生を振り返るとき、「いい人生だったな」と思える自分の一生をつくるために、小学生の今から生活のし方を考えようではありませんか。

### 「いのち」を輝かせて生きる

皆さん、「いのち」を輝かせて生きている姿って、どんな姿を思い描きますか。

将来の「リーガー」を目指して、サッカー部に入り汗を流しながらがんばっている姿、オリンピック選手になることを目指して、自分が選んだスポーツの練習に熱中している姿、野球のイチロー選手や水泳の北島選手、スケートの浅田真央さんのように、世界記録に挑戦し続ける姿、こんな姿はだれの目にも輝いて見えます。

しかし、新聞やテレビで取り上げられなくても、世の中の多くの人々が自分を、自分の「いのち」を輝かせて生きています。

正君の家は野菜づくり農家です。お父さんとお母さんは、ほとんど毎日ビニルハウスの中で、それぞれの野菜に合った土づくりや種まき・苗の世話など、忙しく働いています。特に、気を付けていることは農薬をできるだけ使わないで育てることです。苗が順調に育つことやお客さんに喜んで買っていただくことがお父さん、お母さんの喜びです。野菜を売って得たお金で家族のくらしができます。

美香さんのお父さんは、造船所で鉄板と鉄板をつなぐ溶接の仕事をしています。「自分たちが造った船が完成し、世界の海で活躍することが喜びだ」と話しています。「お母さんが家族の世話をしっかりやってくれるから、安心して働ける」とも言っています。

多くの人が、それぞれに仕事を持ち、その仕事を通して社会とつながり社会に役立ち、私たちのくらしを支えているのです。仕事の仲間や家族と協力しながら、社会のため、家族のために真剣に働いている人々は輝いています。

## まずは「ゆめ」を描くことから

「医療関係の仕事に就くために、中学校では勉強を頑張ります。」

「正義感を強く持った弁護士になるために、中学校では勉強を頑張り、心を磨きます。」

「アナウンサーになるために、勉強と部活の両立を頑張ります。」

「学校の先生になって、子どもたちと明るく仲のよい学級をつくります。」

これらは、長崎市内のS小学校の卒業式で、卒業生が壇上から大きな声で発表した決意の例です。皆さんは、自分の将来にどんな「ゆめ」を描いていますか。

毎日毎日、先生やお母さんが「勉強せんば」というから、または、漠然ぼくぜんと将来のためというだけで勉強するのは、先に挙げた例のような自分の将来の「ゆめ」を実現するために勉強するのは、どちらが優れているかはつきりしていませんよね。

「立志は万事の根源なり」という言葉があります。「目標がある限り人は成長し続ける」という言葉も。野球のイチロー選手は、小学校三年生の時には、「プロ野球の選手になる」と自分の進む目標を定めていたそうです。また、イチロー選手は、テレビ対談の中で、「自分がどこを目指しているのかをはっきり自覚し、それによって自分が今何をすべきかを考え実践するようにしています」と話していました。

とは言っても、多くの人の場合、ゆめやあこがれは自分の成長とともに、いろんな出会いによって変わっていくものです。自分があこがれる人との出会いやたまたま出会った感動的な本

によることもありますし、家族の変化によることもあります。自分の長所や短所を深く知ることによって変わることもあります。変わってもちっともかまいません。大切なことは、常にゆめやあこがれを抱き、その実現に向けて努力し続けることです。

兵庫県に生まれ、大変貧しい中で懸命に勉強して小学校の先生になった東井義雄とういよしおという先生は、子どもたちに向けて、「自分を育てるのは自分です」と言い、次の詩を残しています。

自分は 自分の主人公

世界でただ一人の 自分を創っていく責任者

少々つらいことがあったからと言って

ヤケなんかおこすまい

ヤケをおこして 自分を自分でダメにするなんて

こんなバカげたことってないからな

つらくたって がんばろう

つらさをのりこえる 強い自分を 創っていこう

自分は自分を創る 責任者なんだからな

## 「ゆめ」に向かつて

たった一つの、限りある、かけがえのない「いのち」だから、ただ一回きりの人生だから、「いのち」を輝かせて生きよう。そのために、小学生の今から「ゆめ」を描いて、その実現を目指すそう。

そのために、だいじなことを考えてみましょう。

### （第一は健康であること）

健康を損<sup>そと</sup>なうと気力も萎<sup>な</sup>えてしまいます。健康であるために、バランスのとれた食事を心がけ、「早寝、早起き、朝ご飯」をはじめとする規則正しい生活を心がけたいものです。

### （第二は強くて優しい心をも身につけること）

強い心とは、「したくても、してはいけないことはしない」「したくなくても、しなければならぬことは頑張る」は頑張ってやり抜く。我慢強さです。また、自分が今しなければならぬことを先のばしにしたり、誰かに頼ったりしないで、自分で努力してやり抜く強さです。

また、優しい心を持つとは、他人の喜びを共に喜び、他人の悲しみを共に悲しむことのできる心を持って、家族や友達などの身近な人々をはじめ、生きとし生きるものに接することです。「自分に言ったりししたりしてほしくないことは周りに言ったりししたりしない」だけではなく、

「自分に言ったりしたりしてもらいたいことを周りに言ったりしたりしてあげる」ことです。私たちは、一人では生きていけません。ましてや社会に役立つ仕事などできません。私たちは周りの人々に、社会に、動植物に、そして、目に見えない大きな力に支えられて生きています。このことを深く考えてみてください。すると、「お陰様で」という感謝の心が芽生えるはずです。この感謝の心が「優しい心」の源です。

「優しい人ほど心の強い人だ」と言われます。優しく強い心を身につけ、行動に移すことができるようになってはじめて、周りの助けもいただき、「ゆめ」実現に向けて前進することができるのです。

### （第三はしっかりと学力を身につけること）

インターネットや携帯電話に代表されるように、科学技術はすごい勢いで進歩し続け、すべての産業はもちろん、私たちの毎日の暮らしさえも変え続けています。皆さんが大人になる頃には、もっともっと変化の速度は速くなっていることでしょう。皆さんは急激に変化する社会を生きることになりました。

そんな社会を生き抜くためには、しっかりと学力が欠かせません。そして、しっかりと学力は、確実な積み上げによって身に付きます。一位数のたし算やひき算、かけ算九九が確実にできないと難しい計算はできません。小学校で学習する漢字の読みや意味を分かっているだけ

れば、中学校から後の勉強は困難です。小学生の今つけるべき学力をしっかりと身に付けるように心がけましょう。

学力は大きく三つに分けることができます。その一つは、知識や学び方・調べ方です。二つ目は、身に付けた知識や学び方・調べ方を活用して、考えたり判断したり、相手に分かるように話したり書き表したりする力などの能力と言われるものです。そして三つ目は、「ゆめ」に向かって自分を高めようとする心の強さです。「努力にまさる天才なし」という言葉があります。しっかりした学力を身に付けるために、「テレビを見たい、ゲームをしたい」の心に負けず、「テレビを消す、ゲームをやめる」強い心を身に付けましょう。

## まとめ

「楽あれば苦あり、苦あれば楽あり」という諺ことわざがあります。「今樂すること、今樂しいことだけを追い求めていると、後で苦勞することになりますよ」という教えです。あなたはもうですか。将来のことは考えずに今樂すること、樂しいことを求めますか。将来の喜びのために「今」をだいたいと考えて努力しますか。どちらの道を選ぶかは、「自分を創る責任者である」あなた自身なのです。

## 命つてすじい　―頭だけのカブトムシ―

小さな命が力つきでなくなった。一年たっても絶対忘れられない大きな命であった。

「うわあ、頭だけのカブトムシだあ。」

それはあまりにしょうげきのなでき事だった。

昨年の八月十五日、午後三時ごろ。佐世保市三川<sup>みかわち</sup>内の祖父の家に行き、みなでお墓参りに行っている時だった。あぜ道で黒い物が動いていた。アリの山だった。

「頭だけのカブトムシだあ。生きてるー。」弟がさげんだ。びっくりしてよく見ると、たしかに頭に足が四本ついたただけのメスのカブトムシがたくさんのアリにたかられて必死でもがいていた。腹をさがしたが、もうアリに持っていかれたのか、見つからなくて、羽が一枚と後ろ足一本がそばにあっただけだった。(すごいな。これだけでよく生きてるなあ。)

私は、とてもしんじられなかった。

「もうすぐ死ぬさ。お墓参りに行くぞ。」

と父が言った。しかたなく私もその場をはなれた。でもお参りをしていても、(あのカブトムシ、どうなったかなあ。もうアリにつれて行かれたかなあ。)と気になって仕方がなかった。

お墓の帰り道、私は一もくさんにあの場所に行った。いた、いた。やっぱり頭だけのカブト

ムシは、アリに連れていかれないように力いっぱい足を動かしてていこうしていた。

「このまましてたら、ありのえさになるったいね。せつかく生きとっけん、連れて帰ろうか。」と母が言った。

「うん。」

私はうれしくなった。こわごわ頭だけのカブトムシをつかんで、びっしりついていたアリを一匹残らず追ひ払い、袋に入れた。ここはどこだと言わんばかりに頭だけのカブトムシはあばれている。

「もう大丈夫だよ。」

と声をかけたが家に着くまでずっと袋の中でガサゴソ動いていた。

「頭だけで何で生きとっとなあ。」

と、歩きながら弟が言った。

「カブトムシは、きつと心ぞうが頭にあるとき。」

と姉が言った。(ふうん、なるほどねえ。)と私は思った。(めずらしいなあ。)と思った。

祖父の家に帰り、さっそくケースに入れてあげる。元気に動き回っている。ただ四本ついている足の右後ろ足だけは全く動かない。元氣すぎてひっくり返った。でも起き上がろうともがくが、自分では起き上がれない。このままにしていたら死んでしまうと私は恐くなって起こし

てあげた。

「お腹がすいとかもしれんね。」

私は綿に、さとうとはちみつと水をふくませて、その上に頭だけのカブトムシの口をくっつけて吸わせてみた。

「うわあ、吸いよる、吸いよる。」

弟がかん声を上げた。小さな口から口ひげを出して吸っているのだ。じっとして動かない。ひたすら吸い続けている。

「頭だけで生きてるだけでもすごいのに、みつもちゃあんと吸ってるってねえ。」  
姉も大声で言った。

「そうだ。名前はカブちゃんがいいね。」

頭だけのカブトムシなので、上の方だけ取ってカブちゃんと私がつけた。みなさん成した。でもカブちゃんは、そんなこと知らないようで、もう何十分も身動きしないで、ずっと吸い続けている。

夕方、カブちゃんは体せいを変えて、右前足を綿の下に入れ、綿をだきかかえるようにして吸っている。いっちょ前でかっこいい。

夜になって、やっとガサゴソ動き出した。またあばれ出した。お腹はなくてもみつでお腹い

っばいになって元気が出たのだろう。そのうちとうとうひっくり返った。元にもどしてあげようと私は右手でカブちゃんの頭をつかんだ。

「あいたたーっ。取ってー。」

いきなり私の右手人差し指につめを立てて、カブちゃんがかんだ。体中に電流がビリビリーッと流れたようだった。痛くてたまらず、私は、大声を上げながら右手をふった。いくらふっても、カブちゃんはしがみついてはなさない。そばにいた弟たちも、オロオロするばかりで、どうすることもできない。あまりの痛さに泣きそうになった時、母がとんできて、わりばしで、カブちゃんを取ってくれた。

「すごい力だねえ。こんなに小さかのに。」

私は、カブちゃんに言った。この頭だけのカブちゃんのどこにこんな力があるのだろう。

しばらくしたらまた、カブちゃんは、ひっくり返った。今度は、みつのついた綿にしがみつかせて起こしてあげた。カブちゃんは元気いっぱいだった。カブトムシだったころのことを、ちゃんと知っていて、前に進もうとよたよたしながらも歩いている。そうしてひっくり返る。そのくり返しをずっとしていた。

夜おそく私は、ふとんに入った。電気を消してもガサゴソとずっと動いている。

「おやすみ、カブちゃん。」

と言った。

朝になった。起きてすぐカブちゃんを見た。

「よかったあ、元気だー。」

姉が、

「カブちゃんは一晩中ガサゴソしてねむれなかったよ。ひっくり返るたびに起こしてあげたんだから。」  
と言いながら起きた。元気なカブちゃんを見てうれしそうだった。

朝ごはんを食べた後、前に進んでいるカブちゃんを見て、びっくりした。スツと右後ろ足がぬけた。もともと一本だけ動いていない足だった。

三本足になっても、カブちゃんは、元気いっぱい。うれしかった。そのうち歩くのをやめて、みつの綿の上ののって、私に向かって両前足を交互に大きく回しながら動かしている。踊っているようだ。

「♪何でだろう、何でだろうー。私がここにいるのは何でだろう♪」

と、横で見ていた父が、カブちゃんのまねをして歌った。みんな大笑いした。

でも、じっと私たちを見て、キツと頭を上げ、両前足をさかんに動かしているすがたは、堂々としていて、いげんがあった。

胴はなくても、全然おかしくないよ

とってもしかっこいいよ、カブちゃん

何と言っても、こんなにカいっぱい生きてることがすごい

こんなに小さいのに、頭だけなのに、

見事な生命力だね

夕方になった。カブちゃんの様子が今までとちがう。右前足だけさかんに動かしている。なんだか苦しそうで、もがいているように見える。

「ねえ、どうしよう、どうしよう。」

私が言っても、みんな何も言えず、じいっとカブちゃんを見つめている。

カブちゃんの動きが、だんだんゆっくりになってきた。もう、ひっくり返る元気もないようだ。もう弱ってきたのか。このまま死んじゃいやだ。私は急いではちみつたっぷりの綿を持ってきて、カブちゃんの口に付けた。カブちゃんは、ゆっくりだったが、口ひげを出して、またみつを吸い始めた。しかし、こんなに、吸っても吸っても、カブちゃんは、うんこもしっこもしない。吸ったのは、どうなっているのだろう。

「もう、寝らんば。カブちゃんもがんばって生きよう、生きようとしとっさ。」

母がぼつんと言った。

小さな命の火が消えようとしている。でも消さないように、消さないようにカブちゃんは、

力の限り、がんばっている。すごいよカブちゃん。

朝五時。私は、とび起きて、すぐカブちゃんを見た。でも全然動かない。

「カブちゃん、カブちゃん。」

さげんでも、手でつついても、動かない。何だか固まったみたいだ。

「もう死んどるね。」

と父が言った。

「カブちゃんようがんばったね。」

と母が言った。涙が次から次に出てきた。止まらなかった。カブちゃんをなでてあげた。みんななでてあげた。

それから、みんなで大切にカブちゃんをかかえて、庭のマキの木の下にお墓を作って、大すきなみつといっしょに、カブちゃんをうめてあげた。

「頭だけで二日間もいきぬいて……。りっぱなカブトムシだったねえ。」

姉が言った。私は、涙を流しながら、うんうんとうなずいた。

後で姉と、頭だけでなぜカブちゃんが生きられたのか調べてみた。頭部だけとっていたのが胸部の上一節がついていたこと、人間とちがい体中にある九つの気門で呼吸をしていること、心ぞうが、背脈管はいみやくかんという管状に長くなっている、カブちゃんにもそれがついていたこと、脳

は、神経節と言って、体節ごとであり、足などはそれぞれに動くようになっていて、それがわかった。それにしても、これまでただの昆虫と置いていたのに、すごい生命の仕組みである。

今でも目をつぶると、よたよたしながらも一生けん命歩き、私をじーっと見つめていたカブちゃんのすがたが目には浮かぶ。

体を切られても、命をあきらめないで

一生けん命に最後まで

生き続けたね、カブちゃん

どんなに小さくっても、

命ってすごいんだね、カブちゃん

だから

どんな命でも、

大切にしていけないといけないんだね

それを私に教えてくれたカブちゃん

私はカブちゃんの命の輝きを

絶対忘れないよ

『第五十四回全国小中学校作文コンクール』（読売新聞社主催）小学校高学年の部入選作品

## 音楽との出会い

大島 ミチル

みなさんは自分の幼いころの事をどれくらい覚えていますか？

私は二歳、三歳のその中でも音楽が本当に大好きで歌ったりオルガンを弾いていた事を、とてもよく覚えています。第一回目のコラムは私が音楽を始めるきっかけとなったその頃の事をお話ししたいと思います。

私が幼い頃は、幼稚園が終わるとその場所（幼稚園）が音楽教室に模様が変わりしていたものです。私が幼稚園に入るよりも前に、私の一つ上の姉がこの音楽教室に（当時はオルガン教室と言って言っていた様な…）通っていました。私も母に連れられて見学で行っていたのですが、どうもそこで習っているどの生徒よりも音楽が好きだったらしく、うるさくて、先生が「この曲は何ですか？」と聞くと、真っ先に（生徒でもないのに）「幌馬車！」ほろばしゃって答えていたんですよ。

実はこれは私自身よく覚えている光景なんです！他にも「月夜」という優しい曲とか：

それで、私が毎回あまりにもうるさいので、私が幼稚園に入るとすぐに母親が私を音楽教室に通わせる事になりました。それが音楽を始めたきっかけです：

実は音楽を始めるよりも更に前ですから二歳の頃かな？…私は絵を習い始めました。これもまたきっかけは、家中のふすまに姉と弟と私の三人で落書きをしまくって…さすがにあきれた母親が絵を習いに連れていったのですが、早生まれで体の小さかった私は、ガバン（絵の道具）を持って歩くとガバンが地面をこすってしまっただけで歩くのも大変！それでも絵の教室に通うのが楽しくて毎週姉と仲良く行っていました。絵は小学校六年生の頃まで続けましたから約十年間習っていたのですね。先生がご病気になられて止めてしまいましたが、とても楽しかった思い出です。

さて、話は戻って…音楽教室に通い始めて何が大変だったかと言うと、昔は足踏みオルガンだったのですが、体の小さかった私は踏むところまで足が届かないんです！それで、椅子に深く腰掛ける事が出来なくて…あやうく腰掛けるとそのうち椅子からお尻が落ちてしまうのです！何度も転げ落ちました。それでも音楽を止めようとはその頃は一度も思いませんでした。それから数年後、後悔する事になるのですが…それはまたお話ししますね。

そして、音楽教室を卒業する時に母に「ピアノとエレクトーンのどっちをやりたい？」と尋ねられて、沢山の音色が出るエレクトーンに興味を持った私はすぐに「エレクトーンがいい！」

って答えました。きつと、その一言がこういう人生の（仕事の）大きなきっかけになってしまったのでしょね…

習い事は、絵と音楽…それ以外にも書道と水泳でしたが、大人になって絵は映像へ、書道は鉛筆を握って譜面を書くという行為へ、水泳は基礎体力をと、どれも今の仕事と繋がっている様に思います。その時は何も考えないでやっていた事でも、後になって役に立ったり繋がったり広がったり…自分では無駄かな？と思っけていても、無駄な事って人生にはないのかもしれないかもしれませんね？楽しい事も辛い事も…

## 小学生編

以前、私が生まれた時から幼稚園時代までのコラムを書いた事がありますが、久しぶりにその続きを書きましよう！

小学生に入ったばかりの私は三月生まれという事もあってとても小柄な子供でした。でも、その面影は今でもそのまま！何故ならば…数年前、スタジオで子供時代同じ社宅に住んでいた友達に会いました。ある有名な歌手のマネージャーをしている彼女がそこで手に持っていたの

は、なんと、小学生の低学年の時の皆で並んで撮った写真でした。スタジオの演奏家たち曰く「全く変わっていないね、そのまんまじゃない！」

と言われるくらい成長のない私ですが、さて小学校二年生の時に始めたエレクトーンですが、最初は嫌で嫌でしかたがなく、その頃の一行日記?には「明日になったら止めるとお母さんに言おう」と書いてありました。ともかく、同じクラスの男の子がいつも泣いてばかりで、しかも演奏する曲もつまらなく、しかたがなく通っていたのです。

ところが約一年後のある時、いきなり一人新しいクラスに移らされたのですが、その時のシヨックは今でもよく覚えています。ともかく皆上手い！しかも初めて聴くお洒落しゃれな曲ばかり。それから今までの退屈なレッスンがいきなり楽しくてしょうがない毎日に変ったのです。その時の本はいろんなシリーズに分かれています。「映画音楽集」「ビートルズ集」「ラテン音楽集」「ロック音楽集」など……。ともかく弾く曲弾く曲面白くてしょうがなかったのです。全部の本の全曲をマスターしたくて、毎日夜中の三時頃まで練習していた記憶があります。(エレクトーンはヘッドホーンが使えますから深夜でも練習可能なのです。)

毎日学校から帰ると、まずは近所の友達とバレーボールしたり鬼ごっこしたり駆けずり回って、そして夕食まで勉強をして、そして夕食後はひたすら練習をする毎日でした。夏休みにな

ると、港から船に乗って小さな島へ行き、そこにある水泳訓練施設に通うのが夏休みの日課でもありました。「前見てるの？後ろ見ているの？」と冗談で言われるくらいに真っ黒！その頃体をたっぷり鍛えたおかげで、私の姉弟も全員未だに風邪を引く以外の病気は全くしないという健康体に育ちました。（今ではその島も埋め立てられて無くなってしまいました）

もう一つ、記憶にある事では、父親が買って来た本を（二十ページくらいある本だったと思います）翌日までに全部のせりふ（文章）を完璧に暗記して、夕食後に発表するという事を何故だかやらせられていました。ともかく、学校の学芸会でもやって先生が驚いた程、記憶力とこのか集中力は並外れたものがありました。

さて、エレクトーンの事で私自身に大きな変化をもたらしたのは、コンクールに出場するという事でした。小学四年生の時に初めて予選に出させられました。が、もちろん予選落ち！でも、それをきっかけに今まで以上に猛練習をするようになったのです。翌年の五年生の時には県大会で三位、九州大会に出場、六年生からは自分のオリジナル曲を演奏するという規則になったために作曲まで始めたのです。練習する曲もほとんどの本をマスターしてしまっただけに演奏したい曲が無くなってしまっただけで、好きな音楽を耳コピーするという事を毎日枕元に置いたカセットテープでやっていました。実はクラシックは全く聴いていなくて、シカゴやチェイスや

BSTというブラスロックが大好きでした。その上、ELPやモダンジャズ、映画音楽（アラビアのローレンス）、大河ドラマのテーマなどかなりスケールの大きい音楽も好きで演奏していましたから、今の私の音楽にはかなり影響を与えているのではないのでしょうか？今の私しか知らない人は「クラシック育ち」だと思っっている人がかなりなのですが実は全く違っていて、ロック出身だったのです！

子供の頃に母にはよく言われました。「もっと静かな音楽を演奏してくれない？」と。それからもう一つ大人になって母に言われたせりふの一つに「あの頃、家族皆で旅行しようと話している時にあなたこう言ったの覚えてる？：『皆で行っておいでよ。私は一人お留守番してエレクトーン練習しているから！』って言ったのよ」と。えっ？どうしたかって？もちろんちゃんと家族全員で旅行に行きましたよ。でも、それくらいに音楽が好きだったのですね。

今回は小学生編でした！

では続きはまた今度！

『大島ミチル オフィシャルウェブサイト』より

<http://michiru-oshima.net/>

## 最初の発見者

たかし よいち

松瀬さんが考古学に興味を持つようになったのは二十歳ごろでした。

農家のひとりむすこに生まれた松瀬さんは、小学校を出るとすぐに家の手伝いをして農業にはげみました。

ある日、いつものように畑を耕していると、まるでガラスのようにピカピカに光った黒いものを見つけました。それは三角形で、先のとがった矢じりのような形をしていました。でも、松瀬さんにとってははじめて見るものでしたから、なんだか見当が付きません。

松瀬さんは、さっそくそれを小学校で教わった先生のところへ持っていったはずでしたが、「ああ、いいものを見つけたね。こりゃ大むかしの人間が狩りをするときに使った矢じりだよ」



【福井洞くつ】 国指定史跡

佐世保市吉井町  
にあります。

旧石器時代の末期から縄文時代の初期の遺跡で、一番下の層から発掘された石器は、三万年以上も前のものです。

先生からはじめて矢じり石のことを教わった松瀬さんは、びっくりしました。それから松瀬さんは、すっかり考古学のとりこになったのです。

松瀬さんは、ひまを見つけてはじぶんの家のまわりの畑をしらべてみました。すると、それまでだれもあまり気にもとめなかった石器や土器が、あっちからもこっちからも見つかりました。

小学校しか出ていなくても、松瀬さんは独学で勉強をはじめました。大むかしのことが書いてある考古学の本を買ってしらべたり、考古学者がやって来たときなど、じぶんが発見したものをを見せて教えをうけました。

こうして松瀬さんはじぶんの郷土をこつこつと歩いてしらべてまわりました。そのせいで松瀬さんは、それまでよくわかっていなかった大むかしの遺跡をいくつも発見したのです。なかでも福井洞くつの発見は、日本中をびっくりさせたい大発見でした。それまで、福井洞くつには、神社がまつってありましたから、だれもまさかそこが大むかしの人たちのすみかなどとは思いませんでした。

ある日、松瀬さんはいつものように野あるきすがたのまままでふらりとそこへやってきました。いままでなんどか、そこへ行ったことはありません。

でも、そのときはただなんとなく、お稲荷さまのやしろがまつつてある、ほらあなたなどいうことで、そのまま見すごしていたのでした。

ところが、こんどあらためて洞くつの前に立ってみた松瀬さんは、いっしゅん、はっとしました。

「ひょっとしたら、ここは、ただのお稲荷さまをまつたほらあなたではないのかもしれないぞ」松瀬さんの目は、ほらあなの中に注がれました。

松瀬さんはそのとき、ほらあなのすみっこに小さな焼きもののかけらがあるのを見つけた。た。

ひろってよく見ると、それは、まぎれもなく縄文時代の土器でした。

「縄文土器だ！」

松瀬さんは思わずこうふんした声で、つぶやきました。

それは、まだ人間の祖先が、狩りや漁でくらしをたてていたころの土器です。

だれかがいたずらに、ほらあなの中へ投げこんだのでしょうか……。

「そんなはずはない。ひょっとしたら、ここに縄文時代の人たちがすんでいたのかもしれないぞ」

松瀬さんは、外に出るときたえず身に着けている携帯用の小さなシャベルで、そのまわりを掘ってみました。三〇センチほど掘り上げたところから、またもやおなじ縄文土器のかけらが、こんどは、三つも四つもかたまりになって出ました。

「やっぱりそうだ、ここは大むかしの人びとのすまいのあとだ」

松瀬さんは新しい発見に胸をおどらせました。それまで、長崎では大むかしの人びとが生活していた洞くつ遺跡のことはよく知られていませんでした。

もし、そこが縄文時代のすみかだったことがわかれば、たいした発見です。

「さてよ」

松瀬さんは、またじっと考えこみました。

三〇センチ掘った下から縄文時代の土器が出てきましたが、その下をさらに掘れば、なにも見つからないでしょうか、ひよっとしたらさらにもっと下に、縄文時代より古い時代のなにかが見つかるかもしれません。そんなことを考えると、松瀬さんの胸はいつそうはずみました。

このほらあなの中を掘ってみれば、いままでにわからなかった、大むかしのなぞがときあかせるかもしれない。

しかし松瀬さんは、これは、じぶんたちのようになしろうとがやることではない、と思いまし

た。

考古学者に来てもらって、正しい発掘調査をやってもらわなければいけない。

松瀬さんは、ほらあなで土器を見つけたことはだれにもいいませんでした。もし、そのことを聞きつけたものずきが、勝手にほらあなを掘って、うずもれているものをめちゃめちゃにしてしまうかもしれないからです。

松瀬さんは、やがてそのことを考古学者の鎌木義昌先生かまきよまさるや芹沢長介先生せりざわちやうすけに知らせました。

こうして、前にもおはなししたように第一次の発掘以来、四度にわたる発掘の結果、日本の大むかしを研究するうえでもかけがえのない、大遺跡であることがわかったのです。

もし、松瀬さんが、そのとき、洞くつへ行つて、ひよっとしたら、ここに大むかしの人たちがすんでいたのかもしれない……と思わなかったとしたら、おそらくこんな大発見にはつながらなかったでしょう。

わたしは、ぼつりぼつりと、ものしずかに語る松瀬さんのおはなしを聞き、ひとりの人間のかげの力がどんなに大きいかを知りました。こういう人がいたからこそ、考古学者による輝かしい研究ができたのです。

松瀬さんは、最後にわたしにむかってこんなことをいいました。

「わたしたちは、考古学者ではない、あくまでもしろうとです。しろうとが考古学者のまねをしてはいけません。だから、わたしはけっして発掘はやりません。わたしの役目は、だいたいな遺跡をみつめて、考古学者に知らせてあげることなんです」

なんとりっぱな心がけなんでしょう。とかく、遺跡をみつけると、まっさきに掘りたがるものです。しかし、それは大きなあやまりです。

発掘するためには、たいへんな知識と技術が必要です。なまはんかな技術で、発掘をはじめたら、それこそ遺跡をめちゃめちゃにしてしまいます。

松瀬さんは福井洞くつのほかにも、福井川の流域にある直谷なおやというところで岩かげを見つけ、そこから石器の破片を発見して考古学者に知らせました。

また、おなじ福井川ぞいの観音洞くつでも石器のかけらをみつけて知らせました。

昭和四十四年、長崎新聞社は、この松瀬さんの地味な功績をたたえて、長崎新聞文化賞をおくりました。またよく年、吉井町では松瀬さんを名誉町民にえらび、吉井町名誉町民の称号をおくりました。

たかしよいち『まぼろしの日本人』（国土社）より

## 学校大好き！

私は、学校が大好きです。勉強するのは、イヤだけど、大好きな先生や、大好きな友達に毎日会える、この学校という場所が大好きです。

今どき、イジメ問題や、進路の問題をかかえている学校を好きという人は、あまりいないと思いますが、私のまわりの友達も、学校が大好きだと思っています。

学校には、大きなパワーがあるのです。目には、見えないけれど、大きな力があると思います。

だって、なんとなく言えないことも、学校でだと友達にポロツと言えたりするじゃないですか。なんとなく言えないことというのは、「私、〇〇君のことが好きなの。」とか、家で親に話をするのには、ちょっと恥ずかしいこととか……。

ほかにもあります。すごく落ち込んでるときでも、学校へ行き、みんなとワイワイ話をしていると、自然に笑顔になって、落ち込んでることさえ、フツと忘れて元気になれるんです。

学校にいるときは、本当に楽しいです。心の中がピンクの色に染まっていくような、幸せな気持ちになれるのです。

休み時間、昼休みは、とくに心の中がピンク色です。私の学校の昼休みの職員室は、生徒でごったがえしています。何をしているのかといえば、ただ話をしていただけなんです。

くだらない話。あの先生とあの先生、仲いいよねとか、先生とAちゃん、どっちがふとってるとか。本当にどうでもいい話。だけど、私は、そんな時間に、「ああ、楽しい。」「幸せだなあ。」と心から思うのです。

ほら、よく何でもないようなことが、一番幸せというセリフを聞きますが、その通りです。毎日幸せです。笑いが絶えません。

私は、人生においても、学校生活でも、いい方にいい方に考えるのがいいと思います。

ある転校生が、来たときのことです。私は、なぜか、その人と仲よくなれなかったのです。けれど、たまたま、その人の所属する部活をのぞいたときに、その人の一生懸命練習する姿がありました。

「この人ががんばるなあ。今度話しかけてみようかな。」と思ったのです。そして、少しずつ少

しずつ話をするうちに、仲よくなれたのです。

この時、決して「あんなにがんばってバカみたい。」とか、思っただけではありません。物事は、素直に受けとめ、いい方にもっていくのがいいのです。

楽しい……？そう、学校は楽しいのです。けれど、悲しいこともあります。

それは、私の学校になかなか登校できない人がいる、ということなのです。たぶん、私の学校だけではなく、ほかにもそういう人は、多くいると思います。

「学校へ来てください！」

そんなに、簡単に言うな、と思うかも知れませんが、私の考えを聞いてください。あなたにとって、学校に来ることは、ひとつの戦いだと思っただけです。あなたの「学校キライ」という心との戦いだと思っただけです。まず「スキ」をたくさん集めてください。そして、「学校キライ」という心をぶちこわしてください。「スキ」をたくさん集める！小さな「スキ」でいいのです。学校で見つける小さな「スキ」。

例えば、お昼の放送に曲をリクエストすることがスキとか、学校帰りの夕焼け空のグラデー

シヨンがスキとか、たくさん、たくさん、スキを見つけて、いつか学校大好きという大きなスキにかえてください。

戦うのは、あなただけではありません。あなたのお父さん、お母さん、先生、クラスメート、ひとりじゃありません。みんなで戦っていくのです。

人間は、ひとりでは生きていけないのです。人という漢字のように、支えあって生きているのです。

一日でも早く学校へ来てください。

みんなで、学校という場所で、支えあいながら生きる素晴らしさ、協力してひとつのことに取り組む感動を、一緒に味わいましょう！

私は、いつか、だれもが、学校大好きと言える日が来ることを、心から望んでいます。

平成八年度『少年の主張コンクール』入賞作品

## お父さん

その日は、よく晴れた日曜日でした。いつもと変わりなく、朝から父と会話をしました。

「明日から、もうちょっと早く学校に行きたいけん、車で送ってね。」

「早くね。わかった。」

しばらくして、父がバタバタと音を立てて、家から出る姿を見ました。それが、私が見た父が歩いている最後の姿でした。

それから間もなく、父が車にはねられたことを知り、母が私を残して駆けつけました。

病院から帰ってきた母に、私が、「どうやった？」と聞いても、「まだ、よく分からん。」としか答えてくれず、さっきまで泣いていたような赤い目をして、椅子に座っていました。父がどういう状況なのか詳しく知りませんでした。母を見て、ただごとではないと思った瞬間、たくさんの涙が溢れてきました。なんで、うちのお父さんなの？何も悪くないのに、なんで？死んだらどうしよう・・・と、いろんなことを考えて大泣きました。

父の事故から二、三日が経った頃、母からようやく父のことについて、聞くことができず、道路を横断しようとした時、車にはねられ、地面にたたきつけられて腰から落ち、脊髄という神経の通り道を傷つけてしまったということでした。「命だけは取り留めることができました。」と聞いて、ほっとして涙が止まりませんでした。本当に嬉しくてたまりませんでした。しかし喜びも束の間、私は次の瞬間、信じられないような現実を突きつけられたのです。父は、できるだけ早く手術をしなければならぬこと、そして、もう自分の足では歩けなくなるといふこと……。私はショックで頭の中が、真っ白になってしまいました。そして暗い谷底に突き落とされたような気がしました。

その頃、ちょうど大阪から祖母が駆けつけていました。祖母から聞いた父の様子では、普段の父とはまるで別人のようでした。

「こんなに痛いんやったら、死んだ方がましや。」祖母が、「佳奈子を父親のおらん子にさせるんか。」と言うと、「……佳奈子の将来を楽しみにがんばるわ。」と、しばらく考えた末に

父はそう答えたそうです。その言葉通り、父は辛いリハビリも人一倍がんばり、車椅子の移動も一生懸命練習していました。私はそんな父の姿にとっても感動したことを覚えています。

父が車椅子の生活を始める前、私は車椅子の人や視覚障害者の人を見かけるとかわいそうと思ってしまうたり、一人じゃできないことがたくさんあるだろうなと思っていました。しかし車椅子の父と毎日を過ごしていると、障害者的人是かわいそうという思いが自然になくなっていました。

障害者はかわいそうではなく、一人ではできないことがたくさんあるわけでもありません。現に私の父も、できないことよりもできることの方が多いからです。食事、お風呂、トイレなど、生活していて特に不自由なところはありません。足が動かなくても、手なら私たちと同じように動きます。障害者と健常者に壁はなく、同じ地球に住む、同じ命を持った人間です。だから、みなさんにも障害者はかわいそうという思いから抜け出してほしいのです。

あの事故から二年が経った今、父は職場復帰を果たしました。事故の後遺症である体の痛みと闘いながらも、毎朝仕事に向かい、いきいきとした姿を私たち家族に見せてくれています。

私は、父が「佳奈の将来を楽しみにがんばるわ。」と言ってくれたように、今の私が父にできることを考えました。それは、学校のためになるような仕事をする事です。

昨年私は、文化部の委員長に任命されました。文化部は、日頃の図書当番や掲示物の張り替えの他に行事ごとのパネル作りなど活動内容も多く大変ですが、部員や先生方にも支えられ、これまで委員長としてやり抜いてくることができました。私が全校生徒のため、父のためにがんばっていくことが、今の私にできることだと思えます。

いつもは恥ずかしくて言いたい感謝の言葉も言えないままですが、父を一番必要としているのは、私です。歩けなくなっても、私の父です。

お父さん、ありがとう。

岡部  
まり

異国でのホームステイで

最も慣れなかったこと――

それは

食前食後に感謝の言葉が

なかったこと――

地上のどんな所に居ようとも

天地一切の恵みと

それを作られた方々に

感謝して「いただきます」――

恵みの食事を終えて

本当に「ごちそう様でした」――

日本は

素敵な国だと想った――

岡部まり 『お氣に召すまま』 (世界文化社) より

## ゆれながら伸びゆく者

山崎 滋夫

不<sup>こず</sup>来<sup>かた</sup>方のお城の草に寝ころびて 空に吸はれし 十五の心

中学三年生のとき、僕たちは担任の先生の提案で、石川啄木の詩を毎日一首ずつふしをつけて歌った。そのときに憶えた数十首のうちのひとつがこの歌だ。きっと自分と同一年の心をよんだ歌だったからに違いない。何かつらいことがあったのか、沈んだ思いで服のボタンをゆるめ、城あとの草に寝て大きく息をはいている小柄な少年の姿が浮かぶ。およそ百年も前の歌だが、十五歳の心は今も昔も、なぜ何を求めてゆれ動くのだろう。

### 一 生命力のほとばしり

少年の心は急な谷川を流れくだる水に似ている。

上流の若い川の水は急流をなして峻<sup>けね</sup>しい谷の壁を削り、大雨のときには川岸を突き破ってあふれ、流路を変えては人を驚かせる。人間も十三から十五、六歳のころにかけては、心身ともにいちばん変化の激しい流れのさなかにある時だから、生命の躍動、成長のエネルギーがひときわ大きい。しかもその生命のエネルギーをコントロールできるだけの、「経験」という堤防

がまだ築かれていないから、時には、自分の説明のつかない心の氾濫も起こりやすい。

この若さのエネルギーは、それが日ごろの学習はもとより、スポーツや文化活動、まわりの人たちのために向けられていくことによって、君たちを眼をみはるような大河に育てていく。それは大人になってからではなく、少年のころにだけ与えられた、羨ましい、野生にみちた成長の力である。君たちはみな、それを秘めている。

## 二 悩みや疑問との出会い

幼い子どもたちには、「生きる」ことや「自分」についての悩みや自覚がない。君たちが悩みや疑問を持つことは大人に近づいている証拠だし、何かに悩んでいる時は、大きくジャンプしようとして体を縮め、力をためている瞬間なのだと思う。

自分の性格や身体のこと、成績や進路、友人や家庭のことなど本当に様々なことに僕も悩んだ。二十歳を過ぎても続いた。

よくよく考えてみると、授業で学ぶことには、ひと通りの解答や解答法がついているし、教科書もある。先生も教えてくれる。だが自分の心に生じた悩みとか疑問にはそれが無い。だからこそ、それが解けた時、私たちには人間として生きる力が身につくのではないか。人間は考える生き物だから、生きている限りいつも悩みや迷いからは逃れることはできない。それなら、

「悩み」は逃げ出す相手ではなく、自分の成長のために自分で作る問題集なのだと考えたらどうか。少年に最も似合わないのは、悩むべきことに無関心、鈍感で、「何も悩んでいません」などと利口ぶることだと思う。

悩みは成長の友だちである。まじめにつき合う価値がある。

### 三 自分の「生き方」への関心

誕生してから死ぬまでの間に、人間ほど成長をとげる生きものはいない。考え出したことや創りだした物を伝え、積み重ねて文化をつくり、歴史を作ることができるのも人間だけである。それは、人間だけが「自分はどうか生きるか」を考え、選択し、実行する能力を与えられているからだと思う。そして、その能力が目ざめ、動きはじめるのが、君たち中学生のころなのだ。

生き方のモデルはいくつもある。自分の両親だったり、あこがれのスターやスポーツ選手や歴史上の偉人であったり、架空の人物や身近な人であったりする。すばらしいと思いい、ああなりたいと思う人はすべて君のモデルとなる。

だが、自分のモデルや目標は見つけても、果たして自分もそうになれるかどうか。自分やまわりの現実が見えてくるほど、可能性を疑う気持ちも同時にめばえてくる。そして、「実現できない事は早くあきらめよう」という声が聞こえたりして将来に向かっただけの気持ちがゆらぐ。

そんな時は、人生の先輩たちの体験を聞くのが一番よい。それぞれ自分が通ってきた道をふり返りながら、君たちが志をかためるヒントを与えてくれるだろう。

また、どんなにすぐれたモデルであっても、人間は強く、気高く生きている一方で、弱く、みにくい面も必ず合わせて持っている。相反する二つの面の入りみだれるありさまが、その人の人柄や生き方を作っていると考えてもよい。だから生き方のモデルをよく見つめるとともに、自分の中にどんな強さや弱さがあるのか、内面の自分と語り始めてほしい。さらに、他人から見た自分はどんな人間なのか、心を聞いてまわりの声を聞いてみれば、意外な自分が見えるかもしれないし、子どもっぽい自己中心性（ジコチュウ）を卒業できるかもしれない。

#### 四 失敗との対面

たとえばサッカーの練習では何度かシュートを失敗しても、まわりの人はだまって見ているのに、授業での答えを間違うと冷やかし、からかうことがある。スポーツのけいこも教科の学習も同じ「練習」であり、間違いと失敗をあたりまえとしておこなうはずなのに、なぜ態度が違うのだろう。他人の間違いや失敗を笑う心の裏側には、競う相手を見くだし、優越を感じてほっとしている自分がいるのではないか。笑われたい人間はいない。だから笑ってはならない。

失敗とか間違いは、成功するために絶対に必要な大事なことだし、練習・けいこ・実験・学

習はすべて失敗と反省のくり返しでもある。このくり返しを重ねて、私たちは自分の力を高めていくのであって、その歩みと結果が君たちの人生を左右する。そもそも中学生の生活全体が、大きな練習の舞台なのだ。

少年のころは、自分への誇りが芽生え、他人の眼が気になる時だから、失敗を恥じる。まわりが笑い、冷やかせば、なおはずかしくて、やる気が失せていく。それは、仲間の成長のエネルギーを奪うことでもある。

失敗には、それをくり返すまいとすることで成功に近づくという大きな価値があることを知ってほしい。何かをしくじった時は、胸をはる必要はないが、小さくなる必要もない。反省と修正をすればよい。

## 五 ものに感動する柔らかさ

すばらしい曲を聞いたり美しい光景にふれたり、嬉しい出会いをした時、私たちの心はそれに反応して弾む。それを感動という。自分に出来なかったことが、やっとできた時も、感動する。

少年の心がゆれ動くのはこの感動のためでもある。これは、何かが頭でわかるとか、知るというチャンネルではなく、出会ったものごとのよさを瞬間のうちに心のアンテナで感じ、じか

にひとつにとけ合うということであって、そのために必要な心の柔らかさを君たちは豊かに持っている。

宗教や芸術など人類の文化の多くは、頭で考え出したというより感動する心が創り育てた財産だと思う。より美しいもの、気高いもの、いのちや出会いの不思議、宇宙や自然、人間社会の成り立ちなど、「わかる」というより「感じとる」べき価値がいかに多いことか。いま君の心が柔らかくなうちに、ひとつでも多くの感動に心をゆすられるチャンスを求めてほしい。

## 六 依存から自律への脱皮

赤ん坊のころは、心も体も両親やそれに代わる人たちの世話をうけ、見守られて大きくなる。小学生のころになると自分で考え、できることが増えるから、まわりの人に教えられ、見習いながら自分の行動をするようになる。中学生になれば、まわりの大人たちの言葉や考え方を批判できるようになり、言われるままに行動することがうるさくて厭いやになることもあるし、さからってみたくもなる。

この変化こそが、これまで親の保護や援助に守られ、支えられ、「依存」した子どもから、自分の意志と判断で行動する「自律」した若者への脱皮のしるしである。そのようすは、翼は大きくなったものの、まだ自分で餌を獲ることはできず、巣の上でしきりに羽ばたきをくり返

す若鳥に似ている。

やがて巣立つ時が来るが、いまは、与えられた餌をしっかりと嚙んで羽ばたきを鍛え、飛び立つ森と大空をよく見渡しておくことだ。高く遠く飛びたいと思うなら、あわてて飛ぶな。

## 七 自分の責任との向きあい

一人前の大人の条件のひとつは、自分がしたこと、言ったことに責任をとるということである。私たちは社会の一員であるから、自分のすることが自分自身やまわりの人たちにどんな結果をもたらすかを考えて行動しなければ、お互いに迷惑や不愉快さ、損害をかけ合う世の中を作り出すことになる。「無責任」は住みにくさこの種であり、学校や学級にも広がりがやすい。

中学生は子どもから大人への脱皮の時である。脱ぎ捨てなければならない幼虫の皮は、わがまま、不作法、ルール無視……特に、自分がこうなったのは親のせい、社会が悪いなどという幼稚な責任のがれと開き直りだと思う。君たちが大人になるころは、今よりも「自分の責任で生きる社会」へと向かうに違いない。他者に甘えて生きる者には厳しい世の中が待ち受けていることも、考えに入れておく方がよい。君たちはもう「子どもだから」で許される齡ではない。

## 八 友だちとの関係

友だちの言葉や態度つまり友だちが自分をどう見ているかは、誰でも気になることだが、中学生のころはとくに敏感になる。これまで全面的に頼っていた両親や先生方との関係が少しずつ整理されていく分だけ、対等に心の通いあう仲間の存在が大きくなる。成長のしるしだが、時にはつきあう友だちに無視されたり仲間はずれになることを恐れて、言いたいことが言えなかったり、したくないことをやってしまったりもする。

ともかく仲間との関係は、君たちの心をゆらす大きな要因に違いない。真の友人は、お金などにかえられない生涯の宝だから、友情は大切に育てなくてはならないが、自分の本来の姿を曲げてつきあうことでは育たない。一方が我慢や損をして、片方が得をするようでも、すぐ終わりがくる。

友だちのつくり方などというテキストはないが、伸び伸びと競い、高め、助けあう友を得れば、君たちの成長は互いに数倍豊かになるだろう。書き忘れていたが、よい書物もまた、よき生涯の友とすることができる。

## 九 理想と可能性への疑い

高校を卒業する時、校長先生が僕に書いてくれたのは「失望は罪悪である」という言葉だっ

た。考えてみれば、人は重い病気やけが、災難、貧しさなど、どんなに苦しくてつらいことがあっても、ひとすじの望みがあれば耐えられるし、一切の希望が断られた時には死をも考える。言いかえれば、夢とか望みというものは、心が生きぬくために最も大切な糧、エネルギー源なのだ。そうでなくても、少年にとっては、夢や望み、自分がこうありたいという「理想」をもつことは大人になるためのエネルギーであり、それぞれの成長のゆくえを決める羅針盤でもある。だから自分の理想を抱いている若者は強く、まっすぐな生き方をする。

しかし夢や理想は実現できるかどうか分からないし、失望に終わるかもしれないという不安もある。だが、それが分からないからこそ「夢」なのであって、実現できると分かっているものは、ただの「めやす」にすぎない。めやすには、心をかき立てる力がない。

自分の可能性を信じて、ひたむきに理想を追う姿が、少年には一番よく似合う。失望は罪悪に近いと、今でも思っている。

## 十 熱中するものの発見

大変な釣り好きの中学生がいた。休日はもちろん、遠足にも修学旅行にも釣り竿を持ってきた。大学に入ってからには日本中の渓谷をめぐって魚を釣り、その体型や餌を調べ、生態の分布を整理して、教授を驚かす論文を残した。熱中することを追いつづけ、それを学問としてやり

とげた彼に、私は拍手した。

教科で学ぶことはもとより、スポーツ・読書・趣味や創作など、何かに夢中でうちこめるものがあるというのはすばらしい。熱中するということは真剣であることと同じことであり、それをやるのが苦にならずに続くから必ず上達する。ことわざに「好きこそものの上手なれ」というのはそのことをいう。何かに上達しようと思うなら、そのことを好きにならなくてはならないという意味でもある。

本気で打ち込めるもの、熱中できるものを見つけるのはむずかしいと思うかもしれないが、今やっていることをちょっとといねいにやってみたり、興味のある活動のチャンスを見逃さず、しりごみさえしなければどこにでもある。そして見つけたことを続けていけば、いつか本物になるということだ。それが君の一生の仕事や楽しみになるかもしれない。個性が輝く生き方はこのような人生のことをいう。

## 人間は生き返ると信じている子供たち

さだ まさし

ちよっと前に新聞に出ていたアンケート調査でびっくりしたのは、「人間は生き返る」と思っている子供たちが一五パーセントもいることですね。

長崎県の教育委員会が、小中学生を対象に行ったアンケートで、「死んだ人が生き返ると思いますか」という問いに対して、「はい」と答えた割合が、小四で一四・七パーセント、小六で一三・一パーセント、中二で一八・五パーセントだということです。

小学生より中学生の方が数値が高いのも愕然としますが、そもそも人間が生き返るなんて誰が、一体どのように教えたんでしょうか。

理由として挙げられていたのは、「テレビや本で生き返る話を聞いたことがある」とか「テレビや映画で生き返るところを見た」とか、そういうことなのでしょうが、そんなものは僕らが子供の頃にもあった。でも、誰も「人間は生き返る」なんて思っていない。物心つく前ならともかく、中学生にもなってそんなことを平然と言うやっはいなかった。

アホらしいとは思っても、こういう教育もちゃんとやった方がいいのかもしれない。理

性が育つ前の子供は、簡単に騙せるし、まやかしても信じてしまう。大人ですら「死んでも生き返る」と信じこんでしまい、宗教まがいの詐欺に引っかかる場合があります。

優れた霊能者や異能力者の存在は否定しませんが、奇蹟と手品とは紙一重なのだ、と知るべきです。

僕なりに考えれば、子供たちにとって「死」が身近な存在ではなくなってしまうたんですね。「生命」は病院から来て病院に帰って行く、と思う子供もあるかもしれない。お産も病院で、亡くなるのも病院ですからね。

死んだ経験など誰にもないから、「生と死」が身近にないと、「漫画やアニメの世界」と現実との区別がつかず、「死んでも生き返る」と思いこむ子供はいると思います。

かつては——それこそ獣に囲まれて暮らしていた頃は——いつ死ぬか分からなかった。文字通り、死と隣り合わせの生活だった。今でも、国によっては、こんなに産んでどうするの、というくらい子供を産むところがある。産まれて人が増えたら食って行くなんてどう考えても無理な程に。

あるドキュメンタリーで、「こんなに生活が苦しいにもかかわらず産み続けるのは何故？」と聞かれてその母親はこう答えました。「だって子供はすぐに死ぬから」と。乳幼児死亡率を抑えるための社会態勢が出来ていない国での話です。

だからそこでは、「死」は身近な存在なのです。

獣に怯える時代を過ぎ、身を守る方法を覚え、病魔からもある程度逃れられるようになり、戦争の記憶も薄れた。いやもう「無い」と言っている。この日本には目に見える国境がないから、無理矢理にでも「国」という概念で国民を縛ったり、旗印や唄のようなものでいちいち確認しながら結束する必要もない。そんな国では生命に対して思い上がるな、という方が無理かもしれませんね。

死をイメージできず、生への感謝も希薄。となればこれはあくまで極論ですが、大災害や大破壊に直面しなければ「この国の人の心は治らない」と、諦めたくなくなってしまいます。

いえいえ、絶対にそういうことが起きては困ります。

人の心根を諦めたくないのです。

この本の仕上げにかかろうか、という二〇〇六年一月十四日に、小学校時代からの親友の裕ちゃん、平山裕一君の奥さん、吟子さんが急逝しました。

急性心不全。夜眠ったまま、朝には亡くなっていたのです。

吟子さんはまだ五十二歳になったばかり。友人たちも夢にも思わなかったことで数日眠れぬ夜を過ごしました。友人ですらそうですから、夫の裕ちゃんの思いは想像に余りあります。

あわてて駆けつけた通夜の席で裕ちゃんが吟子さんの遺影を見上げながら、「もうすこし優しくしてあげれば良かった」と呟きました。

「いや、裕ちゃんは十分に優しくかったよ」。僕がそういうと、彼は寂しそうに「そうかなあ」と応えました。

佐賀県出身の彼女は、松下冷機のデザイナーとして関西で就職した裕ちゃんと結婚後、ずっと奈良市内で暮らしていました。

明るく行動的な美人で、知り合ったひとはみな吟子さんのファンになったくらいです。

主婦としても二人のお嬢さんを、優しくて美しい、すばらしい女性に育て上げ、この後は大好きな夫の裕ちゃんとのんびり老後を過ごすはずでした。

「いつかまさしさん、〇〇神社の〇〇という行事を見に行きましよう」

「必ず〇〇寺の〇〇という祭事を経験してね」

奈良が大好きな彼女は、もっともっと奈良のことを自分で知り、その素晴らしさをたくさんの人に伝えたかったはずです。

彼女はもういないけれども、僕は彼女のそういう志を死ぬまで忘れません。

一人人の生命は誰のものなのでしょうか。

こうして心の準備もできないままに、突然いなくなられてしまうと、今更ながらに気付かされることがあります。

それは、「生命や人の心」に対しては、決して油断してはいけない、ということなのです。

ちよつと気を緩めたが最後、簡単に壊れるし、簡単に消えてしまう。

まだまだ元気だと勝手に思い込んでいるから、色々なことを「今度」でいいと先送りにしてしまうけれども、今の生命には今しか向き合えない。生命に対して、思い上がってはいけない、ということなんですね。

長崎の新天地、中華街で「江山楼」という中華料理屋をやっている僕の兄貴分の王圀雄おうくに おさんが、

彼の大切なお母さんが亡くなった年の、精霊流しの晩、僕に言った言葉を思い出します。

「親が生きているうちに孝行しろ、という言葉があるけど、それは間違いだ」

驚いた僕が「え？間違いなの？」と聞き返すと、彼は、

「間違いだ。孝行は、親が生きているうちにしたんじゃ遅い。親が、『元気』なうちにするのが孝行だ。孝行する気があるなら、親が元気なうちにしてあげてくれよ」

と、そんなふうに行った、その言葉が忘れられません。

この世の中のたくさんの「元気」な生命を、私たちはもっともっと大切に守ってゆかねばなりません。

そしてそれは、身近な「家族」の生命から始めるべきだと思うのです。

さだまさし『本気で言いたいことがある』（新潮社）より

## 水の伝言

高塚 かず子

あたらしい年に あたらしい陽がのぼる

わたしは 若水という名で汲まれて

世界のはじまりを思いだしたところ

これから ひとびとの体をめぐり

双葉をめぐり

この星のすべてのいのちをめぐり

果てしない旅を続ける

底の見えそうな水源地には

できるだけ長くとどまるつもり

どうして涸れたままでいられよう

わたしは 水

いたいけな少女が 飢えや戦争

遠い人たちの不幸に涙ぐむとき

そっと まつげのふちで耐えている水

木を植えてください

酸素を産む木 雨を抱きとめてくれる木を

見知らぬ人同士がほほえみあえる この町の

足もとの土に 木を植えてください

こどもたち あたらしい生命のため

心にも 一本の苗木を根付かせてください

そのおさない木をめぐり

地下水脈のひとしくになりましょう

やがて育った森から湧いて

カいっぱい流れましょう

ちいさな家の ちいさな食卓で

赤ちゃんが ほら

コップの中で揺らぐわたしを

まじまじとみつめている はじめてのお正月

## その時、私は…

安達 かよ

「ねえ、何ばプレゼントする。」

「何がいいかな。」

五月の第二日曜日、今日は母の日です。私たちきょうだい四人、朝早くから集まり、わずかではありますが、お金を持ち寄って、いつもお世話になっている母と祖母に感謝の印としてカーネーションと何かプレゼントをしようと話合っていました。夕食の少し前に私たちは、父とプレゼントを買いに行きました。いよいよ夕食事、私と一つ違いの妹と弟の三人で、

「誰がやると。」

「花は誰。」

などと、隅っこで話し合っていました。しかし、なぜか、一番下の八つになる妹だけは、母と祖父の間に座ってじっとしていました。心なしか妹は、私たちに何か言いたそうに見えたのですが、私は、そんな妹を気にもとめず弟たちとプレゼントを渡す準備をしていました。そして私たちは、それぞれにプレゼントを持ちささやかながらもごちそうのならんでいる食卓へ行き、母と祖母に、「いつもいつも苦勞ばかりかけてすみません。それと、ありがとうございます。」と感謝の一言をそえてプレゼントを渡しました。

その時、今まで黙っていた妹が急に祖父に向かって、「じいちゃん、じいちゃんには、何も

なくてごめんね。」とこう言ったのです。すると横にいた母が、目にいっぱい涙をためて、妹をしっかりと抱きしめました。私は、何か鋭い物で、胸をつき刺されたような感じを受けました。瞬間私たちは、魔法にでもかかったかのように、シーンとなったのです。しまった。私はとっさにそう思いました。あの時妹は、祖父のことを心配して、じっと座っていたのか、私は、なぜもっと早くその気持ちに気づいてやれなかったのか、もっとまわりに気を配らなかったのか。私は、反省するばかりでした。姉でありながら、その時の状況にも気づかなかったことが、どんなに恥ずかしいことであったか、私は、妹に頭が上がらない思いでした。

後から母が、「あの時ね、きわが言ったことは、お母さんにとって何よりの母の日のプレゼントやったとよ。」と私たちに話してくれました。ワイワイ騒いでいる私たちとは反対に、だまってじっと座っている妹の気持ちが横に座っている母には、よくわかったのでしょうか。母はまた、こうも言いました。

「あがん思いやりのある子に育ってくれて、ほんとにうれしかよ。」と…。

思いやりの心。現在の私たちには、この心がだんだん薄れて来ているように思えます。物が豊かになる程、心が貧しくなっている人が多くなっているのではないのでしょうか。たとえ口では、「思いやりのある人になりたい」などと、軽くは言っても、現実には、そうたやすくありません。人を思いやる。人につくす。人に優しくする。ただ単にそのようなことをやるというのではなく、その人の気持ちを充分理解し、相手の身になり、親身になって考える。そのことが、まず、最初に大切なことではないでしょうか。

今は亡き、私の小学校時代の恩師が「人が悲しんでいる時は、自分も一緒になって悲しめ、そしてはげましてやれ。人が喜んでいいる時は、自分も一緒になって喜べ。そげんでいける人間にならんばいけんぞ。」といつも口ぐせのように言っておられました。私は、この言葉を思いだすたびに「こういう人間にならなければいけない。本当にその人の身になり、相手を理解し、そして、その人のためにつくしてあげられる人間になろう」と思うのです。たとえ自分がどんな場合にあっても、人を恨んではいけない。難しいことかもしれませんが、決してできないことではないと思います。もっと相手の身になって考えてみてください。

ここで私は、あえて「してあげる」という言葉を使いましたが、そのことは、決して、自分を上に見た考えではなく、仲間を支えるということなのです。そうすることによって自分も何らかの形で、支えられることがあると思います。私は、あの時の妹の言葉で、私たちが生活していくうえで、一番大切な事を教えられたように思います。人を思いやり、人につくし、そして、お互いに支え合って生きていくということが、どんなに大事なことであったかということを。

昭和六十年 度『少年の主張コンクール』入賞作品

(次ページから掲載している作品は、母親になった本作品の作者が、少年の主張三十周年記念大会で行ったスピーチの内容をまとめたものです。)

## キラキラ輝くステキな人に

植木(安達) かよ

今日の皆さんと同じように私が少年の主張に出場したのは中学三年生の時でした。それから二十数年経った今、またこの壇上から少し大人になった私の思いをお伝えできるといってもすばらしい機会を与えていただきましたことに感謝いたします。

このご依頼をいただいたのはとても不思議なご縁のつながりからでした。私は今、南島原市の図書館で臨時職員としてお手伝いさせていただいております。そこで、ある方から「これによちゃんよね?」と見せられたのが一冊の冊子でした。そこには中学三年生当時、この大会で発表した文章が載っていました。ただ懐かしく当時のことを話していると館長が「せっかくだから記念にもう少し送ってもらおうか。」と言ってくくださったのでお願いをしました。数日後、私の手元にこの一冊が届きました。懐かしいようなちよっと気恥ずかしいような不思議な思いで読ませていただきました。

それから数か月後、全く知らない番号から電話が。少年の主張三十周年の記念大会でスピーチしていただけないかというご依頼の電話でした。ただ、びっくりし、「今の私はごく普通の一人の主婦ですが」と申し上げましたが、「是非」とおっしゃっていただきましたので、これも何かの縁、私でお役に立てるのであればとお引き受け致しました。縁というものはとても不思議で、すばらしいものだと思えました。

どんなことをお話ししたらよいだろうと考えながら、これまでの私の歩んできた道を少し振り

返ってみました。飛び上がるくらい嬉しかったこと、自分を見失うくらい辛く悲しいこと、数えきれない程のいろんな出来事がありました。その度に一喜一憂し、泣いたり笑ったり。三人の子育てをしている今でも、毎日がその繰り返しです。でも、どんなことも今の私ができる上で大切な栄養素になっているのだと思っています。そして、そこには必ず、人との出逢いがありました。生まれて初めて出逢う人、父と母。これまでもまだ叱られることもありすが、時には厳しく育ててくれました。大人になった今でもまだ叱られることもありすが、そして、妹や弟、祖父母、友達、先生、同僚や上司、近所のおばちゃん、ママ友達。それに加えて、この少年の主張に出られたことよって普通ではあり得なかった多くの出逢いを経験することができました。本当に感謝しております。時には人と接することすら避けたいと思うこともありましたが、自分が辛く苦しい時に出逢った人に必ず手を差し伸べてもらい助けられました。

十数年前、すでに社会人になっていた私は、これから自分がどう進むべきか悩んでいました。その時、偶然再会した高校時代の国語の先生に「安達さんはいつも何かやろうという思いは持っているんだけど肝心の一步を踏み出せないよね。」と言われたことがありました。シヨックでした。胸の奥にあった的を見事に射抜かれたようで、私にはとても衝撃的な言葉でした。しかし、それ以上に私の事をちゃんと見ていてくださったということが、何よりも嬉しかったことを覚えています。先生の言葉で私の弱点がそこだったのだとはつきりわかり、一つ吹っ切れたように思いました。それからの私は今まで億劫おっくうだと思いついて避けていたことにもできるだけ積極的に取り組むよう心がけました。

人は誰も、ひとりでは生きていきません。助けたり、助けられたりしながら、いろんなことに気づき、成長していくものだと思います。結婚をし、母となった今、私はどんな小さな出逢いも大切にし、そして感謝しようと思うようになりました。出逢いによって気づかされたり、勉強になったり、楽しみが増えたり、なんだか不思議なエネルギーが湧いてきたり、出逢いは私にとって人生での宝物であることは間違いありません。

そして、私にとって、これまでで一番の大きな出逢い、それは夫と命をかけて守ろうと思える存在である三人の子供たちとの出逢いです。親という仕事は休むことも途中で辞めることも絶対にできない大変なことですが、親になったことで私のこれまでの考え方や生き方も大きく変わりました。家族の存在によって、心から人を愛するということを知りました。

今まで私は、夢を諦めたり、途中で挫折することが多く、落ち込む度に必ず誰かに助けられ、てきました。その度に「この人に出逢えてよかった」と思いました。何の取柄もない私ですが、たくさんの方に支えられ、親という仕事も十年近く続けてこられました。これからは、支えられるばかりでなく、私と出逢った方に「あなたと出逢えてよかった」と思っていただけのようなそんなステキな人を目指したいと思います。

そして、今日皆さんとの出逢いも大切にし、ステキな人になるべく、これから努力していきたいと思っています。皆さんもこれから訪れるであろうたくさんの方の出逢いを大切にし、キラキラ輝くステキな人になってくださいね。

## やわらかなまつすぐ

藤川 幸之助

## 自分らしく

「自分」に「らしく」がつくものだから、きみはきみの心をしっかりと見つめる。きみにできることを全て書き出す。胸が高鳴ることを指折り数える。そして、その「自分」をひたすら歩く。歩きながら、きみは自問を忘れない。本当に自分で選び、決めた道か？誰かのつけた矢印の上をたどってはいないか？誰かの後をぞろぞろとついていていいか？自分の歩く道に臆<sup>おそ</sup>してはいないか？と。失敗や成功がどれほどのものか。きみには無限<sup>とわ</sup>通りの自由がある。きみは、そこを悠々<sup>ゆうゆう</sup>と堂々と歩く。見つけた「自分」が違っていたら、悩んでいないで、また「自分」を見つけて歩き出す。それが、きみが自分らしく生きるということだ。

## 今を生きる

過去のいやな思い出や出来事、過去の自分や過去に出会った誰かに心を乱されるときが、きみにはあった。過去は、心の中にスートツと入ってきて、ときには心の中でどたばたと暴れ、ときには心の中に居座ったりした。そして、きみはきみ自身をいやになったり、誰かを恨んだり、自分の運のなさに自暴自棄になった。しかし、きみはそんな過去を捨てようと探すけれども、過去はもうどこにもなかった。この世のどこを探しても見つからなかったのだ。日々、きみは生まれ変わっている。昨日のきみはもうきみではない。今のきみだけが、きみといえる人間だ。今を生きよう。今をわき目もふらず全力で生きよう。きみはそう誓ったんだ。

## 心の痛みを味わう

きみのその悲しそうな顔を見てみると、きみの心の痛みをそのまま私は代わって感じてやりたいと思う。しかし、そのきみの心の痛みはきみのものだ。きみはその痛みをしっかりと味わう。そして、その痛みを忘れないう。その痛みを通して、きみと同じ人間である他人ひともまた、きみと同じように痛み傷ついているときがあることを知る。きみは、その痛みを人々を思いやるやさしさに変えていく。きみの思いやる心は、きみのまわりに幸せを作っていく。だから、私がそれを奪うことはできない。それは、きみから幸せを奪うに等しい行為だからだ。心の痛みをじっくり味わう。雨上がりのさわやかで新しい青空を、きみは知っているのだ。

## キャッチボール

野球の基本はキャッチボールだそうだ。キャッチボールでは、ボールを相手を取りやすい胸の高さに投げる。このことは相手のことを思いやること。だから、それが野球の基本なんだと。ボールを投げるそのとき、きみは相手のことを思いやる。きみの目・手・足・体の傾き、きみの動きの全て、きみの全部が相手のためだけに捧げられる。相手のことを思いやること。そして、やさしさをその人の心の高さに投げてあげること。これは人生の基本にもなりえる。この基本がしっかりしていれば、人生のどんなことだって乗り越えられる。そんなきみの周りには、多くの人が集まり、きみを助けてくれる。きみの人生が幸せになっていく。

藤川幸之助 『やわらかなまっすぐ』（PHP研究所）より

<http://homepage2.nifty.com/kokoro-index/>

## 私も誰かの力になれる

「たくさんさんの感動と勇気をありがとうございます。これから応援しています。がんばってね。」

マジックで太く大きく書かれた文字。その手紙を書いてくれたのは、私と同じように目が不自由なおじいさん。去年の秋、私が全国障害者スポーツ大会に出場した話を聞き、残りわずかな視力を使って一生懸命書いてくれたのでした。「こんな私でも誰かの力になれるんだなあ」その時私は、嬉しさと誇らしさで胸がいっぱいになりました。

私は、いろんな場面で様々な人たちから勇気や感動をたくさんもらっています。

例えば、家族。私の家族は、全員が視覚障害者です。「家族みんなが障害者なんて、さぞかし大変だろう」と思われるかもしれませんが、決してそんなことはありません。なぜなら、目のことで辛い思いをした時、一番私の気持ちを汲み取って勇気づけてくれるのは家族だからです。

私が目のことでいじめられた時、

「見えんとは生まれつきやけん、しかたないたい。堂々と生きとれば、何も辛かことはなかと。」

「そうねえ。辛かねえ。頑張らんばねえ。」とにかく私の見方になって支えてくれました。

また母は、いつも私に家の仕事を手伝わせます。「イヤだなあ」と思うこともありませんが、大人になってちゃんと自立できるようにという障害のある母だからその愛情だと、今なら分かります。私にとって家族は、存在自体が生きる力なのです。

次に、友達。私には同じ歳のとても仲がいい健常者の友達がいます。隣で白杖をついて歩いていても、ルーペを使って携帯電話を見ている、不思議な顔一つせず、自然に接してくれます。「こい何て書いてあつと?」「こい読んで」自分の目が悪いことなど全く気にせず、遠慮なく話せます。友達は私のことを「障害者」としてではなく、「一人の友達」として接してくれます。そんな友達の態度が、私にどんなことにも立ち向かう勇気を与えてくれるのです。

私の通う盲学校には、視覚に障害のある先生方もたくさんいます。とても前向きで、元気で明るくて、「ほんとうに障害者?」と思っています。私が今のように音楽やスポーツ、弁論大会に積極的に出場するようになったのも、何にでも挑戦させてくれる先生方のおかげです。「視覚に障害があっても生徒に自信や勇気を与えてくれるこんな素敵な先生になれるんだ。」

先生方の姿は、私の未来への希望です。

そして、全国障害者スポーツ大会。私は陸上競技に出場。大会では、様々な障害者が自分の持てる力をフルに発揮して競技を楽しむ姿を目にしました。たとえ手足がなくても、目が見えなくても、自分の夢や目標に向かって精一杯努力する姿はとても感動的です。スポーツができることへの純粹な喜び、最後まであきらめない強さ。そのひたむきさは、私の胸を熱くし、「障害なんかには負けれない」という前向きな心を与えてくれました。手にした金メダルの重さは、私の努力の結果、そして明日への勇気そのものです。

たくさんの人たちからもらった勇気や感動。今度は私が一人でも多くの人に勇気や感動を与えたい。そして、私の夢である「盲学校の先生」になって、障害で悩む子供たちの力になりたい。

おじいさんからのあの言葉は、今も私の胸に強く響いています。私が、自分の夢に向かっていちずに頑張ることが、知らない間に誰かの力になっていることを、おじいさんは気づかせてくれました。私も誰かの力になれる。そのことが私の自信になります。そして夢に向かって大きな一歩を踏み出させてくれるのです。

たくさんさんの感動と勇気をありがとう。

皆さんも、誰かに勇気や感動をもらったことはありませんか。

そして、忘れないでください。あなた自身が誰かの力になっているということ。

平成十八年度第一回長崎県中学校総合文化祭『私の主張』より

## もてなしの心

「ぎっきの人、一体なんやろ。ようするわ。うちらできると思うか。ようせんで」——  
昼下がりに関西弁の女子高生三人が長崎の築町電停で立ち話。驚いてる様子だ。

盗み聞きしてみると——その「ぎっきの人」は中年の女性らしい。出島に行く彼女たちが道を間違えないようにと、自分も諏訪神社下から電車に同乗。本来なら近回りして行けるのに、彼女たちに説明の後、乗り換えて長崎駅方面に行った、という。

県内にも秋の観光客が目立ち始めた。特に長崎市内での修学旅行生は、小人数での自由観光が盛ん。だが土地の事情にうといたため、「旅は憂いもの辛いもの」ともなる。その中年女性はまさに「旅は人の情け」を地でいった。

来年は日蘭交流四百周年。観光地・施設に加えた、一過性の記念事業だけではあまりにも表向きすぎる。案内板、標識、地図、駐車場など多方面からの「もてなしの心」が

求められる。

長崎は人を呼び、人とともに栄えてきた長い歴史がある。名所、旧跡は写真に撮れる。だが人の心は撮れない。旅人の心の中に焼き付けてもらうしかない。

旅には数多い出会いが待っている。しかし、思いもしないその土地の人情に感動することが多い。「長崎に行けばホッとすると、あちこちで聞きたい言葉だ。十数回長崎を訪れた歌人の一人、吉井勇はこんな歌を詠んだ。

「世を厭<sup>いと</sup>へばいにしへびとも旅ゆきぬわれも世を憂<sup>いと</sup>く長崎にゆく」

平成十一年九月二十一日『水や空』（長崎新聞）

## お米の海

みなさんは「お米の海」という言葉を知っていますか。お米の稲には、朝つゆがつき、そのつゆが、太陽の光に照らされると、キラキラと輝きます。さらに、そこに稲の穂を揺らす風が吹いてくると、サラサラと音をたて、つゆのしずくがキラリと光りながらすべり落ちます。

僕は、その眺めを「お米の海」と呼んでいます。その中を一メートル三十八センチと、中学三年生としては決して大きな方ではない僕が歩くと、揺れる稲の中が、まるで海の中にいるように感じます。そして、その海の中を学校に行っていると「さあ、今日も頑張るぞ」と何となく勇気がわいてきます。

なぜ、勇気がわいてくるかと考えてみると、その海は、僕の父が育てた海だからじゃないかと思うからです。

その美しい稲穂の海も、初めは土と水だけのただの水溜まりなのです。

みなさんは農業をやったことがありますか。農業を経験したことのある人は、よく分かると思うのですが、例えば、稲刈りなどは、暑くて下着の中まで汗がダラダラ流れ落ち、腰は痛くなるしきついし…一度経験すると、二度としたくないと思うのです。

事実、僕もそう思っていました。しかし、いやだと思っても、家を継がなくてはなりません。そうなるに当然、家と同時に農業も継がなくてはなりません。そのために僕は、少しずつでも農業になれるために、父について手伝いを始めました。

まずは、種まきです。種まきは苗箱の中に練った土を平に入れ種をまきます。その種が芽を出すまで一生懸命世話をし、やっと田植え機で苗を植えるのですが、そこまでも、かなり根気のある大変さです。さらに、田植えときたら、今は機械で楽なように見えますが、どうしても機械ではできない部分がかなり出てきます。そこは、どうしても自分たちの手で植えなければなりません。機械で植える場合も、ぬかるみ、くさい田んぼの中で一時間もやっていると、もうクタクタになってしまいます。田植えが済んだ後も、稲の周りの草をこまめに取ったり、病気にならないように気を配ったりしなければなりません。

僕は、こんな農業のどこが楽しいんだらうというも疑問に思っていました。しかし、僕たちを食べさせてくれている父や母に、その疑問をぶつける勇氣は僕にはありませんでした。しかし、自分が将来この仕事をしなければならぬと考え始めた時、勇氣を持って、父に「農業ってたのしか？」と尋ねてみました。すると、父は「楽しいか事はかりじゃなかけど秋になった

ら米ば作ってよかったって思うったい」と意味ありげに母の顔を見ながら笑うのでした。母も父の顔を見て笑っていました。

僕には何の事か分からずにいましたが、自分が植えた苗は、いつも気になってしかたありませんでした。あんなに苦勞し、つらい思いをして植えた苗です。枯れたり、病気になっては大変です。父や母とは比べものにはなりません。僕は僕なりに、日曜日や時間に余ゆうのある時は、こまめに草を取ってやりました。

そして、稲が金色に輝く季節になりました。その時僕は、いつもの年とはなんだか違う不思議な気持ちになっている自分自身に気が付きました。その気持ちとは、毎年見なれている田んぼの風景が、今年は違うように思えてしかたなかったんです。その風景とは、最初にお話した、「お米の稲に、朝つゆがつき、そのつゆが、太陽の光に照らされると、キラキラと輝き、さらに、そこに稲の穂を揺らす風が吹いてくると、サラサラと音をたて、つゆのしずくがキラリと光りながらすべり落ちる」そんな風景です。

どうしてだろう、僕は考えました。その時「農業ってたのしか？」と質問した時の父や母の答え、「楽しいか事ばかりじゃなかけど秋になったら米ば作ってよかったって思うったい」と

言った意味ありげな答えを思い出しました。僕は思いました。「つらいから楽しい」「作物の育つ喜び…」作物を育てるのは楽ではありません。田植えから稲刈りまでとても大変な仕事が続きます。だからこそ、作物が育つのが嬉しいのです。楽しいのです。

僕は今年中学校を卒業します。卒業後は農業高校へ進学し専門的な農業経営の勉強をしたいと思っています。そして、これまで以上の「お米の海」を育てることができる、そんな人間になりたいと思っています。

その年の稲刈りは、いつもの年と同じ様にきつかったです、いつもとは違ったなんともいえない充実感が残りました。

今年も田植えの季節がきました。今年には父や母と協力して昨年の「お米の海」以上のすばらしい「お米の海」を作ろうと思っています。

平成十年度『少年の主張コンクール』入賞作品

レギュラーになれなくても、

サッカー部の三年間を人生で生かせ

小嶺 忠敏

サッカー部に入ると、ほとんどの選手はレギュラーポジションを目標にします。しかし、サッカー部で三年間を過ごす真の目的は、「人生の勝利者になること」です。私はよく、生徒に言っています。

「レギュラーになった、ならないというのは、高校時代の三年間のこと。人生九十年のたった三年間です。私たちは、タケノコと一緒に育つようなもの。太陽の光と土の養分を吸収して伸びていき、冬の寒いときは根を長く太くしていく。高校時代にレギュラーになった人はここで花が咲いたわけだが、残りの人生でも花を咲かせなくてはいけない。

たとえレギュラーになれなくても、高校で三年間、サッカー部で練習してきた結果、すばらしい人生を歩むための根を手に入れることができるのです。養分をたくさん蓄えた根を持って磨いていけば、高校を卒業後にならず枝が出て、大輪の花を咲かせることができます。高校の部活動でレギュラーにはならなかったけれど、卒業してから立派な花を咲かせた人はたくさんいます。

たとえば、二〇〇三年の五月に、島原商時代の教え子が、突然、東京から電話をかけてきて、

『先生、どうしてもお会いしたいので、お時間頂けますか』と言う。『来週の月曜日なら、何とかしよう』と答えたら、東京から長崎までポーンとやってきた。それまで、年賀状しか寄せなかった生徒でした。

どんな用事かと思ったら、『先生、七年前にリサイクルショップを始めました。そのときに、一億円売り上げることができたら先生に挨拶しようと思って、コツコツやってきた。今年、ようやく目標が達成できたので報告に来ました』と言う。これには本当に驚きました。事業は七店舗に拡大して、さらに、新規二店舗を計画中だといいます。その生徒は、高校時代、サッカーはあまりうまくなく、補欠にも入れなかった。でも、こう言ったのです。『高校時代、本当に苦しい練習をして築いてきたものが何だったのか。いま、ようやくわかりました』。

三年間、苦しい思いをして練習してきたことは、確実に心と体を鍛えている。絶対、無駄にはなりません。大切なことは目標に挑戦すること。どんなに弱いチームでも、一試合で三回はチャンスがある。人生にも三回はチャンスがあるから、自分を磨き続けることです。そのときに準備ができていれば、大輪の花が咲きます」

朝礼でも、入学式でも、講演会でも、私はよくこの話をしています。

## 空

母が

「空がきれいなね」

と言ったとき

誰かがその言葉を言ったときより

空を深く感じた

母が私達より

たくさん空を見てきたからでしょうか

お母さんも昔こうして

おばあちゃんと空を見ましたか

母のそのときの優しい言い方が

誰の優しさより自然だったからでしょうか

私もいつか

そんなふうに

自然な優しさをもてるようになりますか

## 一冊の文庫本

青来 有一

宮沢賢治の童話を読んだのは、十七歳の頃だった。高校二年生。大人になりかけの年齢だ。十七歳にもなればからだはすっかり骨ばって、髭も生え、声も太くなる。からだの変化に心がついていけない。ようやく、からだの変化を追って、心がぎしぎしときしみながら、かたちを変えていこうとするぐらいの年齢だ。見た目には、童話を読むには、ちょっとばかりむさくるしい姿だったかもしれない。

宮沢賢治の「雨ニモマケズ」という詩は、小学校の教科書に掲載されていた。授業で暗唱させられたのでだいたい覚えていた。

「雨ニモマケズ」というこの詩（ほんとうは手帳に記入したメモのようなものらしい）は、だれもいちどくらいは読んだことがあるかもしれない。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

悠ハナク

決シテ曠（イカ）ラズ  
イツモシヅカニワラツテキ（イ）ル

最初からこのあたりまで、ずいぶんと立派な人をほめたたえた詩かと思ったが、ずっと読んでいくと最後はこんなふうにおすばれている。

ミンナニデクノボートヨバレ  
ホメラレモセズ  
クニモサレズ  
サウイフモノニ  
ワタシハナリタイ

「そういう者にわたしはなりたい」という最後の二行の願いは、詩のいちばん頭から終りあたりまで全編にかかっている。

雨にも、風にも、夏の暑さにも負けない人間になりたいというのはわかる。丈夫なからだをもちたいと願うのは、だれだってそうだろう。でも、デクノボと呼ばれて、誉められもしないで、苦にもされない人間になりたいとは、いったいどういうことなのか。

宮沢賢治とはどんな人だったのか。

ずっと心の中にそんな疑問はかかえていたような気がする。疑問というよりも、興味だろうか。とにかく宮沢賢治という名前はなんとなく胸にひっかかっていた。でも、心の準備がまだだったのか、あいまいなまま時は流れていった。

中学生になり、高校に進学した。だんだんと本を読むようになったのは、やはり、心がぎしぎしきしみながら成長していこうとしていたのだろう。からだの成長のためにはバランス良く食べて、運動をしなければならぬ。同じように、心の成長にも栄養と運動が必要だ。たぶん、読書は心の運動であり、活字は心のごはんでないか。しかも、いくら食べてもなくならない。本はなかなかお得な栄養源ではあるのだろう。

高校二年生のある放課後、学校帰りに立ち寄った書店の棚にならぶ文庫本の背表紙に「宮沢賢治」の名前を見つけた。なにか、びびんと感じた。その本が童話を集めた本だとはあまり意識はしていなかった。

文庫本の表紙には、「銀河鉄道の夜・風の又三郎・ポラーノの広場 ほか三篇」と作品名をならべただけである。「宮沢賢治童話集」とか、「作品集」とか、本そのものの題名はない。どこことなくそっけない。ただ、カバーの絵の感じがすてきだった。緑色がかかった藍色の中に、星や月らしきものが点々とちらばっている。

ばらばらとページをめくってみると、登場人物の名前が、ホモイだの、ジョバンニだの、カンパネルラだの不思議な響きである。物語の中の地名も、イーハトーヴォとか、モリーオ市だ

の外国のように思える。なかなかおもしろそう。「銀河鉄道の夜」も「風の又三郎」も題名は聞いたことがあったが、それまで読んだこともなかった。値段は二四〇円。三十年以上前の当  
時の高校生のこづかいでもまあなんとかなる。さっそく買って帰り、自宅で読み始めた。

言葉づかいはやわらかい。ひらがなが多く、子どもに語りかけるような語り口は、童話だから当然なのだろう。ただ、高校二年生の胸にも、しんしんと沁みてくる孤独感がある。澄んだ寂しさがある。それから、せつないくらいに一途で純粋な願いが胸をうつ。

「銀河鉄道の夜」では、なんといっても賢治の想像力に驚かされた。一冊の小さな文庫本の中で、重いはずの汽車が宙に浮かんで、銀河をめぐる宇宙空間をがたごとと走っているではないか。

銀河鉄道をめぐった主人公のジヨバンニは、友だちのキャンパネルラと一緒に幸せを探しているかと呼びかける。

「僕はもうあんな大きな暗（やみ）の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう」

なんとという熱い友情の呼びかけであろうか。透きとおった美しい決意であろうか。しかし、友だちのキャンパネルラは汽車の中から消えてしまう。現実には川で溺れて死んでしまうのだ。ジヨバンニはひとり唇をかみしめて、壮麗な銀河を仰ぐしかない。

そこには、まわりのひとからデクノボーと呼ばれることを願った賢治の寂しさがぼんやりと重なっているようだった。誉められもしないで、他人から苦にもされない人間になりたいと願

う、慎ましい賢治の胸の奥にひろがる壮大な宇宙とそこに存在している人間の孤独を感じるこ  
とができた。

それでも、宮沢賢治という人は、ひとつの大きな謎であることには変りはしない。いや、謎  
はますます深まっていった。

文庫本というのは、巻末にたいはいは詳しい解説がついている。時には年譜も掲載されてい  
て、たとえば、宮沢賢治がいくつの時になにをしたか、およその一生をたどることができる。  
この文庫本にも年譜がついていた。宮沢賢治が自分と同じ十七歳の時になにをしていたのか、  
すぐにわかる。

大正二年 一九一三年、宮沢賢治、十七歳。どんないきさつかはわからないが、寄宿舎から  
追放されたとある。北海道修学旅行に行っている。ロシア文学を読んでいる。最後にさりげな  
く、「この年も東北地方は記録的冷害、凶作」とつけくわえられていた。

解説は、天沢退二郎という詩人としても知られた方である。賢治の生涯と文学が、「宮沢賢  
治とは誰か」と題して詳しく紹介されている。農芸化学者で、農学校の教師で、詩人であった  
賢治。科学者の精神と詩人の心をもっていた賢治。しかし、心の奥底には、東北地方の凶作に  
苦しむ人々の姿に心を痛め、みんなの幸福を願い求める宗教者の魂も宿していたようだ。

宮沢賢治とはなんとも複雑で、深い宇宙をまるまる胸に抱いている人だったらしい。

高校二年生、十七歳の未熟な心は、そんな興味がだんだんと深くなっていき、文庫本の童話

だけでなく、解説や年譜もふくめて、なんどもくりかえして読んだ。

宮沢賢治と彼をめぐる言葉を、毎日、毎晩、もぐもぐと食べ続けたのだ。

あれから三十年以上が過ぎた。あの文庫本はいったいどうなったか……。  
実は今も手元にある。

表紙の色は変って、だいぶ古びたが、時々、まだ読み返してもみている。

宮沢賢治という人はいまだに謎だ。詩人とか、農芸化学者とか、教師とか、肩書きだけでは推し測れない深淵をかかえた人だ。その人が誰であったのか、すっきりと理解した気にはならない。それどころか、ますます謎は深まってきているように思える。うっかり宮沢賢治という深淵をのぞきこんだばかりに、もう、眼をはなすことができなくなったのかもしれない。

ただ、十七歳で宮沢賢治の本に出会ったことはとても幸運だった。宮沢賢治そのひとの存在を知ったというだけでなく、三十年以上もくりかえして読むことになる書物に出会えたことが、なによりも幸運だったと思う。

優れた書物は、子どもの時も、大人になっても、いろんなふうを読むことができる。それぞれの年齢に応じて、どんどん深くなっていき、読むたびに新しい発見がある。同時にいろんな謎を問いかけてくる。

そんな書物が、かたわらに一冊でもあれば人生はとても豊かになる。

## いっしょ子よ

永井 隆

わがいとし子よ。

「なんじの近き者を己の如く愛すべし」

そなたたちに遺す私の言葉はこの句をもって始めたい。そしておそらく終わりもこの句をもって結ばれ、ついにはすべてがこの句にふくまれることになるであらう。

これは多くの人が聞きなれた言葉であり、そなたたちも大きくなればたびたび耳にするであらう。なぜなら、これは人の守るべき最も大きな掟であるからである。

「なんじ心を尽くし、霊を尽くし、意を尽くして主たるなんじの神を愛すべし」

というのが第一の掟であり、初めに述べたのが、その後続く第二の掟である。すでに何千年来いい古された言葉を、わざわざ遺言として事新しげに取り上げなくともよさそうに、とあるいは思うかもしれないが、わが子よ、言葉を知っているということと、その言葉の命ずるとおり行なうということとは大きな違いがあるのである。何千年来、何千億とも数知れぬ人々がこの言葉を知っていた。しかし、この言葉のとおり行なった人はおそらく指折り数えるほどしかなかったのではあるまいか？現にこの私が、初めてこの掟の言葉を聞いたとき、眼がさめる

ばかりに心をうたれ、一生この掟を守りゆこうと心に決めたのであったが、今ふりかえりみて真に恥ずかしいばかり、掟に背き通してきたのである。

己の如く……人を愛す。

言葉はまことに易しい。しかし、いざこのとおり行なおうとすると、わが生命を棄てるところまでゆかねばならぬ場合も起こる。わが子よ、ここにこの句をあげたのは、言葉を教えたのではなく、これをそなたたちが一生のあいだ常に行なってくれるように願うことである。人はともすればわが欲に心を奪われ、この最も大きな掟を忘れがちなものである。それゆえ私はこの私らの住む家に如己堂と名をつけた。

わが子よ、如己堂に住む者よ。どうか家の名にふさわしい愛の一生を送っておくれよ！  
——これこそ私のそなたたちに遺す言葉のすべてである。

### 夢をもて

いとし子よ、夢をもて！

美しい夢をもて！ 夢はただ一つ、一生ひとつの夢を追え！

夢をもつ人生は楽しい。夢を追う人生は日々に新しい。

コロンブスは夕焼けにそまる水平線を見はるかすたびに、あの波のはてにきっと美しい土地があるにちがいないと思った。大西洋を乗り越えて、その新しい楽園に渡ろうという夢が、ついにアメリカ大陸の発見となった。

大空を飛びたい、トビのように悠々と晴れた空を飛びまわったら、どんなに愉快だろう。なんとかして空を飛ぶ工夫をしたものだ。ライト兄弟はいつも空を飛ぶ気持ちよさを夢に思っ  
て苦心を重ね、ついに飛行機を発明した。このごろの子供は飛行機で空を飛ぶことは、下駄を  
はいて道を歩くのと同じく、あたりまえのことだと思っているから、爆音が頭の上を過ぎても、  
ふり仰ぎもしないが、むかし飛行機というものが初めて姿を見せたときの騒ぎといったら、大  
したものだったよ。

私はそのころ中学生だった。ちょうど学期試験の最中だった。新聞には何日も前から大きな  
見出しで、飛行機が市の空を通ることが書き立てられていたので、その日に雨など降らなきや  
いいかと、まるで日食のときのようにみんな心配していたものだ。雨が降ったり、少し風が強  
かったりすると、飛行機は飛べなかつたのだからね。いよいよその日は来た。よく晴れて風も  
なく、市民はみんな安心した。

中学校では朝礼のときに校長先生が、生徒に向かって、たとい飛行機が来ても、中学生の本分を守り、騒いで校庭へ飛び出したりなどしてはいけない、飛行士が空から見ても、あの中学は規律が乱れていると思うから、と訓示した。

第三時間目が始まって十五分もたっていたろうか、生徒が試験の答案を真剣に書いている最中だった。中学校はひっそりしていた。突然窓の外の空がガーツとうなった。——ソラ来たゾ！ワーツと教室は総立ちだ。規律も何もあったものではない。監督をしていた先生の姿が真っ先に教室を飛び出していった。生徒は白い答案用紙を机の上に放ったまま、大声を上げて校庭へ飛び出した。

飛んでいた、飛んでいた、青空を、茶色に塗った複葉機が——。

私はあるのときの感激を何十年かたった今でも、まざまざと胸の中に呼びかえすことができる。ああそのとき、校長自身が高い段の上にながって、両手を振りながら、アアア、アアアと叫んでいた。

(中略)

むかしから、いろいろの人がそれぞれの夢をもった。その夢がみな実現されたわけではない。ただ大きな夢をぼんやり抱いているだけで、その実現のために一途に工夫を積み重ねないで過ぎた人は、結局なんにもならなかった。

また夢を実現するために努力をしたといっても、途中であれこれと気が変わり、あれをやりかけては止め、これに手を出してはまた投げた人も、結局ものにならなかった。

いとし子よ。人の一生は短いようで長く、また長いようで短いものだ。多くの人に共に喜んでもらうほどの大きな夢は一人に一つしか実現されない。「種なし西瓜を作る」という夢が実現するのには、一人の学者の一生が費やされた。

わが子よ、もつ夢はただ一つ。その一つの夢を追うて一生を終わるのだ。わき目もふらず、足ぶみせず、一途に前へ前へと進んでゆけ！

一生にただ一つの夢。——その夢が小さければ、そなたの一生の収穫は小さい。その夢がみにくければ、そなたの一生もみにくく彩られるであろう。

それゆえ、もつべき夢は美しくなければならぬ、大きくなければならぬ、高くなければならぬ、正しくなければならぬ、新しくなければならぬ。

そして忘れてはならぬ点は、決して己ひとり利益をねらう夢であってはならぬということ

だ。すべての人が、世界中の人が、今地球の上に生きている人類だけでなく、その子孫に至るまで、共に喜んでくれるような夢でなければならぬ。人類こそって喜んでくれるようなことであれば必ず神もお喜びになる。そうだ、もつべき夢は神のみ旨にかなうものでなければならぬ。

永井隆『いとし子よ』（サンパウロ）より

## 如己堂

長崎市名誉市民、永井隆医学博士の病室兼書斎。



島根県出身の永井博士は、長崎医科大学卒業後、放射線医学を専攻した。当時は結核患者が多く、医療機器も不十分だったことから、放射線を過量に受け、「慢性骨髄性白血病、余命三年」と宣告された。その二か月後、原爆を被爆し大けがを負って、妻までも失ったが、被災者の救護活動に積極的に取り組み、ついには寝たきりとなってしまった。

しかし、科学者としての不屈の研究心とカトリック信徒としての厚い信仰心もあって、病床にありながら十数冊もの著書を執筆した。

博士は、この建物を「己の如く隣人を愛せよ」との意味から『如己堂』と名づけ、ここで二人の子どもと生活した。そして、ここから世界中の人々に戦争の愚かさや平和の尊さを発信し続け、昭和二十六年五月一日四十三歳で永眠した。

博士の恒久平和と隣人愛の精神は、今も多くの人に受け継がれており、如己堂はその象徴となっている。

## 一枚の紙切れ

今から一年半ほど前の高校入試の時のできごとである。一日目だったか、二日目だったかは、よく覚えていないが、とにかく三科目テストのあった日である。朝からの二科目のテストを終え、体育館で、みんなでお弁当を広げようとした時、私のお弁当箱に一枚の紙切れが、折り畳まれて、セロハンテープで、とめられているのに気づいた。

当然、母からであることは、すぐにわかった。しかし、みんなの前で読むのが、なんとなく恥ずかしかかったので、誰にも見つかからないように、慌てて制服のポケットにしまい込んだ。そして、午後のテストの為に再び教室に入ってから、こっそりと、机の下の辺りで広げてみた。

「おつかれさま!!」

お昼からの最後までがんばるんやで……

受験番号は、忘れるなよ。

ちよっとくどかったかな、アハハハ……

では、はりきって、どうぞ。

母さんより」

普段母は、「……やで」とか、「……するなよ」という言葉は使わない。母は、そのような言葉を使って、私をリラックスさせようとしたのだ。しかし、無理して使った、あまりにもわざとらしい言葉に、私は、なお一層、参った。うれしかった。そして、母に、心から感謝していた。

しかし、家に帰ってから、その手紙のことは、何も話さなかった。というより、話せなかった。「ありがとう」の一言ではあるが、照れくさくて、とても言えなかったし、言ったら、なんとなく目に涙が浮かんできそうな気がした。母の前では、なぜか泣きたくなかったから……。

母は、あの時の手紙を今でも覚えてるだろうか？ 私は、あの日以来ずっと机の中にしまっている。そして、何かの拍子に、ふっと思い出す。読みかえず。ぐっと、手応えを感じる。そこに「母」がいる。

そして、再び机の中にしまう。次に、私に何かが起こり、また、思い出す時まで……。

## 「お地蔵様の市」に学ぶ

八月二十四日は、祖父母の家でお地蔵様の市といって、子供達の手でお地蔵様をまつる行事があります。近所の幼稚園児から中学生まで、この日を楽しみにしています。

今年のお地蔵様の市は、雨にもかかわらず朝早くから二十人ぐらいの子供達が押しかけ、みんな、頭からぬれながらも一生懸命協力して周りを掃除したり、きれいに飾ったりしていました。午後からは、男子が箱を持って一軒一軒、志を受け取りに行き、女子は、お参りに来る人に渡すおだんごを作りました。小さな子が、手をあずきだらけにしながら、「何だか、働きに行ってるパパの帰りを楽しみに待ってるママの気分よ。」とおしゃまに言って、その場のムードを和ませていました。

夕方になると、お参りに来られる人も増え、私達はお茶とおだんごを配るのにてんてこまい。男子は、太鼓を持って声をからしながら、さかんに呼びかけています。しかし、今年は午前中雨だったせいか、お参りに来る人の数は例年より少なめでした。

男子は、かなり疲れたらしく、何かおもしろいことはないかな、ということ、おさい銭箱に細工を始めました。箱の中の十円玉を取り出し、百円玉ばかりにするのです。そうすると次から来る人も百円玉。どんどんお金もたまるという考えなのでしょう。

ちようどそこへおばあちゃんがお参りに見え、おさいふの中を見ているけれど、十円玉しか

ないらしく、さっとお参りして、おだんごも受け取らず、曲がった腰をより曲げて逃げるように帰って行きました。男の子達は顔を青くして、そのおばあちゃんを追いかけてました。私たちもついて行きました。おばあちゃんはとても喜ばれて、目に涙をためて「あんた達にきれいにしてもらってお地蔵様もさぞ、お喜びでしょう。」と頭を下げるのです。私たちは、自己嫌悪でおばあちゃんをまともに見ることができませんでした。それを見ていた近所の高校生のお兄さんが「このお祭りは何のためにするのか知つとるや。日頃お前達を守ってくれるお地蔵様に、今日は感謝する日だぞ。」と、さり気なく注意してくれました。

私達は、自分達だけでこのお祭りをやってるんだ、という考えがあったようです。しかし実際は、いろんな人の協力で行われているのです。そうでなければ、五十年以上も続くわけがありません。私達が疲れたところに、手作りのケーキを持ってきてくれるおばさん。「おだんご、おいしかったよ。」と言ってくれる人。小さな子供に、「頑張れよ。」と頭を軽くたたいて、はげましてくれる人。そういう人々に支えられて、私達が続けていけるのです。こんな時は、人のやさしさなどつくづくありがたいな、と思います。私にとって最後の参加になりましたが、このお祭りであるんなことを学びました。お地蔵様の市、是非とも続けていってほしいと思います。

昭和五十八年度『作文コンクール』（長崎県教育委員会）入賞作品

## せんだんの実のようじ

竹下 哲

ここに落在して

私がこの三月まで勤務していた教育センターは、大村公園の只中にあります。四百年前のお城の跡で、大木がうっそうと繁り合っています。その中に、一本のせんだんの木があります。青空に亭々と聳<sup>そび</sup>える大木です。冬になると黄色い実をつけます。空いっぱいには豆をばらまいたような風情です。冬の終わりごろ、その実がパラパラと落ちてきます。

その有様を見ていると、日当たりのいい、地味の肥えた処に落ちるのもあれば、薄暗い茂みの中に落ちるのもあります。石ころだらけの、痩せた土地に落ちるのもあります。でも、どの実も平然としてそこにあります。デンと落着いています。落在——ということばを、その時はしみじみと思ひ出しました。

そして、春になると、それぞれの実が芽を出し、茎を伸ばし、葉をひろげ、やがて薄紫の花をつけます。どの実もいっしょうけんめいです。もしその土地が痩せているならば、茎を短く

し、花の数を減らしてでも、精いっぱい生きようとしています。そのけなげさ、そのいじらしさ——見ていて涙がにじんできます。頭が下がります。

ひるがえって、私たちの現実を顧みると、ややもすれば私たちは、他人をうらやんだり、ねたんだり、あるいは自分の能力や境遇を悲観したりして、一日一日をむなしく過ごしてしまいがちです。一刻一刻に心をこめることをしないで、いい加減に片づけてしまいがちです。

九条武子夫人の歌に、——見ずや君明日は散りなむ花だにも力の限りひとときを咲く——、というのがあります。明日は散ってしまうであろう花でさえも、ひとときを力の限り咲いているのです。私たちも、この花のように、そして、あのせんだんの実のように、それぞれの置かれた境遇に「落在」して、精いっぱい「自分の花」を咲かせなければならない、と切に思います。

## 今をいきいきと

諸君は「大いなる可能性」を秘めて、「今」を生きているのです。過去を生きているわけで

もなければ、未来を生きているわけでもありません。過去を背負い、未来をはらんだ今を生きているのです。その今を、いきいきと生きることが肝要です。

ところが往々にして、私たちは、いたずらに過去を夢見たり、「山のあなたの空遠く」未来を夢見たりするばかりで、今をいきいきと生きようとはしません。あるいは、今はどうもやる気が出ない、乗り気になれないなどと言って、今をぼんやりと過ごしてしまいます。

次の文は、ある高校生とカウンセラーとの対話です。

(生徒)

自分がいやになる。気を散らさないで一心にやりたいのですが、ついマンガを読んだり、テレビを見たり……。期末試験まであと十五日。

(カウンセラー)

まちがいです。雑念をなくそうと思っても、なくなるものではありません。君は精神を統一してからやろう、と考えているんじゃないかもしれません。それは「絵にかいたボタモチ」です。雑念があるのが普通の人です。雑念があるままに、しっかりやるしか手がないのです。

そのとおりですね。雑念があるままに、机の前に坐るのです。心が乱れたままで、ともかく本を開くのです。そのうち、気持ちが悪く落ちてきてきます。いつの間にか読書に没頭している自分に気づくのです。それが今を生きるということなのです。

学校を取り巻いている楠の若葉が、五月の空にキラキラ輝いています。太陽の光に照り映えています。雨が降れば降ったで、雨に濡れてあざやかな緑の色を放ちます。楠の若葉は、今をいきいきと生きているのです。

諸君が——進学するにしても、就職するにしても——、今をいきいきと生きてくださるようお願いしてやみません。過去を背負い、未来をはらんだ今を、心をこめて生きてくださるようお願いしてやみません。

竹下哲『いのちのうた』（長崎県教育研究協議会）より

## 食育の事 ― 食べる事とは ―

脇山 壽子

「食育」という文字や言葉を、テレビや新聞、雑誌で目にする事が多くなりました。「早寝早起き朝ごはん」というキャッチフレーズも出来ました。現在の日本の食生活は乱れてきています。私たちの食生活も大きく変化しています。地域性や「地産地消」が大きく叫ばれていますが、これらはなくなりつつあるのではないのでしょうか。いろいろな条件や変化が重なって私たちを取り巻く「食」は、悪い方向へ向かっている思いがします。

食生活が乱れると人間の体調は崩れ、国が弱体化するとも言われています。食事はそれほど、大切なものなのです。食生活の墮落が続くと、「食文化」が崩れ、生き方も変化すると言われています。「キレる」とか「犯罪の若年化」も食生活の乱れがその一因ではないかと言われています。社会や家族や人々のつながりが、大人も子どもも少し前の日本の社会とは、大きく、また急激に変化してきています。本当の人の心が育ちにくくなってきた様に思います。

「食べる事」「食事をする事」とはどんな事か、今一度深く考え、見直さなければならぬと思います。

「食事」とは「命をはぐくむもの」と常に強く思いたいものです。それには「安心・安全で新鮮なものを選ぶ目を持つ事」「衛生的である事」、それに「経済性を考えながら毎日の食事作りを行う事」と私は考えます。心して「食」とは「命をはぐくむもの」という強い意識をもたないと流されてしまうという思いがします。

最近のテレビや雑誌には、グルメ番組やグルメの記事が競争の様に溢れています。料亭やレストランの料理と家庭料理とは根本的に違う事を認識しておくべきだと思います。料理番組や料理の記事や本を見ていると、家庭料理と言われるものでも、きらびやかなものが多い様に思います。

家庭料理は毎日が祝日ではありません。自分の家の料理とグルメ番組とを比べない事です。家庭料理は家族の為の料理です。「命をはぐくむもの」であり、「食」は医食同源、命を守るものでなければなりません。

日本は四季に恵まれ、季節ごとにお正月をはじめとする多くの行事があります。それらの行事の時に食べる行事食は旬のものを使い、理にかなっており、まさに「食文化」です。特に長



崎の地は温暖で、山の幸、海の幸に恵まれ多くの食材を容易に手に入れる事が出来ますので、それらを使った行事食が大いに発達しました。

「地産地消」とは、この事ではないでしょうか。春になると体を目覚めさせると言われています「落（ふき）」や「わらび」「たけのこ」等のほろにがい味のある食材。夏には体温をにがす効果のあるキュウリをはじめとする瓜類。秋冬は体を温める大根等の根菜類と、これらの野菜はその季節を越え、次の季節の為に体調を整えてくれるような気がします。年中トマトやキュウリが出回る現在、心して食材を選ばないと、季節の感覚も体調も悪くなる気がします。

「食育」とは一時的なお祭りではいけないと思います。「命をはぐくむ」という強い思いで長く続け、伝えなければならぬのです。多くの食材の命をいただき私たちが

の命をつなぎ、次の世代へ託する命は自分のものであっても、自分だけのものではないはずだ。  
す。

日本人は昔から食べ物大切にしてきました。加工食品を作り保存し、決して食材を無駄にはしませんでした。物を保存するのに塩漬けや酢漬け、干物や佃煮にしました。多く取れた時に加工し、取れない時や災害に備えてきたのです。これが日本人の知恵なのです。

「梅干し」や「かつお節」はその最たる物です。「かつお節」の独特の旨味成分はイノシン酸を主とし、この「ウマミ」という言葉は世界の共通語になりました。

戦争中、防空壕に逃げる時、私の小さなリュックの中には、お人形とアメ玉とかつお節が一本入っていました。「これさえあれば大丈夫だからね」と言った母の言葉を今も忘れる事ができません。

明治生まれの姑は、豊作で値の下がった白菜がブルドーザーで潰される様子をテレビで見た時、「何ともったいない事。白菜は大事な食べ物だったのよ。昔は年末年始になると白菜を植えた植木鉢を他家よりいただいたものだったの」と語っていました。そのいただいた白菜は

一枚ずつ葉を剥ぎながら大切に食べていた事も話してくれました。

その事を歴史文化協会で越中哲也先生に申し上げますと、先生は「そうですよ」と言われて、白菜が植木鉢に水仙とともに植えてある昔の本を見せてくださいました。長崎には砂糖をはじめ、多くの食材が唐蘭船で運ばれてきました。白菜もその一つだったそうです。

また、医術をはじめ海外の文化や多くの技術も入ってきました。カステラや天プラで代表されるお菓子や料理もその一つです。今の日本の文化の基礎になった事を思い、私たちはこの長崎の地に生まれ育つ事を誇りにしたいと思います。

長崎の主婦は料理上手が多いと聞きます。それは、長崎の土地では国内外の多くの知識を得る事ができたからだと思います。

長崎には、おばあさんやお母さんの得意料理やたくさんのお暮らしの知恵があります。それを伝えられた私たちの家庭はどんなに幸せでしょう。時代はめまぐるしく変わっていますが、変えてはいけないものは、家庭の心豊かな食事です。家庭の料理は、心がこもっているから飽きないのです。

「もったいない」。簡単に食べ物や物を捨てる事を考え直してみませんか。美しいものを美

しいと思ひ、おいしいものをしみじみとおいしいと思ふ事のできる幸せ。「これは滋養物だからゆっくり味わって食べてごらん」といつてくれた姑も母も今はいません。姑や母を思ひ出す時は料理を思ひ出します。これは二人の母の料理には愛情が込められていたからだと今しみじみと思ひます。

娘たちや次の世代を共に生きる方々に少しでも何か伝え残す事ができればという思ひが強くなります。

「いただきます」「御馳走様でした」「ありがとう」という美しい日本語が死語になりません様にと願ひます。

## 高校生のあなたへ

平田 徳男

はじめに

年輩の人に、「人生を振り返って、心身ともに変化の大きかった時期はいつか」とたずねたら、大方の人が「青春時代」と答えるのではないでしょうか。さらに、「その青春時代の中で、最も変化が大きかった三年間を任意に選ぶとすればいつか」とたずねたら、「高校時代」と答える人がいちばん多いのではないかと思います。

この時期は、人生八十年を生きるための、「心」と「体」と「友人」をつくり、自分の進む道を見出す時です。生きるための「根」をしっかり育ててほしいという願いをこめて、私が読んだ本からの文章や高校生に話したことなどをあげながら、書いてみましょう。

### 三億分の一

私たちが、人間としてこの世に生を受けるのは、極めて稀な幸運（確率）だといわれています。ある女医さんが書いた本にある話です。

診察室に、入ってきた一人の女子高校生に、どうしたのかとたずねると、「中学時代からシンナーを吸っていたので、身体のが心配でたまらない。番長格の上級生から、『自分たち

の身体はあちこちやられていてももう元に戻れない。あがいて逃げてでも駄目だ』と言われた』とのこと。

数日後に、種々の検査をした結果、何の異常も認められなかったことを話したら、ほっとしたらしく、「実はもう将来子供が産めないくらい駄目になっているのではないかと、心底気に病んでいた」と正直に話した。

そこで、女医さんは彼女に、「荘厳で神秘的な受胎ドラマ」の話をします。

《女性には、生まれた時卵子の元になる細胞を十万も持っている。それが思春期に到るまでに三万くらいに厳選され、実際に排卵に導かれる数は僅かに四百個程度である。排出された卵子の寿命は一日以内であるから、精子と出会える時間は極めて少ない。

一方、精子の方は、一回に三億が女性の体内に送り込まれるが、この中のたった一個だけが、卵子との出会いと結合を果す勝利者となる。

女性の体内に入った精子は三つの試練に出会う。まず入っていった体内は酸性を帯びているので、酸に弱い精子は一斉に、その奥のアルカリ性の子宮頸管へと必死で泳いでいく。弱いものや未熟なものがふるい落とされる。

ようやく子宮頸管にたどりついたものも、ここから、子宮腔内を通り抜けて卵管へと進んで行かなければならない。ところが繊毛のそよぎは、進行方向と反対の向きのため、精子は流れ

に逆らって泳いでいかなければならず、この第二の関門で多くはふるい落とされ、屈強のものだけ残る。

こうした困難に打ち勝って卵管にたどりついていても、必ずしも卵子と出会えるわけではない。難関を越えながらやってきた精子が首尾よく卵子に出会えた後、第三の最後の競争が展開される。卵子に出会った精子は、一斉に卵子の表面に群がり、中に入ろうとするが、卵子は表面に顆粒膜という層をはりめぐらし、容易に精子の進入を許さない。そこで精子は、酵素を分泌して、なんとかこの顆粒膜を溶かして卵子の内部に入りこもうとアタックし始める。その時、おびたらしい精子に囲まれた卵子は、ルーレットのように回転をし始める。回転する一個の精子とそこに群がるおびたらしい数の精子。そしてついにある一点で顆粒膜が溶け、一番そばの精子がただ一個、そこから卵子の中に入る。とその瞬間に、卵子の表面は受精膜という新しい膜に変わり、他の一切の精子の侵入をはばむ。》

受精までの道のりをこのように説明した後で、著者はこう言っています。

《このような試練の果てに、三億の中からただ一個の精子が選ばれる。

これはより強い個体を子孫に残そうという種の保存の法則に導かれたのである。その精子の頭部に載っている遺伝子により、生まれ来る子ども性の別は決定され、さまざまな遺伝特性が子に受け渡される。ほんのわずかなちがいで隣の精子が卵子に侵入していれば、子どもは全く別の特性を遺伝することになる。それを思うと一個の卵子と一個の精子の出会いの恐ろしいま

での莊嚴さに心打たれる。》

人間はみな、出発点からして、稀な確率と幸運によって選り抜かれた選手なのですね。

### 私はとるに足りない存在ではない

また、スイスのある学者は、精子の数を一億、女性が持って生まれた卵子の数を百万、両親が出会った確率を十億分の一として計算し、自分がこの世に生まれた確率を「一〇〇兆×一〇億分の一」であるとした後で、こう言っています。

《私はかぎりなくたったひとつ。これからも唯一無二の存在でありつづける。誰も私と同じ遺伝組成を持ったことがなく、これからもけっして持つことはない。(中略)

だから、私はとるに足りない存在ではないということだ。私はじゅうぶん自分のことに心を配っているだろうか。私は今まで自分の姿をきちんと認めてきただろうか。私は自分という人間に、それ相応の敬意を払っているだろうか。これらの問いに答えるために、せめてここではんのいっときだけ、目を閉じて静かに考えてみよう。》

### 高らかな人生肯定

宮崎のある歌人が、講演の中で、一人の障害者のこんな歌を紹介されたそうです。

《もう一度生まれ変わってくるときも塩谷トモ子の子に生まれたい》

塩谷トモ子というお母さんの子どもとして生まれてきた障害者。だけど、もう一度生まれ変わってくるときも、この母親の子どもとして生まれたい、ということでしょう。

この歌を歌人は、「高らかな人生肯定」の歌であると言われた。

どういう生まれ方であるにせよ、どんな状態にあるにせよ、今の自分というものを肯定していく。自分を信じて、自分の可能性をかけて、自分が今ここにすることを素直に考えていこう。そんな高らかな人生肯定がこの歌にはあるということです。

人間には生まれる時、自分で選べないものが四つあるそうです。「親」・「性別（男女）」・「生まれる時」・「生まれる所」の四つです。

「どうしてこんな親から生まれたのだろう」と嘆くのではなく、この歌のように、「生まれ変わってもこの親の子として生まれるたい」という肯定から出発できることはすばらしいことです。

**これで君の気分は楽になるだろう**

《小学校を中退した。

田舎の雑貨屋を営んだ。破産した。

借金を返すのに十五年かかった。

妻をめとった。不幸な結婚だった。

上院に立候補。二回落選。下院も落選。

歴史に残る演説をぶった。

が、聴衆は無関心。新聞で毎日たたかれ、国の半分からは嫌われた。

が、こんな有様にもかかわらず、

想像してほしい、世界到るところの、どんなに多くの人が、

この不器用な、不細工な、

むっつり男に啓発されたかを。

その男の名は……もうお分かりであろう。

その男は、自分の名を、いとも簡単にサインしていた。

エイブ・リンカーンと。》

エイブ・リンカーンとは、もちろんアメリカの第十六代大統領エイブラハム・リンカーンのことです。貧しい丸太小屋に生まれ、一年足らずの小学校だけの学歴ですが、苦勞の末に大統領まで上りつめ歴史に残る数々の業績をあげました。彼の「人民の、人民による、人民のための政治」という金言とともに。

人は誰でも、「あんなになりたい」というあこがれや、「こうありたい」という理想を持っています。そして、その達成のために、「もっとがんばらなければ」とか、「もっと強くならなければ」と自らを励まし、律しながら、努力しています。

その際、適度の緊張は向上のいい刺激剤になりますが、それが強すぎると、「焦り」と「不安」の虜とりこになって、自分自身を見失うことがあります。

そんな時、力を与えてくれるのがこのリンカーンのことばです。

### 平均が一になるために

先日の養護学校訪問の感想文を読ませてもらいました。

まず何よりも、君たちが担任の先生と一緒に、養護学校に出かけてくれたことを嬉しく思います。自分の体をそこまで運んで、自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の手で触れ、全身全霊をもって障害のある子どもを感じ取ったことの意味はたとえようもなく大きく尊いものです。

そのことがよく表れた感想文でした。

私も以前、あの学校を訪ね、子どもたちの心身の二重三重の障害の大きさと複雑さに大変な衝撃を受けました。それからずっと、こんなことを考え、話してもいます。

《健康を恵まれたものは、それを喜ぶだけではすまされない。人間の生活能力（人間としての尊厳ではない）の平均が一であるとすれば、平均の一より大きい能力を持つ者は、それより小さい者のために、何らかの形で貢献・奉仕しなければならない。その方法はさまざまです。

例えば、目の不自由な人の手を引いて横断歩道を渡ることも、足のよく動かない子どもを背

負ってやることも、一つの奉仕です。そして、それは直接的なものです。

しかし、そういう直接的なことがいつでも、どこでも、誰にでもできるわけではない。だとすれば、われわれは、自分に与えられた能力を可能な限り伸ばし、自分の職責を十分に果たすことによって、間接的にでも障害者の役に立てるのではないだろうか。

電気・電子に興味と関心のある者は、その道を研究して障害者のための新しく使いやすい用器具を作り出す。法律を学ぶ人は、障害者が生活しやすい環境・条件を整備する制度を整える。医者や看護士などをめざす人は、いうまでもない。音楽や絵の得意な者は、音楽や絵を通じて、心やさしい者はそのやさしさを豊かな情操を伝える。

どんな立場にあっても自分のなすべきことを誠意をもって果たしていけば、それはめぐりめぐって、障害者のところへも廻っていくのではないだろうか。》

「多く受けた人は、多く返す」という言葉もあります。健康でさまざまな能力に恵まれている君たち。どうか、「いつの日か、何らかの形であの子どもたちのお役に立ちたい」という気持ちを忘れないでください。

養護学校の校長先生が、最後に、「この子どもたちの分まで勉強してください」と言われたのは、そんな意味ではなかったでしょうか。

## カウントダウン

二十一世紀、二〇〇一年をめざして、様々な人がこんなことをしたい、こういうことに挑戦したいと考えています。その一人として、元日（一九九八年）付けの「朝日新聞」は、日本画家の平山郁夫さんを紹介していました。

《「今世紀最後の日」の完成を目指し、奈良薬師寺の壁画「大唐西域記」を描き続けて十五年。平山さんのライフワークはいま、七割まで進んだ。作品は高さ三メートル余り、全長は五十メートルに近い。高僧、玄奘三蔵がインドから中国へ経典をもたらした十七年の旅を描く。「あと三年、いよいよ終盤、カウントダウン」。構想を練り始めたのは約三十年前。旧陸軍が中国から持ち帰った三蔵法師の遺骨を薬師寺に分骨する話があり、骨を納める建物内部の壁画を自ら志願した。

「玄奘は、二十九歳の時の『仏教伝来』以来、追いかけてきたテーマ。私の集大成として、今世紀いっぱいかけて仕上げ、玄奘にささげようと決めたのです」。以来、玄奘の辿った道のりを追体験する旅が始まった。零下二十度のパミール高原で高山病に苦しんだことも。玄奘の苦勞や使命感に思いをはせながら、見てきたものは「結局、自分自身だった」と言う。

多忙な中、最近は自宅の画室で日に七、十時間、筆をとる。広島で被爆した後遺症はいまものこり、つねに「完成できずに倒れる不安」と向き合う日々だ。「毎朝、仕事の進み具合を、原爆で死んだ人達に報告しながらやっています」。たばこも酒も断った。二〇〇〇年には七十

歳。この年の十二月三十一日に完成させるつもりだ。自身の仕事と、玄奘が旅をし、経典の翻訳に費やした時間の長さも、年齢も、ほぼ重なる。「今世紀最後の日の夜十一時五十九分五十九秒に最後の筆を入れ、新世紀を告げる鐘と同時に公開できればと思います」。》  
「完成できずに倒れる不安と向き合う日々」とは実に重いことばですね。

#### 参考図書

服部洋子著『親と子―アメリカ・ソ連・日本―』（新潮選書）

アンドレ・ジオルダン著 遠藤ゆかり訳『私のからだは世界一すばらしい』（東京書籍）

## スクール・ギャップ

高校に入学し、新たな生活をスタートしてから、もう七ヶ月が過ぎようとしています。この七ヶ月間を、一言で言うところ「スクール・ギャップ」。そのことについて、話します。

私は、長崎県西海市の西側に浮かぶ、「江島」という小さな島の出身です。島の大きさは周囲四キロメートルで、約百八十人あまりの島民が暮らしています。島民の平均年齢は、なんと七十歳を超えています。子供の数は少なく、私が入学したときは全校生徒十一人だった中学校の生徒数も、卒業するときにはわずか二人になっていました。二人で何をするのかと思われるかもしれませんが。しかし二人だからこそ濃厚な学校生活を送れたとも言えます。なぜなら島の多くの方々が私たちの学校生活を支えてくれたからです。島の方々は毎日明るく声をかけてくれ、私の話相手にもなってくれました。そんな島の方々は、僕にとって友達のような存在だったのです。学校の文化祭や運動会は、島の方々もいっしょです。還暦をとくに過ぎている、おじいさん、おばあさんたちが、走ったり、踊ったり、歌ったりしていました。もちろん、僕たち生徒も頑張りました。二人で準備をし、話し合い、行事を作り上げていったのです。二人で劇、二人で演奏、二人で一輪車、二人で短距離走、とても難しかったです。しかし僕たちには島の方々がついてくれている、だからこそ自信を持って色々なことに取り組んでいこう、そういっ

た気持ちで生活していました。

私にとって江島で生活した十五年間は島の方々の温かい愛によって育てられた貴重な期間です。

やがて中学校を卒業し、フェリー乗り場から、島民全員に見送られ、私を育ててくれた温かい島をあとにしました。そのときの名残惜しさ、寂しさそして新たな環境に対する期待感は今でも鮮明に覚えています。そして高校での生活。まず、びっくりしたのは、生徒の多さです。わずか二人の教室で学習していた私の目の前に、三十七人も生徒のごった返した教室があるのです。そんな教室は最初は窮屈でたまりませんでした。一学年二百七十九名、全校生は八百二十六名、ただただ驚くばかりでした。

私の成績は中学校時代一番でした。一番と言っても二人中の一番です。しかし江島一の神童と自負していました。そんな私の鼻はあっさりと折られてしまいました。井戸の中の蛙がはじめて大海を見た状況です。四月当初の校内実力試験、百二十番、シヨックでした。打ち砕かれました。また運動をしてもそうでした。中学校時代は一番だった私の足の速さが、体育の授業を通してたいしたことないと思明したのです。今まで一対一の関係だった人間関係が、一気に一対二百七十八となったのです。そして自分は人より優れていると思っていた自分が実はたいしたことがないと思わされたのです。そのギャップとシヨックとが私の高校生活を不安で無気

力なものにしてしまいました。相対的な自己評価というものは実に残酷で島で抱いていた自身自身の価値観を一変させてしまいました。

そんな高校生活の中、担任の先生にこう切り出されました。「下宿生はきちんと管理してもらえない部に入らないと生活が乱れてしまい、故郷の両親を泣かせてしまうかもしれないぞ。俺が面倒を見てやる。ソフトでいい仲間を作ってみないか」と。私は先生の熱さにひかれ、ソフトボール部に入部することにしました。ソフトボール部は平成十五年度のインターハイ優勝チームであり、とても厳しい練習で有名です。夏の練習は暑く苦しく、皆、吐くほどです。遠征・合宿が多く、技術面から生活面、学習面まで厳しく指導されます。この厳しい部で私を支えてくれたのが一緒に入部した一年生です。ユーモアがあり、共に励まし合いながら頑張ることのできるかけがえのないチームメイトたちです。顧問の先生も下宿生の私を厳しくも熱く支えてくださいました。そんな厳しい環境で生活をしている内に、「自分自身が全体の中でどれほど優れているか」ということよりも、「ちっぽけな自分が全体の中で何をなせるか」そういう発想が生まれてきたのです。

私はソフトボール部に入って本当によかったと思っています。みんなに支えられ、そして自分も為すべきことをなし、何かを成し遂げることのすばらしさ。その実感は他の活動でも私を

積極的にしました。体育大会の二百メートル競技で私は九人中五番でしたが、それよりも招集係としてみんなががんばり、大会を成功させたことに心から喜びを感じました。自分一人では決してできない大きなことをみんなで協力して達成することのうれしさ。それは、島での生活にも通じるものでした。

前にも述べたとおり十五年間私は、島の方々に支えられて生きていました。同じように今私は、ソフトボール部の仲間、学級の仲間、そして先生方に支えられて生きています。私と直接関係する人の数は増えましたが、その向かうところは、個人ではどうてもできない高いレベルの仕事を全員で成し遂げることという点で一致していたのです。私を感じたスクールギャップの真裏には、どの場所でも、いつの時代でも変わらない「支え合い」という普遍的な真理が存在していたのです。今、私の胸の中ではある夢が膨らんでいます。「ソフトボール部全員で力を合わせ、全国大会の舞台を踏んでみたい。そして全国の頂点に立ってみたい。」

平成二十年度『全国総文祭弁論部門』より

## 伝えたい「ありがとう」

「ありがとう」この言葉を伝えたい人がいます。それは、私を可愛がってくれた祖母です。祖母がいてくれたおかげで私は今、介護士を目指しているのです。

私の家は両親とも働いており、私の世話をしてくれるのは祖母の役割でした。躰に厳しく、それでいて、優しく温かく、わがままだった私を広い心で受け止めてくれる唯一の存在でした。しかし、私が小学校に入学したぐらいから入院を繰り返していた祖母は、私が小学三年生の時に亡くなりました。最初は祖母が亡くなった事実をきちんと把握することができませんでしたが、今まで感じたことのないような重い空気が周囲を包むと、幼い私でさえ、辛い現実を理解せざるをえませんでした。初めて直面する「人の死」。大切な人がいなくなることがどれほど悲しいものなのかわかった瞬間でした。

小さい頃からヘルパーとして働く母の姿を見ていたので、将来は介護の仕事に就きたいと思っていました。しかし、介護と人の死がどうしても切り離せないように思え、迷いを感じるよ

うになりました。「もう辛い思いはしたくない!」。祖母の死後、介護の仕事への思いは薄れていきました。

しかし、母のある言葉をきっかけに、私の中に残っていた介護に対する思いが、再び私を介護の夢へと導いたのです。私が母に「仲良くなった人が亡くなったら、悲しくないの? どうしてこの仕事が嫌にならないの?」と聞くと、母は「自分が納得できる、精一杯のことができたんだったら嫌だとは思わない。自分も、お年寄りの方も、楽しく過ごせたら、それだけでいいと思うよ」そう言ったのです。私はその言葉を聞き、重かった気持ちが一気になくなったような気がしました。それと同時に、母に対する尊敬の気持ちが生まれました。それからの私は、学校や地域で主催されているボランティア活動に積極的に参加するようになりました。介護施設の体験学習や職場体験、夏に行われる野外レクリエーションの補助など、どの体験でも、皆さん楽しんでくれました。どんな些細なことにでも反応を返してくれ、笑顔で私に話しかけてくれました。その笑顔を見るたびに「また頑張ろう」という気持ちが、ふつつつと湧いてきました。

私は昨年、一年間の講義と実習を終え、ホームヘルパー二級の資格を取得することができま

した。そして三年生になった現在は、地域の施設で週四時間、実習を行っています。実習先では、祖母にしてあげたかったことを、利用者の方にできるよう、一つ一つの行動に気持ちを込め、誠意をもって取り組んでいます。その思いが伝わるのか、多くの方が温かい感謝の言葉を私にかけてくれます。実習を終え、利用者の方から「ありがとう」という言葉を頂いた時、嬉しくて、自然に笑顔が溢れ、私の頭の中には祖母の顔が浮かびました。

実習へ行くと、テキストでは学ぶことの出来ない実際の現場での介護を学ぶことが出来て本当に良かったと思います。

介護をするには、学ばなければならないことがたくさんあります。嫌なことも、時には、投げ出したくなるほど、苦しいこともあるかもしれませんが。しかし、もし介護士になる夢を捨てていたら、私は、人に感謝される喜びも、人に尽くしたいという優しさも持てなかったはずです。私は今、「おばあちゃん、私の手で介護することは出来なかったけど、おばあちゃんにしてあげたかった事を、これからたくさんの方にしてあげたいです。見ていてください」と、伝えたいのです。

将来私は、故郷の平戸市大島村で、介護の仕事に就きたいと思っています。大島村は長崎県の北松地区で一番高齢者率が高く、これからもその傾向が続くと考えられるので、介護士の需要も増えてくるはずです。それに小さい頃からお世話になった方々を介護できるのは、なにか恩返しできるような気がして私自身が嬉しいのです。色んな出会いがあって、色んな別れがあって、介護士として、人として、様々な成長のできる介護の仕事を、私自身のためだけではなく、介護士という夢へ導いてくれた祖母や母のためにも成し遂げたいのです。そして、仕事だからという気持ちで人と接するのではなく、目の前にいる全ての高齢者に対して、素直な気持ちで接することのできる人になりたいです。

私は、この高校で、少しずつ夢の実現へ向けて前進しています。悲しみも、苦しみも、喜びも、楽しみも、全てが私の誇りと言えるような立派な介護士を目指して、これからも頑張りたいと思います。

平成十八年度『日本学校農業クラブ連盟全国大会』入賞作品

## 独創的な写真を求めて

栗林 慧



最近、わたしは写真家として主な被写体を最初から昆虫に定めてやってきたことがほんとうに幸運だったとつくづく思っている。

他のいかなる分野の写真を目指したとしても、よろこびや感動といったものをこれほど長時間持続させることは、どうてもいできなかったにちがいないからである。カメラで昆虫を追うようになってからの、この三十五年間というもの常にワクワク・ドキドキの連続であったといっても、けっして誇張ではない。まさしく、その通りだったのである。

その間に、まだだれもなし得なかった撮影技術を開発し、だれも発表したことのない表現をものにしてきたが、それが可能だったのは、昆虫という小さな生き物を相手にして、その生態をいかに正確に、いかに新

しい映像として表現するかを常に全身全霊で考え続けてきたからである。

一般に写真家は、作画するための道具としてカメラからレンズ、さらにはフィルムにいたるまで、メーカーが作り出す製品に頼っているのが普通である。しかし、そういうことでは個人の感性による多少の表現の差こそあれ、創作の名に値する作品を産み出すのはむずかしいのではないだろうか。写真の草創期ならいざ知らず、現代においては、考えられる撮影テクニックのほとんどは過去のものに過ぎない。言い換えれば、前人が作り出したテクニックに則って作画しているに過ぎないのではないだろうか。

わたしに言わせれば安易ともいえるそのような姿勢を拒み、「絶対にまだ可能性があるはずだ！」と常に望みを託して挑戦し続けてきたのがわたしの生きざまだといってよい。

昆虫が見ている世界を、昆虫の目になってそのまま表現することができたらどんなに楽しくすばらしいことだろう——こんな夢を長いあいだ見続けてきた。(中略)

マクロの世界を撮影してこのような表現を可能にした写真家は、長い写真の歴史においてこれまでひとりもいなかったと思う。写真家ならだれでも望むはずのこのような表現がこれまでに得られなかった原因は、先にも述べたように、それを可能にするための道具であるカメラや

レンズがこれまで存在しなかったからである。

話はやや横道にそれるが、二十年ほど前にビデオカメラが普及しはじめたとき、わたしは早々とこの魅力あふれる新機材を手にとった。もともと新しいものに対して強い好奇心を抱く性格であることに加えて、動画に対しては以前から強い興味を持っており、ビデオの持つ将来性をそこに感じたからである。

ビデオ画像がどんどん進化していけば、やがては一秒間に三十フレーム撮影される画面のひとつを抜き出して一枚の写真として使えるようになるだろう。モータードライブを用いて動きの速い昆虫を撮影していたそれまでの経験からいって、これは昆虫の生態を記録する方法としてきわめて有効な手段になるだろうと確信を持って予測できたのである。その夢は、ハイビジョンカメラが扱えるようになった今、八十パーセントは実現したといえる。

さて、話を元にもどすと、じつはこのビデオカメラこそがわたしのスチールカメラの夢を実現するうえで大きく貢献することになったのである。ビデオの世界にはスチール写真の世界にはない特殊なレンズが数多く存在する。わたしはこれらのレンズ群と、以前に試みたことのある医学用内視鏡とを組み合わせて、新しいカメラを制作した。自ら「超被写界深度接写カメラ」

(略して超深度接写カメラ)あるいは「虫の目カメラ」と名付けたこのカメラは、目の前の小さな昆虫を接写しながらその奥にひろがる広大な風景にもピントが合っているという、これまでの写真の常識ではおよそ考えられない映像をもたらしてくれたのである。(中略)ここに到達するまでに、構想以来二十年の歳月が流れていた。

長い歴史の中で、度重なる技術改良を加えられ、科学技術の粋を集めて作られた世界中の無数の市販レンズ。そのどこにも存在しないレンズを、自分の手で完成させた感激はひとしおである。しかし、それよりも、このレンズを通して得られた作品が多くの人に驚きと感動を与えていることを思うとき、わたしの体の中をたどえようのない痛快感が駆け抜けていく。

三十五年にわたる写真人生の中でこのような感覚に浸ったのは、はつきり意識しているもので他に三度ある。最初は、改造ストロボを用いてアリの主とする微小昆虫の生態撮影技術を確立したとき。二度めは、光センサーを日本で初めて撮影に取り入れた昆虫の飛翔の撮影。そして三度めは、医学用内視鏡を応用したレンズを製作して、狭い空間内で行動するハチなどの撮影に成功したときである。

わたしの作品の多くは、こういった撮影技術を他に先がけて確立しながら撮影してきたものであり、見る人には単なる昆虫写真とは異なるものとして感じ取っていただいて思う。

こういうことができたのも、冒頭に述べたように、被写体として昆虫を取り上げたことが大きい。

むずかしいからこそ挑戦のしがある。挑戦することによって可能性が開けてくる。

——言うまでもなく、これはわたしがいつもモットーとして心掛けていることである。そして、これらの撮影が実際に可能になったのは、当初の夢をあきらめずずっと持続してきたからだと思う。

このように書いてくると、わたしの仕事の成果は、たいへんな忍耐と血のにじむような努力の結果と思われるかも知れないが、じつをいうとそんな大袈裟な苦勞をしたという感覚はみじんもない。初期のころにはたしかにそのような心構えで取り組んだ記憶も無くはないが、いつもかたくなにただただ脇目もふらず物事に取り組んでいたら、多分このような作品を産み出すことはできなかったにちがいない。

カメラやレンズといった機材を作るだけならともかく、さらにそこから作品を産み出すには、柔軟な精神がなければならぬ。遊び心を持ち、いつもワクワクするような期待感に胸を躍らせて自然を楽しむ気持ちを持っていなければ、人に感銘を与えるような作品はとうてい作り出せないだろう。

昆虫を相手にして幸運だったことがもうひとつある。時間的なゆとりが生まれたことだ。ご存知の通り、昆虫はほかの動物とちがって一年中活動しているわけではない。わたしが住むここ長崎でも。十一月から三月にかけては活動する昆虫が少なくなり、当然、暇ができる。そこでわたしは、余った時間をそれまでであったためていたアイデアを具体化するための研究に充てることができるのである。

たとえば、日常の撮影中に、ふと、こんな装置があったら撮影が楽になるのではないかとか、こんなレンズがあったらもっとちがった表現が可能になるにちがいないなどと思うことがある。そういうアイデアをあたためておき、シーズンオフに試作してみるのである。

中央から遠く離れた田舎に移転したのも、今にして思えば正解であった。少年期の途中に東京に移住して以来、写真家としての活動を始めてからの数年間まで都会暮らしを続けたが、なんといつても身近に自然が少ないのはネックだった。また、仕事が増えるのはありがたいが、打ち合わせなど撮影以外の時間が多くなるのも都会ゆえのせいたくな悩みであり、痛しかゆしの状態だった。思い悩んだ末、意を決して、子どものころ馴染んだ故郷の豊かな自然の中に身を置くことにした。

長崎県北松浦半島の突端といえは、今でもかなり不便な土地であるが、故郷にもどりたい一心で、今から二十四年前に移住を決定した。「はたしてそんな辺境に移り住んでプロの写真家として活動することができるだろうか？」という一抹の不安がなかったわけではないが、ある程度の自信もあった。というのは、そのころすでに、独自の撮影技術、とりわけ光センサーを取り入れた撮影装置によって昆虫の一瞬の行動をとらえ、それまでにはまったく見られなかった作品を発表しはじめていたからである。こういう独自の技術を持っていれば、日本のどこに住もうと、中央から見捨てられることはないだろうという思いがあった。また、日ごろの仕事ぶりを見てくれている妻をはじめとする家族の後押しがあったのも大きかった。

故郷での生活は予想以上にすばらしかった。一歩家を出れば目の前に目指す被写体がいくらかでもあり、思う存分撮影に専念することができた。編集者は必要とする写真を求めて遠路をいわず訪ねて来てくれた。そして、自分にとって何物にも増して重要な、数々のアイデアを熟成させる時間的余裕を持つことができたのである。

わたしの写真活動三十五年間の歴史を振り返り、思うところを手短に綴ってみたが、最後に、これから写真家をめざそうとする若い人たちに次のメッセージを贈りたいと思う。

自然を相手に作画する写真家という職業は、それで生活が成り立つことを前提にして言えば、

文句なしにすばらしい。昆虫写真という限られた分野だけをとってみても、この職業にあこがれる若い人たちは少なくない。今後もそういう人たちが輩出してさらなる発展をめざし、夢と希望を持って挑戦し続けてほしいと思う。

そのときに心してもらいたいのは、作品を作るうえで、自分だけのオリジナルといえる技術や作風をひとつだけでも確実に持っていたいただきたいということである。これこそがプロの写真家たる者の最低限の条件であると思うからである。

情けないことに、写真に限らず、昔から日本には人まねに過ぎないものを容認してはばかりない土壌があるように思えてならない。そのような寛大さ（？）は国際的に通用しないばかりでなく、その作者の進歩をさまたげる要素になっていくことに気がつかなければならぬ。後に続く若い人には、自分を信じて大きくはばたいてもらいたいと思う。

栗林慧『栗林慧全仕事 独創的カメラでとらえた驚異の世界』（学習研究社）より

## 地震、雷、火事、親爺

遠藤 周作

むかしの若い者にとってコワイものが幾つかあった。地震や雷や火事はとも角として親爺さまというのは大変、コワイ存在であった。

コワイものはいたるところにあった。むかしの若い者はこうしたコワイものを持つことによって何よりも屈辱感に耐えるということを学んだ。

むかしは男が「大人になる」条件として、この屈辱感に耐えることを一つの条件とした。仕事を憶える時に先輩や兄弟子の拳固けんこも我慢しなければならなかったし、走り使いもやらされた。入営をすれば古参兵の身のまわりの世話もさせられた。そういうコワイ存在が大人になる階段の前において、そのコワイ存在から屈辱を味わわされ、それを我慢して、やっと一人前の大人とみとめられたのである。

こういう大人になるためのやり方については今の若い人は色々、批判もあるだろうし、反論もあるだろう。

だが今の若い世代にもっとも欠けているものは「屈辱感に耐える」訓練である。この訓練が行われないで、そのまま社会から大人あつかいにされると、おのれのすること、なすことはす

べて正しいと思うようになる。

先日、タクシーで代々木近くを走っていたら、オートバイに友人をのせた若者が車と車との間をアクロバットのようにぬいながら走っていった。

交差点で私のタクシーを運転していた中年の運転手さんが、

「危ないじゃないか」

と注意すると、

「こっちが楽しんでいることに口を出すな」

とその学生風の二人の青年が怒った。その態度にはおのれのすること、なすこと、すべて正しいという気持があらわれていて、「ああ、こいつらまだ大人でないな」と私は思ったのである。

本当の大人というのは、自分のすること、なすこと、必ずしも正しくないということを身にしみて知っている存在である。そして大人でない者はその反対なのである。大人と大人でない者との違いにこれほど明瞭な定義はない。赤ん坊をみたまえ。赤ん坊ほど自己主張をして聞きわけのないものはないからだ。

今の若い世代には「地震 雷」ではなく反対に「自信か、身なりか」が多い。たしかにそれはそれで悪くない部分もある。しかし彼等とつきあっていると何よりも感じるのは何かに耐える力が少ないことだ。とりわけ屈辱感に耐える力が無い。コワイものが彼等にはなかったからだ。だから、畏れるということを彼等は知らない。

注意してほしい。私は畏れると書いて恐れるとは書かなかった。畏れると恐れるとのちがいを若い人は知っていない。

〈編集部注〉恐れるとは権力などにビクビクすること、畏れるとは人間をこえた天とか神とか道とかに畏敬の念を持つことです。

遠藤周作『勇氣ある言葉』（集英社）より



遠藤周作文学館が立地する長崎市外海地区は、かくれキリシタンの里としても知られており、遠藤文学の原点と目される小説『沈黙』の舞台となった場所でもあります。

この縁により、遠藤周作の没後、手元に残された約三万点にも及ぶ遺品・生原稿・蔵書等がご遺族から寄贈・寄託され、平成十二年五月に開館されました。

日本を代表する文学者遠藤周作とその文学の世界を堪能し、理解・研究する場として、また、角力灘（すもうなだ）を見下ろす絶好のロケーションを楽しむことのできる施設です。

## 右手一本、竹刀にかけた青春

可能性信じ 努力に努力

三段の昇段試験にも合格

昨年六月の県高総体剣道団体戦。

右手一本で竹刀を振るいながら、全力で試合に臨む剣士がいた。佐世保工の池田泰輔（三年）、十八歳。身体的なハンディを抱えながらも、自らの可能性を信じて努力を重ねてきた高校三年間。試合後、高木志伸監督が声を掛けてくれた。「片手でよくこ

こまで頑張ったな」。結果は予選リーグで敗れたが、少年の胸は充実感でいっぱいだった。



提供：長崎新聞社

「分娩まひ」。出産時、医師が左手を無理に引っ張ったことが原因とみられており、左手の握力がゼロに近い状態で生まれたという。

母、知子さんはショックを必死で抑え、それを受け止めた。決して甘やかさず、衣服の着脱など何でも一人でやらせた。結果、幼いころから人の痛みを分かってしまうようになった。苦しさを表に出そうとしなかった。「周りに迷惑をかけたくないと思っていたんでしょね」。知子さんは当時は振り返る。

忘れられない出来事がある。幼稚園の時、お遊戯会の練習から沈んだ顔で帰ってきた。「僕の体、思い通りにならない」。あの時の表情は今でも忘れることができない。思い出すと涙があふれる。幼いながらも気丈に振る舞ってきた息子。どれほど多くの我慢をのみ込んでいるのか。心が痛んだ。「でも、本人が乗り越えるしかないんだ」。接し方は厳しかったが、息子を信じた。成長を願った。

## 出会い

剣道を始めたのは小学五年生の終わりごろ。家族で見っていたテレビ番組に片手がない力士が

登場した。「泰輔も何かスポーツをしてみれば」。知子さんの勧めがきっかけだった。「剣道なら片手でも努力次第で上達できるかもしれない」。近隣の道場を探し、相浦武道会の門をたたいた。

最初は一般的な中段の構えから始めた。左手は添えるだけ。技を放つとどうしても竹刀から左手が外れる。体のバランスが取れず姿勢が崩れることもあった。「心・技・体」が一つになつて初めて一本が認められる剣道。技は決まっているはずなのに、なかなか、一本にならない。右手だけでの攻防も苦勞した。悔しかった。帰宅後の素振り、筋力トレーニングが日課になった。

「もうやめようか」。そう考えたこともあったが、高校二年の夏、大きな転機が訪れた。高木監督の勧めで挑戦した右手一本の上段の構え。「自分のものにすればおまえの武器になるぞ」。高木監督はあるDVDも見せてくれた。上段の構えの隻腕剣士の実話だった。体育教師を目指して勉強を続け、全日本学生選手権の地区予選を戦う大学生。「自分もこうなりたい」。これまでの何倍も努力を重ねた。秋の新人大会。ついにレギュラーの座を勝ち取った。

努力したのは剣道だけではない。両手でも大変な細かい作業をこなし、第二種電気工事士の資格を取得。三年の秋には就職も決まった。剣道で身につけた礼儀作法と集中力。この二つを

生かして仕事に励みたいと思う。

## 仲間

「障害はそんなに苦ではない」。今、心からそう思えるようになった。それを教えてくれたのは仲間たちの存在。この三年間、両手が必要な作業を、普段通りの表情でやってくれた友人たち。申し訳なかったが、うれしかった。頼もしかった。「おかげで周りの生徒たちにも思いやりが出てきた」（高木監督）

高木監督からいつか言われた言葉がある。「見ている人に勇気を与えるような存在になってみらんか」。剣道を頑張ることで、そうなれたとまでは思っていない。けれども、自分が目指すべき道は見えてきた。将来の自分を思い描き、少年はこの春、新しい門出を迎える。

平成二十年一月九日『長崎新聞』より



## 高校生代表 歓迎のことは

「長崎が君の鼓動で熱くなる」

「二〇〇三年 長崎ゆめ総体」に、ようこそおいでくださいました。

みなさんは、厳しい練習に耐え、激戦を勝ち抜き、この長崎ゆめ総体に参加されています。その喜びあふれる鼓動が伝わってきます。

私たち長崎県の高校生は、「一人一役」を合い言葉に、全国から訪れるみなさんを最高のおもてなしで歓迎しようと準備してきました。今日は、みなさんの高鳴る鼓動が聞こえるよう、一段と熱いものを感じます。

私たちが明日からの競技を通して、さらにたくさんさんの感動を共にしたいと願っています。

ここ長崎県は、海と山に囲まれた自然豊かな土地ですが、十三年前には、雲仙・普賢岳が噴火し、大変な被害を受けました。しかし、全国のみなさんからの温かいご支援で、力強く復興することができました。ありがとうございます。

また、長崎は被爆地として、世界に平和の尊さを訴えています。この長崎ゆめ総体が、スポーツを通して、友情の輪を広げ、平和の意義を感じていただける大会になれば幸いです。

選手のみなさんのご健闘を祈り、歓迎の言葉といたします。

## ゆめ総体を終えて

### 感動をありがとう

私はまず、五十年に一度というまたとない機会の長崎ゆめ総体に、「一人一役」という形で関わる事ができた事を大変嬉しく、また誇りに思っています。

この「一人一役」という仕事を通して、私は大きな一つの事を皆で成し遂げる喜び・お互いに協力し合う事の大切さを学ぶ事ができました。これは私だけに限らず、長崎県の高校生全員が感じた事だと思えます。協力することで、高校生の友情はとても大きなものとなり、さらにはそれを全国にまで広げました。これは本当に素晴らしい事だと思えます。

あの真夏の太陽の下、どんな時にも笑顔を決やさずに応対する高校生の姿は、選手たちの素晴らしいプレーと同じく、見る人に感動を与えることができました。この大会が大成したのも、高校生全員の地味だけれども必要不可欠な仕事をする人がいたからだと思えます。参加しているみんなのあの笑顔の美しさは今でも心の中に残っています。

私たちのためにご指導してくださいました先生方をはじめ、多くの方々の応援の声や協力と、私たちには一回限りの貴重な体験をさせていただいたことに、心から感謝しています。

でっかい「ゆめ」をもとう

自分だけの「ゆめ」を

自分を信じて

輝く明日を思い描こう

でっかい「ゆめ」をもとう

みんなでかなえる「ゆめ」を

手を取り合って

みんなの思いをひとつにしよう



## 志 (じいじろびつ)

一昨年の暮れ、夕食時に妻から、「お父さん高校はまだ行かんでよかと？私も協力するけん、頑張ってみらんね。私に、いつも言いよるたい。もし、相撲取りにならんやったら、高校に行つて、どがんやったやろうって。高校に行つてみらんね。今からでも大丈夫たい。」という妻の言葉に目が覚める思いがし、私を高校に通わせる動機となりました。

今から二十五年前、中学三年生だった私は進路のことで悩んでいました。幼い頃からの夢であった、力士になることを諦めきれず、高校進学を拒みつつけました。周囲は猛反対でしたが、唯一父親だけが、理解を示してくれました。相撲取りは父親の夢でもありました。小さい頃より、為し得なかった父の夢を聞かされたことが、いつしか私の夢に変わっていききました。中学卒業後、夢が叶い十四歳で入門、上下関係や礼儀作法の厳しさ、荒稽古や寒稽古にも耐え、いつも前向きに考えて意気軒昂として、頑張ってきました。しかし、怪我には勝てず、六年という短い力士生活となってしまいました。

引退後、職を探しましたが、なかなか見つかりませんでした。現実には厳しく、中卒という壁にぶつかったのです。日に日に不安は募る一方でした。この時、高校へ行くことを考えましたが、私の夢を応援してくれた両親に、これ以上、苦勞をかけることはできず、「高校へ行きたい」と言えませんでした。そんな時、知人に手に職をつけることを勧められ、看護師の道を選びました。二年後、准看護師の免許を取得しましたが、次のステップへ進むためには、どうしても高校進学を諦めきれずにいました。この頃、妻と出会い結婚、子供にも恵まれ仕事に明け暮れる毎日で、高校へのチャレンジは断念していました。そのようなとき、妻の言葉に励まされた私は、再び頑張ってみよう、という気持ちになり、家族・同僚・仲間理解と協力を得て、新たな志で通信制へ入学しました。

高校へ入学したものの、学業のブランクが長く、仕事・家庭・学校のバランスがうまく保てず、ストレスを募らせ、絶望のどん底の生活からはい上がることができませんでした。しかし、私を立ち直らせる二つの大きな出来事が起こりました。

一つ目は子供達の存在でした。中学生と小学生の父親である私は、子供達と触れ合うために、

遊びに連れて行くことばかりを考えていました。学業と仕事の両面で自由な休みがなかなか取れず、家族揃っての休みとなれば、ほとんど皆無に近い状態で、父親としての役目は全く果たせていませんでした。ある日、仕事から帰り一息ついて、家庭学習をしている時に、娘が「お父さん、一緒に勉強しよう。」と、声をかけてきました。こんな言葉が子供から出てくるとは予想もしていなかっただけに、子供の成長を肌で感じた瞬間でもありました。勉強を通じて立派に子供達ともコミュニケーションがはかれることを知りました。今では私の方からも子供達に声をかけるようになりました。父親として、そして高校生として見てくれていた子供達に感謝しています。

二つ目は、この中央高校の同級生達の存在です。私の好きな言葉に自他共栄という言葉があります。「自分と他人がお互いに、理解し合えてこそ栄えていく」という意味です。同級生達とどう溶け込んでいくか、不安でもあり楽しみでもありましたが、お互いが向き合っていく中で、試験を前にして、元氣のない私を見て、ある年輩の同級生から「男なら最後までやり通して、一緒に卒業しよう。」と言葉をかけられました。何気ない言葉かもしれませんが、私にとって、ものすごく気が引き締まる思いがしました。それとともに、自分は人に支えられてこ

ここまで来たのだと、改めて思いました。

この二つの出来事は、中央高校に入学してからの、私の財産となりました。夢を追いかけて折し、二十五年間が過ぎ、今、高校へ通っている私は、良き仲間や熱心に指導してくださっている先生方と共に、最高の人生を送っていると云っても過言ではありません。ただし現在は、私にとっての通過点にしかすぎないので、目標である卒業に向かって、日々努力精進していきたいと思っています。

最後に高校卒業後は、正看護師取得を目指していきます。一度きりの人生、悔いを残さないよう、これからも、夢と希望を胸に抱き邁進していこうと思います。

平成十七年度『誇りある青春（定時制・通信制高校生の生活体験発表の記録）』より

## 一世紀を生きて



東京の井の頭公園のそばに住んでいたころはよく、彫刻園をたずねて北村西望さんの作品をながめた。『將軍の孫』という彫刻がある。幼い子が、だぶだぶの軍人の長靴をはいて相手の礼のような格好をしている。そのあどけない顔と相対しているだけで落ち着いた気分になる。しばらくたつとこの「孫」の顔がみたくなっていてかけたものだ。

ことし百歳を迎える西望さんは「たゆまざる歩みおそろしかたつむり、という言葉が大好きだ」と書いている。かたつむりの歩みに自分の足跡を重ねあわせているのだろう。

長寿のお祝いのために訪問した鈴木都知事に「一世紀を生きて何が一番うれしかったですか」とたずねられ、翁は答えている。「文展ではじめて二等に入賞したことです」。

これにはわけがある。若いころの仲間に、朝倉文夫や建畠大夢がいた。二人とも天才的な彫刻家で、はやくから文展に入賞していた。西望は来る年も来る年も入賞できない。落選するこ

とさえあった。夜も眠れず、ふとんをかぶって泣いた。ノミを捨てて郷里へ帰ろうかとさえ思った。

だが「絶望の淵からは上がる思い」で出品した作品が二等賞になった。翁はその時「自分は天才ではないのだから、人が五年でやる事を、十年かけてでもやらねば、と心中深く思った」そうだ。

いまも肌につやがある。生野菜をよく食べ、毎日少量の酢を飲む。あせらず、こだわらず、くよくよせず、争いやけんかなんか、こっちから先に負けてきれいに忘れ、冬もあり春もありて人生また楽しいの心で暮らす、これが長生きのこつらしい。

長崎の『平和祈念像』は七十二歳の時に完成した渾身の作だ。「馬齢を重ねながら少しも上手になつたような気がしない。やはり心がけがでなければだめらしい。まだ三十年や四十年はがんばらなければ」。七年前の言葉だが、恐れ入りました、と頭を下げるほかはない。

## 十八歳のあなたへ

私は今、十八歳です。そして、私は今、まだ見ぬ我が子へ贈ることばを書いています。私も、あと数年で結婚し、子供をもうけることでしょう。その子が今の私と同じ十八歳になった時のあなたへ、今の私を残したいと思います。

今の私の生活と、あなたの生活では、多少、いえ、随分変わっていることもあるでしょう。あなたの時代には、あなたの今通っている高等学校も義務教育に変わっているかもしれませんね。しかし、私の時は、受験戦争というものがあって、行きたいと思う学校があって、私も私なりに努力して、自分の希望する学校に入学することができました。

受験戦争も乗り越え、二年半ほどたった今、私、とても苦しいのです。一番大事な時期にさしかかっています。将来を決めなくてはならないのです。十八歳になっても、中身も外見もまだまだ子供なのに、自分の人生決めるなんてとても難しいのです。女だから、ちょっとした仕事について、幸せな結婚をすればいいのだけれど、今の私はそれじゃ物足りないんです。もっと自分の力を試してみたい、自分の可能性にかけてみたいんです。だから、進学しようかと思っています。でも、就職しようかとも考えています。今、とても苦しんでいます。難しいです。弱気になって、自分のことも自分で決められないでしょうもないのです。あなたには、こんな人間には、なってほしくないです。あなたには、いつでも強い人であってください。自分

の信念を貫き通し、いつでも自分を失わず、優しくあってください。今、あなたが挑戦したいと思うことがあるのなら、怖がらずどんどん突き進みなさい。

あなたの一番大切なものって何ですか。今の私にとって大切なものってたくさんあるけれど、家族を大切に思うのはだれもがそうです。自分に素直になること、人を愛するってこと大切なことだと思いませんか？この二つがそろっていて、家族を大切にできると思います。それに、あなただってもう恋をしてる人ぐらいいると思います。そういう時、素直になるってとても大事だと思えます。後になって、後悔しないように何事にも勇気を出してぶつかっていく精神で頑張りなさい。

私は今、こうやってあなたに語りかけているのだけど、とても不思議な気持ちです。だって私はまだ高校生で、いつ、母親になるかも分からないし、もしかすると、一生、母親にはならないのかもしれませんが。それに、あなたのことだって、もちろんのことだけど、まだ、何も分かりません。あなたが男の子か、女の子であることさえも分かりません。不思議ですね。こうやって、存在しない人に語りかけるのって、不思議だけど、私は、多くの夢と希望をもってあなたに語りかけているので、とても楽しいんです。実際、あなたに会えたら、もっともっと楽しい日々を送れることだろうと思います。十八歳のあなたに会えるのは、果たして、何年後になるのでしょうか……。

昭和六十二年度作文コンクール（長崎県教育委員会）入選作品

## たったひとつの歌でさえ

市川 森一

「おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし」

「平家物語」が諭（さと）している通り、

人生には、勝者も敗者もありません。ただ一度の人生にとって大事なものは、思い出。振り返ってみて、「いい人と出会ったなア」とか、「いいものを見たなア」とか、「少しは、他者のためにいいことをしたなア」とか、それは自分だけの、だれにも知られない思い出をどれだけ持っているかということが、つまりは、「いい人生だったなア」と思えることのように思えます。

みなさんは、たとえばお風呂の中などで、無意識になにか歌を口ずさんでいるようなことがありますか？私は、むかしから「里ごころ」という童謡を口ずさむことがあるのですが、その歌を口ずさむと不思議に心が安らいできて、自分の全人生が素晴らしいものに思えてくるのです。

たったひとつの歌でさえ、人生を素晴らしいものにしてくれる。今回は、そんな思い出の歌にまつわる、一人の恩師のお話をさせていただきます。

それは、私がNHKの大河ドラマ「花の乱」の脚本を書いていた頃のことです。野口モモヨ先生という小学校時代の担任だった先生から、突然、一通のお手紙をいただきました。その頃、私はどうに五十歳を過ぎた壮年でしたから、モモヨ先生も八十歳に近いご高齢だったはずですが、しかし、万年筆の筆跡は実に若々しく、文体もしっかりしたものでした。

内容は、私の「花の乱」を毎週楽しみに観ているという励ましに続いて、五十年ほど前の、モモヨ先生が拙宅を家庭訪問してくださった頃の話がつづられておりました。

モモヨ先生の文章を追いながら、私の脳裡には、師範学校を出て市立諫早小学校に赴任したばかりの初々しい新米先生のお姿がよみがえっていました。余談ですが、のちに映画「二十四の瞳」を観たとき、高峰秀子演じる大石先生の佇（たたず）まいが、モモヨ先生に似ているなァと思ったことがありましたが、いま思うと、昭和二十年代の小学校の女先生方は、どなたも凜（りん）と背筋を伸ばして誇り高く、みなさんが共通の使命感と慈愛に充ちた雰囲気を持つ

ていらしたようでした。

私の実家は、諫早市の栄町という商店街の一隅で戦後はカメラ店などを営んでいたのですが、私の母は、戦時中から結核を患い、二階の奥の洋間のベッドで自宅療養をしておりました。当時の結核はまだ不治の病として世間から疎まれ、七歳の私や三つ下の妹は、母の傍に近寄ることも禁じられていました。幼い兄妹にとって母とは、レースのカーテン越しに垣間見る瘠せた可哀相なマリアさまといった印象でした。

家庭訪問をして下さったモモヨ先生も、カーテン越しに母と面談したと書いてありました。

モモヨ先生のお手紙には、その日の病床の母との会話が つづられていました。

「近頃、シンイチが私の愛唱歌を勝手に憶えて、遠くから歌ってくれるんですよ」

母は、モモヨ先生にそんなことを言ったそうです。

「どんな歌ですか？」と尋ねたモモヨ先生に、母は、自分は女学生のころから北原白秋の詩が好きで、病に臥せてからは、「里ごころ」の歌ばかり口ずさむようになってしまったとき気づいたら、シンイチまでが歌うようになってしまったんです。あの子は音感がよかごた

るですね、と嬉しそうに言ったというのです。

モモヨ先生のお手紙には、病床で「里ごころ」を口ずさむ母への同情がしるされてきました。お姑さんもいらっしやる嫁ぎ先で長患いをしている肩身の狭さから、ご実家（森長おこし本舗）のことなど思い出されて歌っていらっしやったのではないのでしょうか、と。そして、「お母さまと一緒に泣きました」とも。

そのお手紙の最後に、「森一サンは、憶えていますか？多分、お忘れかもしれませんが、書き添えておきます」

と、その「里ごころ」の詩を書いて下さっていたのです。

笛や太鼓に さそわれて

山の祭りに来てみたが

日暮れはいやいや 里恋し

風吹きや 木の葉の音ばかり

母さま恋しと 泣いたれば

どうでもねんねよ お泊まりよ

しくしくお背戸に出て見れば

空には寒いあかね雲

雁（かり） 雁 棹（さお）になれ 前（さき）になれ

お迎（むか）ひたのむと 言うておくれ

それは、私が日頃、浴槽などで鼻歌まじりに歌っていたあの歌でした。ただその歌を、いつだれに教わったのかは不明のまままで歌っていたのです。もちろん、「里ごころ」という歌のタイトルも知りませんでした。

その謎が、モモヨ先生のお手紙ですべて氷解したのでした。

さすがに、涙を禁じ得ませんでした。

薄倅のまま短い生涯を閉じた亡母への追慕の涙でもありました。しかし、それ以上に私は、五十年の歳月を越えて、一人の教え子のために、大昔の家庭訪問の小さなエピソードを忘れずにいて下さって、いまだ字が書けるうちに、それを書き送って下さった老恩師のご恩情の深さに泣かされたのです。

日本の教育を支えたのは、モモヨ先生のような教育者の存在でした。

「二十四の瞳」の大石先生もそうでしたが、

当時の先生は、生徒のひとりひとりが背負った不幸を助けることはできないけれど、生徒と共に、一緒に泣いてやるのができたのです。生徒と一緒に泣いてやる。それが一番大事なことだということを、モモヨ先生のお手紙からふたたび教わりました。

いまでも、生徒の身になって親身に関わってくださる先生方を私は多く知っています。

生徒のみなさんには、こうした素晴らしい先生方との出会いがあることを祈ります。

人生は、出会いです。

恩師との出会い、友人との出会い、よき伴侶との出会い、そして、たったひとつの歌でさえ、人生を豊かにしてくれることがあるということを感じておいただければ幸いです。

**長崎っ子に贈る50の話**

平成21年3月 発行

発行者 長崎県教育委員会

〒850-8570

長崎市江戸町2番13号

TEL 095-824-1111 (代)